
前夜 ~イブ~

伊之口浩作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前夜 ～イブ～

【Nコード】

N2460A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

赤い満月の夜のこと、返り血に染まる女性と、得体の知れない怪物の死体。この日を境に、主人公と女性の戦いが始まる。

序章 第一話 赤い月（前書き）

この小説は神聖龍さんから元ネタを頂きました。

序章 第一話 赤い月

その日の満月は、何故か赤く輝いていた。

暗い路地裏に一人の少女。歳は十五、六程。髪は黒く肩まである。端正な顔つきで瞳は紅い。白い着物を羽織った彼女の腰には、一振りの業物と諸刃の剣が差されていた。

その少女の後ろには、得体の知れない魔物が数頭。

彼女は前傾姿勢で二本の刀剣を押さえながら走り、魔物達は四足歩行で彼女を追い駆ける。

「ギャース！」

魔物達は奇声を放ちながら彼女を追いつめてゆく。

彼女は必死に逃げるが、着物と草履なので走るのにすら難儀する。追いつかれるのは時間の問題だった。

「あっ！」

突如、彼女は空き缶を踏み、滑って転んだ。

彼女が地面にひれ伏す間に、魔物達は彼女との距離を詰めていく。
「くっ！」

彼女が身を起こしたとき、彼女は魔物達に囲まれていた。

『ガLLLLLLLL……』

魔物達は鋭い爪牙を剥き、今にも彼女に飛びかかりそうだった。

彼女は紅い瞳で、魔物達をぐるりと睥睨する。まるで、品定めをするような眼だった。

そして、一言。

「来なさい」

端正な顔つきに似合わず、かなり肝が据わっている様だった。

彼女の言葉を理解したかどうかは定かではないが、一頭の魔物が彼女に飛びかかった。

彼女は腰の業物に手をかけ、そして、一閃。

その後、飛びかかった魔物は頭と胴体を切断され、大量の血飛沫を撒き散らした。魔物の首は宙を舞い、胴体とは別々に落ちる。

魔物は頭部を落とされながらも、残った胴体で醜くあがく。彼女はそんな魔物の胴体の左側に、業物を突き立てた。

刀は魔物の胴体を貫いた。限界まで張りつめた革袋を破いたかのように、大量の血飛沫が踊る。

彼女は魔物の返り血に染まりながら、残りの魔物を見る。直後、彼女の紅い瞳が光った。

一瞬の戦慄のあと、残りの全ての魔物の体から大量の血が噴き出し、各々バラバラの肉塊になった。

彼女は赤い満月を見上げる。

「厄介な事になったわ……」

赤い満月は、その輝きを増していた。

序章 第一話 赤い月（後書き）

いやー、なんだか恥ずかしいです。表現が稚拙ですね。なんだか、暴力的な単語を並べてるだけな気がします。本当にすみません。

序章 第二話 出会い

「お疲れさまでしたー」

男はそう言いながら会釈し、搬入口のドアノブを回す。

「お疲れさまー」

程なくして返事が来る。中年男性の低くしゃがれた声。

男は再び会釈をしてドアの外に出た。

男は深夜の繁華街を歩く。

数分前にバイトを終え、今は最寄り駅まで徒歩で移動中だ。

「ふあゝ、今日は疲れた」

男はあくびしながら言った。

男の名は足達^{あたちむと}夢斗といい、高校三年生である。

夢斗は重い足取りで駅へと向かう。

「はああゝあ。明日ガツコーだりいなあ……」

時刻は既に午後十二時を回っていた。労働基準法などお構いなしで、かなり遅い時間までバイトをしている。

夢斗はあくびをした拍子に、ふと、夜空を見上げた。

「……ん？」

月が赤く見えた。

「なんだこりゃ……」

彼は一旦立ち止まり、眼を何度かぱちくりしてから再び夜空を見上げる。目を細めてみたが、やはり月は赤かった。

「……。疲れてんなゝ、俺。つーか、コンタクトが汚れてんだな」
夢斗は赤く見えた月を、自らの錯覚とコンタクトレンズの汚れと受け止め、さして気にもせず再び歩き始める。

彼がしばらく歩き始めて前を向くと、前方十数メートルの所にかにもな風貌の数人組が見えた。数人の内のほとんどが渋めのスーツを身にまとい、残りの何人かはガラの悪い格好をしがに股で闊歩

している。

「うわー、ヤクザ屋さんだよ。参ったな」

夢斗は彼等と面倒事になる事を恐れ、その場で迂回路を模索する。数秒間視線を左右に泳がすと、人一人入れる位の路地が目に入った。「あそこだ」

夢斗は路地に駆け込み、側に積んであったビールケースの陰に身を隠す。身の安全が確保出来ると、好奇心でビールケースの隙間から外の様子を伺う。光り輝くネオンに照らされたヤクザ御一行様は、威圧的なオーラを放ち繁華街を闊歩する。

「怖い怖い。ヤベっ、もう電車が出る！」

夢斗が覗き込んだ時計のデジタル画面には『00:38』と表示されていた。電車が出るのは零時四三分。走れば、まだ間に合う距離である。

彼は路地裏を走り出した。以外とこの路地裏は、駅までの近道だったりする。

走り出してから程なくして、少し開けた空間に出てきた。

「ん。誰だ？」

夢斗の視界の先には、一人の女性が立っていた。

背格好は夢斗より少し低いくらいだろう。端整な顔つきに肩まで伸びた黒髪と、着物の襟元から覗くうなじが印象的だった。女性の腰には、何やら細長い物が二本、帯で挟むように差しており、着物は赤と白のマーブル模様だった。

「珍しいな、こんな所に人が……。ウツ！ 何だこの臭いは！」

女性との距離がかなり詰まったとき、夢斗の鼻腔を強烈な悪臭が襲う。夢斗はあまりの激臭に、思わず鼻を押さえその場にかがみ込む。

「！」

夢斗がかがんで地面を見た瞬間に、夢斗はこの世の物とは思えない光景を目の当たりにした。夢斗の足下には無数の肉片と、大量の鮮血がばらまかれていた。

「なんなんだよ……、これ……」

夢斗はあまりの無惨さに後ずさりする。そのおり、着物の女性が夢斗の方を向いた。

「誰？」

彼は声の方を見た。

直後、夢斗は更なる驚愕と出会うことになる。女性の着物の模様はマーブルなどではなく、返り血だったのである。その証拠と言わんばかりに、女性が手にしていた刀には、鮮血が滴っていた。赤い月に照らされた刀身は大量の鮮血を被り、てらてらと残虐な輝きを放っていた。

「君がやったのか？」

夢斗は気を失いそうなほど強烈な臭いに襲われながらも、やっとの思いで声を出す。

「そうよ」

女性は刀を一閃させ、まわりついた血を払い刀を鞘に納める。手つきからして、相当な手練れである事が見て取れた。

「これは一体……、何なの……？」

夢斗は足下の死体を見渡す。ぶつ切りになって血溜まりに浸る死体は、原型を留めていない。

「アナタが知る必要はないわ。ここで私と会ったことは忘れなさい」
女性はすたすたと歩き始め、夢斗の眼前に手のひらをかざした。

「え？」

夢斗が不思議に思っている間に、女性は何やら呟き始めた。

「ここでのことはわすれよう」

「ウヨレス……ワハトコ……ノデココ」

その後、一瞬の閃光が夢斗の視界を真っ白にさせる。網膜に、ちらちりと焼き付くようだった。

「!？」

夢斗が閃光にひるみ目を開けると、そこは女性と出会った路地裏だった。ただ、その時の時刻は既に午前六時過ぎで、周りの死体と

血飛沫は片付けられており、彼女の姿もなかった。

「な、何だったんだ？」

夢斗はひたすら立ち尽くすだけだった。

序章 第二話 出会い（後書き）

ご意見、ご感想等がありましたら、ぜひともメッセージをよろしく
お願いします。

第一章 第一話 路地裏への入り口

夢斗はその後、いきなりの出来事に戸惑いながらも、一旦帰宅し、いつも通りに登校した。

「夢斗、おはよ」

教室に入ってきた夢斗に声をかけたのは、夢斗の彼女の小出園美こいでそのみだった。園美はセミロングの茶髪を、肩の辺りからウェーブをかけている今風の少女である。

「ああ、おはよ」

夢斗は軽く返事をし、自分の席に着いた。

ふと、今日の未明の出来事を思い出す。夢斗はその事を園美に訊いてみた。

「なあ、園美。昨日、月見た？」

「え？ いきなりどうしたの？」

園美は突然であり、どうでも良すぎる問いに驚く。

「いいから、どうだった？」

「見てないけど、どうかした？」

「そうか……、わかった、ありがとう」

どうやら、取り越し苦労か変な夢なのだろう。そう思うと、胸のまだかまりが取れるようで心地よい。

夢斗がそう感じた直後、教室に担任の教諭が入ってきた。

「おい、お前ら。早く席に着けー」

妙な事に、授業中の夢斗の脳裏に昨夜の月が蘇る。

（なぜ、月が赤かったんだ？）

教師の言葉もそっちのけで思案にふける。

そもそも、何故赤く見えたのだろう。月は元々、太陽の光を反射して光っており、自ら光を発している訳ではない。それが赤く見えたとこの事は……？

(一体……、なぜ……)

自分の知っている最大限の知識と思考をフル回転させるが、答えの糸口は全く見あたらない。考えれば考えるほどに、思考の堂々巡りにはまってゆく感覚に陥る。

そのおり、夢斗の視界が急に鮮明さを帯び始めた。霞んだ情景が透き通ってゆき、頭の中の曇りが解ける。

「では、この訳を……。はい、足達君、答えてみて」

夢斗を思考に待ったを掛けたのは、教師の声だった。

英語担当の女性教師の顔が視界最果てに映り、彼女の声が不可解な程良く聞こえる。

「足達君」

教諭に一括された夢斗は、飛び起き様に叫んだ。

「月が赤い！」

教室が笑いの渦に包まれる。その中心に居たのは、紛れもなく夢斗であった。

その日の放課後。夢斗は園美と一緒に、駐輪場まで歩いていた。

「あー、もう。国松ウザ過ぎ！」

園美はひどく気が立っていた。昼休みに担任に呼び出され、頭髪について厳しく注意を受けたからである。

「まあまあ、そんな怒るなって」

夢斗は園美をなだめる。

「うん、実はもう慣れっこなんだけどね」

園美は手の裏を返し、平然とした様子で答えた。

二人が駐輪場に着き、各々、自転車の鍵を外してるときに園美が口を開いた。

「夢斗。今日もバイト？」

園美は既に鍵を外し終え、自転車を手で押して夢斗の近くまで来ていた。

「ああ、そうだよ」

夢斗がそう言った直後、夢斗の自転車の鍵が外れた。

「あんまり、遅くまでしない方がよいよ。今日みたいなことになると、アタシがはずかしいから」

夢斗はその日の授業中の出来事を思いかえすと、何も反論することが出来なかった。

「じゃね。アタシも今日バイトあるから」

園美はそう言つと、サドルにまたがり、自転車をこぎ出す。

「じゃあな」

夢斗がそういうと、園美は一旦振り返って手を振った。

「お疲れさまでしたー」

夢斗はそう言つて、搬入口のドアノブを回す。

「お疲れさまー」

程なくして、店の奥から返事が来る。

夢斗はそれが聞こえたことを確認すると、そそくさと店を後にした。

「ふいー、今日も疲れたなー」

夢斗は無意識のうちに、空を仰ぐ。

月は、今日も赤かった。

何かを暗示するかのように、妖しく輝く赤い月。夢斗はしばらくの間、赤い月に見入っていた。

「そついや、昨日も赤かったな……」

大体、何故二日続けて赤く見えるのだ？ 疲れか？ いや、それにしては赤さが強すぎる。それこそ、月本来の彩りを一切合切取り替えたみたいだ。

「ええい、くそ。もういい、月は見ない」

思考のもやを振り払うようにして頭を振ると、そのまま駅に向けて歩き出した。

と、そこで、昨晚の事を想い出す。そのきつかけとなったのは、昨日も見つた例の一行がいたからだ。相変わらず、周囲に対して歪曲

した威厳を放ち、無言の脅迫で通りを染めている。

(搬入口を出て繁華街へ行き空を見たら、赤い月が出ていた。前からヤクザ屋さんが来た。彼らを避けるために路地裏へ逃げた。そして……)

夢斗は思い出すのを止めた。いや、思い出せなかったのである。

(あれ……)

どんなに思い出そうとしても、路地裏へ逃げた後は、自分は朝日に照らされていた。まるで、記憶そのものをそっくりそのままえぐり取られたかのような感覚。確かに何かがあるのに、その何かが見付からない。

「何で……、なんだ……!?!」

ノートに何かを書いたのだが、それが作為的に消されている、そんな間隔だった。どうして、何かが書かれていたと認識出来るかは、紙に筆圧による形跡が残っていたからだ。昨日というページの一部が、綺麗に消し去られている。

「ここからの記憶がない」

夢斗が振り返った先には、昨日逃げ込んだ路地裏への入り口があった。

彼はビールケースを蹴飛ばして路地裏へと走り出すと、その闇へと消えた。

第一章 第二話 邂逅

夢斗は走る。くり抜かれた記憶の置き場所を求めて。

そこがどこかは解らない、思い出せない。けど、何もしないよりはましだ。何より、自分の記憶がくり抜かれた事への気味の悪さから逃げたかった。だから、今、こうして走っている。

夢斗が走り出してから程なくして、路地裏の少し開けた空間に出た。

「はあ、はあ、はあ……」

両膝に手を付き、荒げた息を吐き出す。

ビルとビルに囲まれ、無機質な壁やパイプが支配する空間。そこに彼はいた。

「……」

夢斗はしばらくの間、そこに立ち尽くしていた。

ふと、月を見ようとして空を仰ぐ。しかし、月は見えず、変わりに得体の知れない生き物がビルの屋上に立ち、月の光を遮っていた。

「なんだ……、アレ……？」

息を呑む夢斗。ビルの屋上のそれは、彼を真っ直ぐに見据えているようだった。

「逃げなきゃ……」

言い知れぬ恐怖に圧倒される。繁華街の例の一行など問題にならないような気がした。夢斗は振り返って走り出そうとしたが、足が動かない。蛇に見込まれた蛙さながら、動くことが出来なかった。

瞬き一つ許されなくなった夢斗の眼には、謎の生き物が映る。

腰を曲げた二足歩行の生き物は、やたらと肩が張っており、頭部からは角らしき物が生えていた。腰を落とし、腕をだらりと下げ、首は不安定に揺れている。

次の瞬間、生き物の頭部から二つの光が放たれた。

謎の生き物は曲げていた膝を一気に伸ばし、夜空へと跳躍した。

虚空に躍り出た生き物は、下げていた腕を大きく開き、鋭い爪を露わにした。

「あ……、ああ……」

夢斗は動くことが出来ず、その場で尻餅をついた。

生き物の爪が白く光り、二つの光が真っ直ぐに夢斗に向けられる。二回の地響き。それが生き物の作り出したものだとして認識するのに、さほど時間は要さなかった。

生き物は夢斗の目の前に着地。その衝撃で、足下の埃やごみが巻き上げられる。生き物の身長は夢斗より遙かに大きく、優に三メートルはある。二つの光が間近にあった。

夢斗はここにきて初めて、二つの光が生き物の眼であることを知った。

二つの光がより一層の輝きを見せ、生き物の爪が高く掲げられる。

「う……、うわああああ！」

夢斗は悲鳴を上げ、両腕で自らをかばおうとする。

そのおり、夢斗の頬を撫でる。一筋の風が吹いた。

夢斗は恐る恐る、固く閉じた瞼を開ける。すると、そこには着物の女性が、刀で生き物の爪を防いでいた。

「早く逃げなさい！」

女性の赤い眼が夢斗を捉える。

夢斗はいきなりの事に戸惑い、何も出来なかった。

「早く！」

女性は右足で、夢斗の事を軽く蹴飛ばした。

夢斗はそれで我に返り、素早く起きあがると女性と生き物から離れた。

女性は夢斗が離れたことを見届けると、おもむろに刀を一閃させ、生き物の右手首を切り落とす。

「ぎぎやああああ！」

生き物は奇声を上げた。手首を失った腕の切り口からは、赤黒い血がダラダラと流れ落ちる。

女性はひるむことなく、再び刀を一閃。すると、今度は左肩から右の脇腹にかけて斬りつけた。手首の時と同じく、赤黒い血が切り口から溢れ出る。

「まだまだ」

女性が一步踏みだして切り上げると、生き物の右腕は完全に無くなっていった。切り口からの出血は止めどなく、切られた腕はどさりと落ちる。

生き物は苦痛に身悶えしながら後ずさり、妖しげな光を放つ眼で女性を見た。直後、生き物は残りの腕で女性に襲いかかる。

女性はその一撃を半身でかわすと、生き物と一気に距離を詰めた。そして、再び一閃。

夢斗が女性と生き物が密着状態にあることを悟ったとき、生き物の胴体が斜めにずれ落ち、吹き出す血と共に月夜に照らされている光景を見ていた。

夢斗が女性の強さに圧倒されている間に、女性はずれ落ちた生き物の頭部に刀を突き立てる。頭部を貫かれ、生き物の眼から光が消え、それとほぼ同じくして刺した部分から血が飛び出る。

「何が……、どうなって……」

夢斗がそう言つのと、生き物の残りの体が倒れるのとは、ほとんど同時だった。

第一章 第三話 邂逅 その二

赤い月に照らされ、赤黒い血を垂れ流す死体を背にして、女性は夢斗を見下ろしていた。

「怪我はない？」

女性は刀の血を払い、手慣れた手つきで鞘に納めた。

「あ、はい」

夢斗はそう言って立ち上がると、ズボンに付いた砂埃を払い落とす。

「アナタと会うのはこれで二回目ね。残念だね。アナタは私と昨日であったことを思い出す」

夢斗ははじめ、女性の言ってる意味が分からなかったが、その答えをすぐに知り得た。

失った記憶のページが、夢斗の中へ舞い戻る。穴の空いたジグソーパズルが埋まるように、点と点が繋がる。

(そうだ、俺は昨日、この人と出会ったんだ)

夢斗は全てを思い出した。

「訊きたいことがあるでしょう」

女性が言った。

「ああ、山ほどあるさ。まず、キミの名前は？」

「人に名を尋ねるときは、まず自分から名乗るのが常識よ」

「ああ、はい」

女性にそう諭された夢斗は、一度呼吸を整えてから答えた。

「俺の名前は足達夢斗。『夢斗』でいいよ」

「わかったわ。私の名前は『イブ』。深く追求しないでくれると嬉しいわ。呼び方は…、アナタの好きにして貰って構わないわ」

イブは表情を変えることなく言った。

夢斗はここに来て、昨日の女性がイブと同一人物であるという結論に達することが出来た。それにしても、イブに対する不可解なこ

とは多い。

「そうか。じゃあ、イブ、訊きたいことは山ほどあるけれど、それでも良い？」

「ええ、結構よ。ここで二度も会ったのだから、きっと何かの縁でしようね」

「うん、じゃあ、えっと……」

口を開いたのは良いものの、夢斗は何から訊けば良いのか解らなかった。

なぜ、赤い瞳をしているのか。なぜ、そんなに強いのか。なぜ、得体の知れない生き物が現れるのか。なぜ、月が赤いのか。

イブとその周りの事象全てが、疑問となつて夢斗の頭を埋め尽くす。おびたらしい量の疑問を全て問うのは煩わしい、しかし、訊かずには居られない。訊かなくてはいけないということは解っている、だが、何を最初に訊いたら良いかが解らない。

思考に詰まつた夢斗は、気分転換にと何気なくイブの全身を見渡した。顔つきは端整で、麗しい黒髪がそれを一層引き立たせた。年齢は夢斗とさほど離れていないだろう。イブの顔の中で一際異彩を放つものは、間違いなく紅い瞳であろう。深くどこまでも澄んだ瞳は、『深紅』と形容した方がふさわしいであろう。

夢斗がイブを一通り見渡したとき、夢斗の頭に根本的な疑問が湧いた。

「ねえ、君は家とか、着替えとかはあるの？」

イブの服は昨日と同じ物であつた。なぜなら、昨晚浴びた返り血が赤黒く変色していたからである。

「ないわ」

イブは特に躊躇したり口籠もつたりせず、はっきりとそう断言した。イブのあまりに堂々とした返答に、夢斗が戸惑うほどである。

「うん」

イブの堂々たる態度や、異常なほどの強さ、外見などから総合すると、彼女は普通の女性ではないということに夢斗は戸惑うのみで

あつた。

とりあえず、下宿先や着替えのないイブを不憫に思った夢斗は、多少冒険だったがイブにこう切り出した。

「あのさ、良かったら、俺のウチに来ない？」

しばしの沈黙が流れると、イブは表情を変えることなく言った。

「ええ、では、お邪魔させて頂くわ」

そうして二人は、路地裏から抜け出した。

夢斗とイブが居なくなった路地裏では、先刻イブに屠られた魔物の死体から、強烈な悪臭が立ちこめていた。

匿名の通報を受けた警察が明け方に到着したとき、現場に降り立った警官はあまりの臭いの酷さに意識を失った。

悪臭を放つ奇異な死体は、当然の事ながらワイドショーの格好のネタとなった。

第一章 第四話 二人きりの夜（前書き）

タイトルと内容ですが、大した意味は無いです。
R指定などはありません。ご心配なく。

第一章 第四話 二人きりの夜

二人は終電に乗って、夢斗の自宅マンションへと向かった。

初め、夢斗はイブの出で立ちを他人に見られまいと必死だったが、幸いにも、電車の乗客は少なく、二人の乗った車両には夢斗とイブの二人のみだった。

イブの所持している二振りの刀剣は、路地裏に都合良く落ちていたギターケースに隠したので、駅員の目をまんまと欺くことに成功した。

イブは路銀を持ち合わせていないということなので、夢斗がイブの分を払いそれで事なきを得た。

乗車駅から十数分のところの駅で、二人は下車し、駅の駐輪場に停めてある夢斗の自転車に二人乗りすることにした。イブは着物だったので、自転車の荷台に横向きに座ることを余儀なくされたが、それはあまり大きな問題ではなかった。

「着いたよ」

夢斗は自転車を止め、イブを下ろす。

「俺の部屋はこの三階の三〇七号室。自転車をとめてくるから、ちよつち待ってて」

自転車を停めるために一旦イブと離れた夢斗は、ひたすら自分への言い訳を頭の中で復唱していた。

（別にやましい気がある訳じゃない。イブは確かにキレイだけど、服とかが汚れてて可哀想だし、泊まる所が無いって言うんだから、一晩くらい泊めてもバチは当たらないだろうし……）

一通りの言い訳を終え、夢斗はイブの元へと戻った。

「行こう」

夢斗はそう言って、イブを自室へと案内する。

エントランスを抜けエレベーターのボタンを押す。程なくして到着したエレベーターは薄暗かった。

エレベーターが三階に到着し、二人は無言でエレベーターを下りた。

「今、鍵を開けるね」

夢斗はポケットからドアの鍵を取り出し、鍵穴に滑り込ませた。鍵を百八十度回すと、おなじみの金属音が響いた。

夢斗はドアを開け、靴を脱ぎながら電気のスイッチを入れ、中に入ってイブに入室を勧める。

「汚い所だけど入って」

「お邪魔します」

イブはそう言ってドアをくぐり、草履を脱いだ。

「とりあえず、シャワーでも浴びたら？ 服とかも替えなきゃいけないし、髪とかもカピカピでしょ？」

イブの黒髪には、所々血がはねており、そこで固まって赤黒くなっていた。

「ありがとう。着替えはあるの？」

「ああ、姉貴の服があるよ。サイズが合うかはわかんないけど、とりあえずそれを着て」

夢斗はそう言って、風呂場へのドアを開けた。

「姉貴の部屋はここだよ。着替えは適当なヤツを着ていいよ」

夢斗の姉は去年自立し、今は都内の大学で弁護士になるための勉強をしている。

「わかったわ」

イブはそう言うと、夢斗の姉の部屋へ入っていった。

イブは部屋に入るなり、クローゼットの中に目を通す。

「風呂は隣だよ。なにかあったら、俺は向かいの部屋にいるからイブは夢斗の方を見て一回うなずくと、すぐに服選びに戻った。

夢斗はドアを閉め、自分の部屋のドアを開けた。

夢斗は制服を脱ぎ捨て、適当な私服に着替えると、ベッドの上に横たわった。

「ふー。疲れた……」

夢斗は携帯を取り出すと、新着メールの確認をした。

携帯の画面に事務的な文面が表示される。

『夢斗へ 明日からカレドニアへフライトです またしばらく帰って来れません お父さんも一緒です くれぐれも体に気を付けてください 母より』

夢斗の母親は国際線の客室乗務員、父親は母親と同じ航空会社のパイロットをしており、三ヶ月に一度くらいしか顔を合わせることはない。先述の通り、姉は既にこの家には居ないので、実質上夢斗は一人暮らしなのだ。当然の事ながら、部屋は荒れ放題で人を招き入れることが出来るような部屋ではない。

「さて、これからどうしようか……」

イブについて訊くことはたくさんある。とりあえず、風呂から出たら訊いてみようかと夢斗は考えていた。

「イブ……。『前夜』って意味か……。眼が紅いのは、カラコンかな……？」

夢斗はイブについて思案を巡らせる。

夢斗が耳を澄ますと、風呂場の方から衣擦れの音が聞こえてくる。

「眠い……」

夢斗の記憶はそれまでだった。夢斗はそのまま、朝まで目を覚まさないかった。

第二章 第一話 噂

夢斗は目に掛かる朝日で目を覚ました。

「ん……。もう、朝か……」

ベッドから起きあがると、枕元のデジタル時計に目をやる。

時計は七時十二分を差していた。

「そっだ！ イブは……！」

夢斗はイブの事を思い出した。部屋中を駆け回って探したが、置き手紙しか見付からなかった。

『色々とお世話になりました。お借りした服は洗ってしまっておきました。もう合うこともないでしょう。では、有り難う御座いました、お元気で。』
イブ

夢斗はその手紙を見詰め、しばらくの間立ち尽くしていた。

「所詮、この程度の関係だったってことか……」

吐き捨てる様にそう言うってから姉の服を元の部屋に戻すと、制服に着替えて学校へと向かった。

夢斗が登校すると、学校中の生徒が何やら小声で話し合っていた。

「……知ってる？ ……で……たって話」

「うん。警察……、現場検証……」

「……立ち入り禁止……。殺人……？」

夢斗は初め、近所で重大な事件でも起きたのかと感じ、対岸の火事と言わんばかりに気に留めなかった。

「夢斗、おはよー！」

夢斗が席に着くと、夢斗より先に登校していた園美が話しかけてきた。

「ねえ、夢斗は知ってる？」

「ん、何が」

「知らないの!?!」

園美の驚き様はかなりのものだった。

「園美。何かあったのか？」

夢斗がそう訊くと、園美は一呼吸置いてから答える。

「あのね、昨日この辺で殺人事件があったんだって」

「うん、そこまでは知ってるかも。それで？」

夢斗は更に訊いた。

「その事件が起きた場所が、夢斗がバイトしてるとこの側なの」

「へえ、そうなんだ。そりゃ大変だ」

夢斗はまだ気付いていなかった。噂の真相は殺人事件などではないことと、その噂の中心に居るのが自分自身であることに。

イブは一人歩いていた。

手には昨日拾ったギターケース。中には二本の刀剣が忍ばせている。

服はいつもの白い着物。夢斗の家で洗濯をしたので、汚れは一つも見あたらない。

目指すは夢斗と出会った路地裏。そこへ向かって、線路沿いをひたすら歩く。

「まだまだ遠いわね」

電車での移動時間はたかだか十数分だが、それを歩くとなるとかなりの距離である。

日は刻々と高くなり、じりじりとイブの肌突き刺さる。

「熱い……」

イブはそう言って、着物の裾で汗をぬぐった。

閑静な住宅街の一角にある線路沿いの道を、イブは歩き続けた。

第二章 第一話 噂（後書き）

大分短く収まりました。まあ、それがどうしたって感じですけど
(^ | ^ ;)

第二章 第二話 二度目の邂逅(前書き)

しばらく戦闘シーンはありません。あしからず、そして、すみませ
ん(^-^;))

第二章 第二話 二度目の邂逅

夢斗は終業の鐘が鳴ると、直ぐさま校門を飛び出てバイトへと向かう。

自転車に乗ろうとしたとき、園美に声をかけられた。

「夢斗。バイト、頑張ってるね」

「ああ。じゃあね」

夢斗はそう言って自転車をこぎ出した。

夢斗はバイト先に向かう間、色々と集めた情報について洗って見た。

どうやらその死体は、夢斗のバイト先付近の路地裏で発見され、発見時には強烈な異臭を放ち、人間とはほど遠い外見だったという。死体は体の部位を切断されていたという。切断された部位も、死体付近に転がっていたらしい。

この時点で夢斗は薄々勘づいていた。

「早くしないと」

夢斗は静かに呟き、自転車を飛ばした。

イブは一日かけて昨夜の乗車駅にたどり着いた。

「ここね……」

イブは静かに路地裏へと向かう。

夕暮れ時の繁華街はやつとにぎわいだしたと言っ感じで、人気もそれなりにあった。イブはそんな人並みを掻き分けるようにして先へと進む。

路地裏への入り口に着いたとき、そこには黄色いテープが張られており、周りには数人の警察官が警備に当たっていた。

イブは直感した。昨夜の出来事が明るみに出たと言っことを。

「まずいわ……」

イブはさっと身を翻す。

夢斗は息を切らしながら走る。

向かう先はバイト先もとい、あ那时的路地裏。

「急がないきゃ」

今日のバイトは無しと言うことだった。何でも、経営が悪化したらしく、しばらく店を閉めるとのことだという。

「間違いない。絶対アレだ」

夢斗の疑念は確信へと変わっていた。

人混みを押しのけるようにして路地裏へ向かう。

「あつー!!」

夢斗が路地裏の入り口に着いたとき、そこには数名の警察官と黄色いテープが張られていた。

「チクシヨウ！ もっと別の入り口は……」

夢斗は辺りを見回す。

「あれは……」

夢斗の眼にいつか見た人物の後ろ姿が映る。白い着物に肩くらいまでの黒髪。そして何より、着物に不似合いなギターケース。間違いない、イブだった。

「イブー!!」

「夢斗は声を張り上げる。」

イブは振り返り、夢斗の姿を探すかのようにキョロキョロする。

「イブ、こっちだ」

「夢斗はイブに駆け寄る。」

「夢斗……」

イブは夢斗に気付いた。

「イブ、大変な事になったみたいだ」

「夢斗は膝に手を当てて息を切らす。」

「そうね。昨日私が片づけをせずつたせいだわ」

「イブは至って冷静だった。」

「どうするの？」

夢斗は顔を上げてイブに訊く。

「こんな大事になってしまっっては、噂の収束には時間がかかりそうね」

イブはそう言って振り返る。

「おい、どこ行くんだよ？」

夢斗はイブを引き留める。

「何処って、あの路地裏よ。別の入り口を探すの」

イブはそう言ってから歩き出す。

「待って。今行ったらケーサツに見付かる。イブの持ってる剣が見付かったら尚更厄介だ」

夢斗はイブの肩を掴む。

「だったら！ どうしろというの!?!」

イブは夢斗の手を振り払って言う。

「どうしろって、そりゃあ……」

夢斗は口籠もる。

「何も無いのなら、ワタシを引き留めないで。ワタシはアナタと違ってやることあるの!」

イブは行こうとした。その時だった、夢斗の脳内にアイデアが浮かんだ。

「待て！ 今行ってもダメだ。俺に考えがある、俺に付いてきて」

イブはしょうがなく夢斗に従うことにした。

第二章 第三話 襲撃

夢斗とイブはとある雑居ビルの裏口の前に立っていた。

「待ってて」

夢斗はそう言って裏口のドアを開ける。

ドアに鍵は掛かっておらず、難なく開いた。

「ここだよ。さあ、入って」

夢斗はそう言ってイブをいざなう。

イブが入ったことを確認すると、夢斗はドアを静かに閉めた。

夢斗がイブをいざなった先、そこは、夢斗のバイト先の中華料理店の厨房だった。厨房はそれなりに片づいていて、調味料の匂いが立ちこめている。

「ここは俺のバイトしてた所さ。しばらくはここにいれば大丈夫」

夢斗はそう言って、大型冷蔵庫の隣の小さなドアをノックする。

「店長……、はいります」

夢斗は静かにドアを開けた。すると、強烈な酒臭さが夢斗を襲う。

夢斗は一瞬たじろぎ、鼻を押さえて室内を覗いた。すると、店長と思しき中年の男が、日本酒の空き瓶を抱えて眠っていた。

(店長め、経営が悪くなってヤケ酒かよ)

夢斗は心の中で悪態をつき、イブの方を見た。

「とりあえず、警察がいなくなるまでここで時間を潰そう」

イブは夢斗の言葉に黙ってうなずいた。

二人が店に入ってから数時間、二人の間に会話は無かった。

夢斗は客席のテレビを付け、情報収集に努めた。

『発見された死体は体長三メートルくらいの人形で、非常に鋭利な刃物で切られたものと思われます』

ニュースキャスターは淡々とニュース原稿を読み上げる。

『死体は人間とかけ離れた形状から、新種の猿ではないかと思われ

ていますが、未だ確信を得ません。それでは次のニュースです。今年のインター杯決勝は……」

キャスターが『謎の死体発見』のニュースを読み終わると、夢斗はテレビを消してイブの方を向いた。

「多分、というか絶対に、俺等が関わってるよな？」

イブは夢斗の後ろの席に座っていた。

「ええ、そうよ。でも正確には、関わってたのはワタシだけよ。アナタは巻き込まれただけ」

イブの口調はあくまで冷静だった。事件の当事者だということに、まるで他国の災害のニュースを見ているような風だった。

「う……。そう言われるとそうなんだけど……」

夢斗は口籠もる。そのおり、イブが夢斗に訊いた。

「それよりも警察はどうなったの？」

「ああ、そうだ。どうなったんだろう」

夢斗はそう言うと、非常階段を登るために一旦席を外す。搬入口のドアが開き、階段を登る音が店内に響く。

イブは夢斗がいないうちにギターケースから得物の刀を取り出した。

刀を抜き、刀身を片目で見定める。刀は所々血が貼り付いており、輝きが鈍っていた。

「手入れをしないとだめね……」

イブはそう言って刀を鞘に納める。そのおり、夢斗が帰ってきた。「ダメだ、警察がまだ見張ってる」

夢斗は両手をクロスさせて言った。

繁華街のビルの屋上。そこには、昨日イブが屠ったものと同じ外観の生き物。

「しゃげえええっえ……」

生き物は口を開き、その中のまばらな牙を露わにした。ぼたりぼたりとよだれが落ちる。

「グルルルルルル……」

昨日の生き物の周りには、イブが最初に屠った獣が数頭。鋭い牙を剥きだし、奇怪な唸り声を上げる。

赤い月に照らされ、鋭利な爪牙が鈍く輝く。

そのおり、向かいのビルの非常階段に夢斗が現れる。

生き物たちは一斉に夢斗を見る。

夢斗は生き物に気付くことなく、路上の警察官と見物人の有無を確認し、すぐに階段を下っていった。

生き物たちは意を決したかのように、一斉にビルに向かって跳躍した。

「来る……」

夢斗が腕をクロスさせたとき、イブは何かの気配を察した。

「え、何が……」

夢斗は気配を感じることが出来ず、イブの言葉に戸惑う。

「アナタは隠れていて。危険よ」

イブはそう言って、今し方鞘に納めた血刀を抜いた。イブは目を瞑り、先進を統一させる。

夢斗は訳が解らず、呆然と立ち尽くしていた。

「伏せてっ！」

イブがそう言うのと、ドアが吹き飛ぶのとはほとんど同時だった。

第二章 第四話 初陣（前書き）

久々の戦闘シーンです。戦闘シーンやそのほかについてのご意見などありましたら、遠慮無くご指摘の方お願いします。> m) (m <

第二章 第四話 初陣

横六〇センチ・縦二メートルの鉄の板は、歪な形にひしゃげて真っ直ぐ飛ぶ。

イブはそれを横に逸れてかわした。

「うおっ!!」

夢斗はとっさに調理台の陰に避難した。

扉が夢斗の上空を飛び越した直後、三頭の獣が店内に侵入する。

イブは最初の一頭をねらい澄まし、血刀を振るった。威勢良く肉を切り裂く音と、鮮血が床に落ちる音が響く。

「うわぁ……」

夢斗は調理台から頭だけを出し、その光景を目の当たりにしていた。

獣は上半身と下半身を切断されたが、まだ死んではいなかった。

「夢斗っ!!」

イブが夢斗の名を叫んだ。

「アナタは隠れてなさい!」

イブはそう言いながら、獣の眉間に血刀を突き立てる。噴水のように鮮血が吹き出す。

「でも……」

「いいから。早く!!」

イブはそう言いながら、二頭目を切り伏せた。今度は首を一刀両断。立て続けに残りの胴体を両断した。二頭目は三つの肉塊となり、自らの血を撒き散らす。

「イブ。後ろ!」

最後の一頭がイブの背後から前肢の爪で襲いかかる。

イブはしゃがんでその一撃をかわすと、血刀の刃を後ろに向けて垂直に立てた。

獣がイブの血刀を通りすぎると、ところてんの様に分離した。二

つに別れた獣の体は、二つ同時に床に落ちた。

「はあ、はあ……」

三頭目を切り伏せ、立ち上がったイブは膝に手を付いて喘ぐ。

「イブ……、どうしたの？」

夢斗は調理台の陰から姿を現し、息を切らすイブに近付く。

「どうやら、いつもより疲れてるみたいね。昼の間、歩きづめだったから」

イブは疲労の色が隠せないでいた。

「大丈夫？」

「少し無理かもしれないわ。夢斗、もう一つの剣を取って」

イブは姿勢を正して言った。

「えっ！？ どういう事？」

「アナタに頼るつもりはないけれど、万が一の時の為よ。出来る限りアナタの手は借りないようにするわ」

イブはそう言って、裏口を出た。

夢斗はイブの背中に問いかける。

「待って。まだ何か居るの？」

イブは足を止め振り返った。

「ええ。まだ、居るわ」

日は既に落ちていた。今は、赤い太陽に替わって赤い月が夜空に輝く。

二人は屋上への階段を登る。イブが前、夢斗が後ろという陣形だった。

屋上にたどり着こうというときに、イブがハンドシグナルで『待て』と命ずる。夢斗は黙って従った。

イブは一段一段ゆっくりと上り詰めて行く。屋上の数段手前のごころで足を止め、屋上の床と同じ目線で辺りを伺う。

「夢斗。剣を抜いて」

イブは目線を反らさずに言った。

イブにそう言われた夢斗は、手にした諸刃の剣を鞘から抜く。鞘と剣がこすれ、澄みきった金属音が流れる。

「鞘はゆっくりと置いて」

黙ってイブに従う夢斗。

そのおり、イブの左手が肘から上に曲がった。『来い』という合図である。

夢斗が剣を構えて階段を登ると、イブは屋上に飛び出した。夢斗は急いでイブの後を追う。

「イブっ」

夢斗が屋上に着いたとき、イブは獣を屠っていた。

「夢斗。ワタシの後ろに付いて。止めはアナタが刺して」

イブはそう言って走り出した。

イブは走りながら獣を切り倒す。

「イブ。待ってくれ」

夢斗はイブの後を追って走り出す。

夢斗が走るコースの先には、幾つかの肉塊が転がってゆく。その一つ一つは、微弱ながら生きており、四肢の末端部はびくびくと痙攣していた。

「止めを。早く」

イブが振り返らずに言った。その間にも、新たな獣を切り倒す。

「止めって……、ええい、こつか!？」

夢斗は戸惑いながらも、イブがやっていたように獣の頭部に剣を突き刺す。

「グオオオオ……」

奇怪な鳴き声と鮮血が同時に発され、獣は事切れた。

皮、肉、骨と生物の組織を貫いていくときの生々しい感觸。血なまぐささと悶え苦しむ断末魔。その両方が彼の五感をむしばみ、言い知れぬ気味の悪さに耐え難い不快感を覚える。

「お、俺は。こいつを殺したのか？」

獣は動かない。無理もない。脳を一突きされれば、生物の許容出

血量を大きく上回る出血が起きるのだ。例え今、薄れ行く意識に沈んでいたとしても、その命は長くない。

「夢斗。戸惑うことはないわ。さあ、次よ」

イブはばっさばっさと獣を切り伏せる。その刀裁きは流麗そのものだった。

夢斗は躊躇しながらも、次々視界に飛び込む死に損ないの獣に止めを刺す。一頭一頭悶え苦しみ、恨めしげに夢斗を見上げながら息絶えていった。

「はあ、これで最後だ……」

夢斗が三頭目を始末した。

夢斗は全身汗だくになっていた。その汗のほとんどが、俗に言う『嫌な汗』というヤツだった。そして、周囲に漂う血生臭さ。

「これで終わり？」

夢斗が頼りない足取りでイブに近付き、へなへなとした声で訊く。「いいえ。まだよ」

イブの夢斗の問いに対する答えは『否』であった。それを裏付けるように、イブの見詰める視線の先には昨日の生き物が居た。

隣のビルの給水塔の上に鎮座し、二つの光がこちら側に注がれる。

「まだ居たのか……」

夢斗がそう言った直後、隣にいるイブが膝から崩れ落ちた。イブはその場に膝を付いて息を荒げる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

額からは大粒の汗が溢れ、いかにも辛そうな顔つきだった。

「イブ。大丈夫？」

夢斗はイブの肩に手をやる。

「かなりキツいわ……。夢斗、援護を……」

イブはそう言って、ふらふらと立ち上がる。

「イブ！ 無理だ。ここは逃げよう」

「何を言ってるの！ 逃げるわけにはいかないわ。何としてでもアシを仕留めないと……」

イブはそう言った直後、前に向かって倒れた。地面に付く寸前に、夢斗の腕がイブをかばう。

「イブ……。ここは、俺が行くよ」

夢斗はそう言ってイブを仰向けに寝かすと、両手でしっかりと剣を構えて生き物と対峙した。

まだ綺麗なままの剣の刀身に、妖しく光る今宵の赤い月。

剣の切っ先は、生き物の眉間を真っ直ぐに指し示す。

生き物の首をぐらぐらと揺れ、目からは鈍い光が放たれる。

夢斗は睨みを利かし、一挙手一投足見逃すまいと神経を張りつめ、剣の柄を強く握りしめた。

第二章 第四話 初陣（後書き）

この小説もやっとなん十話目です。私のプロットとしては、二十話三十話くらいの間での完結を目標としているので、まだまだ続きます。おつきあいの方よろしくお願いします（一・一）

第二章 第五話 非力さの代償（前書き）

前話の初陣という漢字は『ういじん』と読みます。
読めなかった方、済みませんでしたm(_____)m

第二章 第五話 非力さの代償

夢斗の視線の先には、昨日の生き物が目を光らせていた。その光は首の揺れに従い、サーチライトのように動く。

「さあ、来い……」

夢斗は静かに呟く。全身の神経を強張らせ、すぐに飛び出せるようにする。

生き物は首の揺れを止めた。

「来る」

夢斗は直感した。

直後、生き物は曲げていた膝を伸ばし、夜空へ跳躍する。空中で腕を広げ、鋭い爪が白く光る。

夢斗は剣を構え、生き物を目で追う。

数秒間の滞空時間が、夢斗にはとてつもなく長く感じられた。

生き物はコンクリートを踏み抜かんばかりの勢いで着地し、床の砂埃を巻き上げながら夢斗に向かって突進してきた。

「くっ！」

夢斗は辛うじて突進を避けると、敵の動きが一瞬停止したのを見計らって斬りかかる。

鋭い一閃。しかし、切っ先の描いた半円の気道を、敵は何喰わぬ顔でかわす。

「速っ」

夢斗の体の側面に移動した敵は、空振りして隙だらけの夢斗に爪を掲げる。

（やられる……）

夢斗がそう悟った瞬間、頬を撫でる一陣の風。イブだった。

イブは敵の爪を血刀で防ぎ、夢斗と背中合わせになって言う。

「アナタには……、無理よ……」

イブの声は疲れ切っていて、まるで覇気がない。

「アナタの出番は終わりよ……。後は任せて……」

イブはそう言って、刀を一閃させた。だが、敵はそれをかわし、殺気立った目で睨む。

「キシャアアアア!!」

敵は両腕を大きく開き、鋭い爪牙を剥き出しにする。

イブはそれにひるむことなく、敵に斬りかかる。しかし、それもかわされる。

「シャアアア!!」

敵の爪がイブを襲う。着物の布と鮮血が闇夜に舞う。

「イブツ!!」

夢斗の体が弾かれたように動き出す。

「うおおおお!!」

夢斗は剣を闇雲に振り回し、無我夢中で敵に突っ込む。

「りゃああああ!!」

夢斗の視界には、得体の知れない生き物しか映っていないかった。視界が敵でいっぱいになった時に、夢斗は剣を振るった。

力任せに一閃。直後に軽い手応えが伝わる。

（かすったか!?!）

彼の疑問の答えは否だった。それを裏付ける形で、夢斗は腕にま暖かい物が掛かるのを感じる。

（何?）

夢斗は自分の腕を見た。すると、自分の腕には敵の鮮血で赤く染まっていた。それを裏付けるように、足下には敵の右腕が転がっていた。

「うわあ!!」

我に返り、数歩後ずさる。顔を上げると、生き物が苦悶の表情を浮かべ奇声を発していた。

夢斗は敵に追撃を加えようと、剣の柄を握り直した。

「はああああ!!」

渾身の力を込めた一撃。

再び手応えの感覚だったが、今度の一撃は敵の腹部を大きく切り裂いていた。切り口からは大量の血が噴き出す。

「うっ……」

臭いは殆ど無かったが、あまりの勢いに夢斗は怖じ気づいた。耳には敵の奇声が木霊する。

（まだ生きてる……）

夢斗は止めを刺そうと、こめられるだけ精一杯の眼力で敵を睨みつける。

「食らえー!!」

夢斗は剣を敵の腹部に突き立てる。しかし、敵はまだ死なずにいる。

「うらあああ!」

夢斗は無我夢中で剣をのこぎりの様に抜き差しする。そのたびに血が溢れ出し、夢斗の体を赤く染める。

水を吸ったスポンジを押しかのように血が吹き出る。血生臭さが段々と色合いを増し、出し入れに合わせるかの様に敵がうめく。視覚以外全ての感覚神経が一時的に停止していた夢斗は、そんな周囲の移り変わりをゆっくりと吟味しているゆとりなど無かったが。

何度切り刻んで空だろつか、夢斗は剣を引き抜いた。敵はその場で空を仰ぐかのように立ち、動きがない。

「やったか……?」

夢斗は敵の様子を伺いつつ、数歩後退する。

しかし、現実には夢斗の理想とは違った。敵がいきなり夢斗を睨み腕を振り上げる。

「くそっ」

夢斗は剣を構える。しかし、敵の方が早かった。

（ヤバイ……）

夢斗が己の運命を悟ったとき、イブが動いた。

イブが敵の太腿に刀を突き刺す。丸太の様な大腿部に刀が貫通し、そのままぎりぎりとし神経を断絶させてゆく。相当な苦痛を与えてい

ることは、敵の感極まる奇声の所為で明らかだった。

「イブ！」

「早く止めを！」

敵は一気に姿勢を崩し、爪は夢斗の目の前で止まっていた。

夢斗ははつと我に返り、剣を握りしめ敵の左胸を狙い澄ます。

「はあああああああ！」

夢斗の雄叫びの直後、敵の左胸を剣が貫いた。

剣を刺した傷口からは血が漏れ、断末魔の叫びが辺りに響く。

夢斗は剣を更に深く刺す。

剣が敵を貫いてから数秒が経過した辺りで、敵の動きがぴたりと止まり、体中の神経を抜き去られたように力無く倒れた。

「はあ、はあ、はあ」

夢斗は敵から剣を引き抜き、息を荒げて立ち尽くす。

「夢斗」

夢斗の耳にイブの声が響く。夢斗は声の方を振り向く。

「怪我は無い？」

そう言うイブの右肩口の着物は裂け、血が滲んでいた。

「俺は無いけど、イブが……」

夢斗がそう言うと、イブは一回傷口に触れて、自分の手に付いた血の量で傷の度合いを確認した。

「問題ないわ。それよりも、コレの片づけが先ね」

イブはそう言って辺りを見回す。

二人の周囲には、先程倒した敵の死体が散乱していた。

「あと少ししたら臭い始めるわ。早く血を洗い落とさないよ」

夢斗はその一言にがやたらと気になり、試しに腕の血を嗅いでみた。腕を鼻に近づけた瞬間に、強烈な臭気が鼻腔で暴れ出す。

「ごはっ！ ごはっ！」

夢斗は咳き込む。

「ここはワタシがやるから、アナタは血を洗い落とさないよ」

イブはそう言って刀をしまい、先程の巨大な敵の側まで歩み寄る。

夢斗は『これ以上臭ったらたまらん』と感じ、水道を探して駆け出した。

第二章 第五話 非力さの代償（後書き）

二章もそろそろ終わりです。

まあ、それがいつになるかの話ですが……。

第二章 第六話 静かなる決意

夢斗の姿が消えたのを確認すると、イブは早速片づけを始めた。二つのビルの屋上は死屍累々の惨状であり、ほのかに臭気が漂い始めていた。

「……………」

イブは目を瞑り、無数の死屍に掌を向ける。

「ケツタ……………カノイタシ……………ネドケ……………イナヤジイロ……………ヒログマ」

イブがそう唱えた直後、死体は溶けるように消えていった。辺りに飛び散った血も、同じようにして消えた。

「痛っ。深いわ……………」

イブは肩の痛みに顔をしかめ、傷口に手をあてがう。『大丈夫』

とは言ったものの、それはイブの強がりで、実際は、かなり深い所まで傷が達していた。着物は溢れ出る血を吸い続け、今や傷の周辺は赤々と染まっている。

「手当をしないと……………」

イブはそう言つても、手当するための設備も道具もない。

「まずいわ……………。出血が……………」

着物は血で染まり続ける。

「くっ」

イブは傷口を強く押さえつけ、その場にへたり込む。

「はぁ……………。くっ……………」

イブは体を引きずるようにして、近くの給水パイプまで移動し、背を預ける。その直後、視界が揺らぎ遠のき、彼女は気を失った。

夢斗は近くの手洗い場で体の血を落とした。服に付いた返り血はどうあがいても落ちず、所々染みを残して洗い場を後にした。

「ふいー、寒い、寒い」

きつく絞っただけの衣服を着た夢斗は、両腕で胴を包むようにし

て小刻みに震えながら帰ってきた。

「お、大分片づいたなあ」

夢斗はきれいさっぱり片づいた屋上の光景を見て、目を丸くする。

「あっ！ イブ！」

夢斗は屋上のパイプにもたれているイブを発見し、駆け足で彼女に近づく。

「イブ！ 大丈夫！？」

夢斗はイブの上半身を抱き上げ、軽くゆする。しかし、イブは目を覚まさない。

「うっ！ 出血がひどい……」

夢斗はイブの容態を見て、それが尋常でない事に気付く。

「確か、休憩室に救急箱が……」

夢斗はそう言うと、イブをそつと横に寝かせ、バイト先へと向かい走り出した。

数分後、夢斗は救急箱を抱えて、イブの待つ屋上に帰ってきた。

消毒に使えると踏んで、度の強い老酒うばちゅも持っていた。

救急箱と老酒を置き、イブの真正面にしゃがむ。

「イブ。大丈夫？」

イブにそう呼びかけ、軽くゆする。すると、程なくして、イブが目を覚ます。

「夢斗……。痛っ！」

イブは目を覚ますなり、肩の傷口を押さえて、顔をしかませ縮こまる。イブの表情からして相当な傷であることは、素人の夢斗にも見て取れた。

「イブ、救急箱を持ってきた。あと、消毒用の酒も。よかったら使って」

夢斗はそれぞれを手に取り、イブに向けて掲げてみせる。

「ありがとう……。じゃあ、お酒を貸して」

イブがそう言うと、夢斗は黙って老酒を差し出す。

イブは老酒を受け取ると、おもむろに着物をはだけ、肩を露わにした。

「……………！！ イブ、それ……………」

イブの片口には三本の線が入っていた。その線のそれぞれが熟れたザクロの様にぱっくりと割れており、そこからは止めどなく血が溢れる。

夢斗がイブの傷に驚くもつかの間、イブは自分の肩に老酒を盛大に浴びせる。

「うぐう……………！！」

イブは苦悶の表情を浮かべ、必死に痛みを堪える。イブの着物には老酒と血の混ざった物が染みつき、大きな染みを作る。

「イブ……………」

傷つきながらも、なお弱さを見せまいとするイブを見て、夢斗は己の弱さを痛感していた。

（オレは……………、一人も守れないのか……………。常に守られて……………）

夢斗は俯き奥歯を強く噛みしめる。

瓶の中身が尽き、イブは次の作業にかかる。救急箱からガーゼと包帯を取り出すと、ガーゼを傷口にあてがい、包帯で固定し始める。

「夢斗」

「……………」

夢斗は俯いたままだ。

「夢斗！」

「あいつ！」

夢斗は弾かれたかのように返事をする。

「ガーゼを押さえてて」

イブにそう言われ、夢斗は黙って従う。

てきぱきと処置を行うイブ。それに反し、全てにおいて出遅れがちな夢斗。

（イブの怪我は……………、オレのせいだ……………）

そのとき、イブが口を開いた。

「終わったわ。もう平気よ」

夢斗はイブの肩から手を離す。

「夢斗。どうしたの？」

俯いたままの夢斗を気遣い、イブが声をかける。

夢斗はこのとき決意した。

さつと頭を上げると、真っ直ぐにイブを見詰めた。そして、こう言った。

「イブ。オレを強くしてくれ」

夢斗はイブの紅い瞳を真っ直ぐに見詰め、イブも夢斗の瞳を見詰める。

夢斗の決意を肌で感じたイブは、静かにこう告げた。

「剣をとりなさい」

第二章 第六話 静かなる決意（後書き）

第二章完結しました。これもひとえに皆様のお陰です。これからも、より一層のご愛読の方ヨロシクお願いします。> m () () m <

第三章 第一話 決意の強さ(前書き)

大好きの方、すみません。この話は読むのを遠慮された方が良く
もしれません。

第三章 第一話 決意の強さ

夢斗は剣を構える。その先にはイブの姿があった。

「ここは夢斗のマンション近くの廃工場。ガラスの割れた窓からは、夕日が差し込む。」

「てやああ！」

夢斗は剣を構えてイブに斬りかかる。すると、イブはそれをさつとかわし、夢斗の首筋に強烈な峰打ちを叩き込む。

「痛っ！！」

夢斗は体勢を崩し、前方に数メートルスライディングする。

「そんなんじゃダメよ。それじゃあ間違いなく殺されるわ」

イブは夢斗の姉の服を着ており、割とカジュアルな感じだったが、それでも動きのキレは劣っていないかった。ちなみに、肩の傷があるので、右腕は封印している。

左手で刀を構えたイブは、切っ先を夢斗に向ける。

「まだ終わりじゃないわ。さあ、来なさい」

「クソッ」

夢斗はすすを払って立ち上がると、再び剣を構えてイブと対峙する。

「行くぞおー！！」

夢斗はそう言って、イブに斬りかかった。

鈍い音が響く。今度は鋭い膝蹴り。

「隙だらけ」

「チクシヨウ。ぐふっ」

夢斗はうつぶせになり、嗚咽を漏らした。

その日の夜。赤い月の下、二人は例の繁華街に来ていた。イブが言うには、そこに敵が現れるという。

夢斗のバイト先が一応の拠点である。何故一応なのかというと、

いつ差し押さえを喰らうか解らないからである。

「夢斗。来たわ」

イブはそう言って席を立つと、ギターケースから刀を取り出す。

「よし、行こう」

夢斗はイブに従い、自分の使うべき剣を取る。

階段を登る途中、夢斗は敵の勢力をイブに尋ねる。

「敵の数は？」

夢斗は言いながら剣を鞘から抜き、その鏡の如く洗練された刀身を見詰める。刀身には自分の顔が映る。

「犬二匹に鬼一頭。夢斗は犬をお願い」

「犬」とは四足歩行の獣。「鬼」は三メートルの首長である。二つとも「夢斗に解りやすいように」というイブの配慮であり、鬼はともかく、犬は間違いなく犬とは外見がかけ離れている。

イブは刀を抜く。血を洗い落とした刀は、夢斗の剣と同じく鏡の様に輝く。

屋上に着くと、そこには既に敵がいた。二人の到着を待ちわびるかのように闘志を剥き出す。

「グルルルルル」

牙を剥く犬。

「……………」

無言のまま首を揺らす鬼。

両者睨み合い、互いに距離を詰める。

そのおり、犬が夢斗に飛びかかる。

二頭揃って夢斗に牙を剥き、咆哮しながら接近する。

「とっつっ！」

夢斗は一頭目の攻撃をかわすと、隙だらけの胴体に狙いを定める。

「えいっ！」

夢斗の一撃は犬の腹を大きく切り裂いた。

「よし！ぬおっつ！」

ファーストヒットを浴びせるもつかの間、間を置かず二頭目が飛

びかかる。

夢斗は際どい所で犬の爪から逃れると、二頭目を次の標的にする。
「ええいつ!」

再び飛びかかって来た犬の攻撃をギリギリでかわし、かわし様に一撃を加える。素早く攻撃するというスキルは、イブに体で覚えさせられた。

軽い手応え。しかし、確実に入った。鮮血が舞い、屋上の床に放射状に撒かれる。

「まだまだ!」

夢斗は受け身を取りつつ姿勢を正すと、着地したての二頭目に追撃を加える。

切っ先にエネルギーがこめられ、同時に幾つもの組織を破壊しながら貫いていく。夢斗の剣は二頭目の頭を横から貫いた。犬は夢斗の剣に力無くぶら下がる。

「次!」

夢斗はそう言って、一頭目を探す。止めを刺し損ねていたからである。

「いた!」

一頭目は腹部と同時に後ろ脚も膝から斬られていた。それにより、一頭目は上手く動けず、床を這うようにしか動けない。

夢斗は哀れな姿の敵に止めを刺そうか戸惑ったが、意を決して剣を突き立てた。

剣は敵の頭部に刺さった。小さな噴水の様に血が吹き出る。

夢斗は剣を引き抜くと、止めを刺したことを確認し、鬼と戦うイブの方を見た。

「あれ、もう、終わってる?」

夢斗の見た先には、体を数ブロックに切断された鬼と、こちらをじっと見るイブがいた。

直後、イブが拍手をする。

「よくできました。前よりは格段に動きが良くなってるわ。あとは、

止めを戸惑わない事ね」

イブはそう言うと、死体に手をかざす。

淡々と呪文を唱えると、死体は溶けるように消える。

全て消えた所で、夢斗はイブに訊いた。

「なあ、最初からその呪文を唱えれば良いんじゃない？」

夢斗が言い終わると、イブが目を開けるのは殆ど同時だった。

「そもそも行かないわ。この呪文は片づけの対象が生きていないことが条件なの」

「そうなんだ。あつ、そういや、初めてあつた時にかけた呪文は何なの？」

「あれは記憶忘却の呪文よ。かける側がかけられる側に知られては困る記憶を完全に無くす事ができるの。でも、かけられた側がかけた側に二四時間以内に再会してしまうと、その呪文の効果は無くなり、二度とそれをかけることは出来なくなるわ」

「は、なるほど……」

夢斗は納得したようだった。

「今日はコレで終わりね。さ、帰りましょう」

「そうだね。今日は疲れた……」

二人は家路についた。

第三章 第一話 決意の強さ（後書き）

この話で皆様の謎が一つ解けたと思います（？）でも、なんだか説明ばかりでしたね、すみませんでしたm（| |）m次回も宜しく
願います。

第三章 第二話 修行（前書き）

第三章は夢斗の成長を主にして進行しようかと思えます。非力な夢斗の成長を、温かく見守ってやって下さい。

第三章 第二話 修行

二人は一般客に混じり帰路に就く。

比較的空いている電車の中で、二人はその日の戦闘の反省会をしていた。

「動きは良くなってるわ。ただ、まだ迷いがあるわ」

「迷い……?」

「ええ、そう。それは恐らく、自信の無さから来るものね。まだまだ甘いわ」

「甘い!? あれで!?!」

夢斗の脳裏に、一撃で脊髄を叩き折られそうな峰打ちが過ぎる。

「明日からは、もっと厳しくするわね。あれじゃあ、見てられないわ」

イブが静かにそう告げると、夢斗はがっくりとうなだれて深いため息をついた。

「はあ〜。シップ代がかさむなあ〜、あと、電車代も……」

バイト先が潰れ、収入が無くなった夢斗にとって、イブとの魔物退治は、経済的な負担をもたらす結果となった。更に、イブの峰打ちちは、夢斗の首根っこにも相当な負担の様である。

「あ、そうだ。明日政経のテストだ。何もしてね〜」

夢斗は首を押さえた拍子に、明日の試験の事を思いだした。顔が見る見る蒼白してゆく。

「大丈夫なの?」

イブは『テスト』という言葉の意味を知っているかどうかは定かではないが、深刻そうな夢斗の表情を察し、とりあえず訊いてみた。「多分、赤点かなあ……。勉強するにも首痛いし、疲れてるし……」

夢斗は窓の外を眺めた。

無数に散りばめられた星の中に、赤い月が一際強く輝いていた。

翌日、夢斗の学校にて政治経済学の抜き打ち試験が行われた。試験が実施されたのはその日の六時限目。この後の授業は無い。

全く勉強をしていなかった夢斗は、首の痛みと眠気と戦いながら、何とか回答欄の半分は埋めた。

「夢斗、テストできた？」

話しかけてきたのは園美だった。

「いや……、全然ダメ……」

首の痛みを顔をしかめつつ、夢斗は腕でバツを作った。

「あゝあ、これじゃあ赤点確定だな」

「あれ、夢斗のバイト先潰れたんじゃないの？」

「うん、確かに潰れたんだけど、こっちも色々あってね……」

口が裂けても『紅い目の女の子と魔物退治してる』とは言えない。秘密が漏れたとき、どんな恐ろしい事態が待ち受けているかは、想像し得ることができない。

「ねえ、夢斗。今日どっか遊び行かない？」

園美からデートのお誘い。しかし、夢斗は断るざるを得なかった。

「ゴメン。今日はムリ。また今度ね」

夢斗は申し訳なさそうにそういういと、帰り支度を始めた。

夕日が差し込む廃工場の中には、二人の影が長く伸び壁に映る。

対峙する二人と、対峙する二人の影。

剣を構えた二人は、互いの呼吸を探り、どちらが先に飛び出すかという一瞬の駆け引きを演じる。

どこからかカラスの鳴き声が聞こえる。破れたトタンの隙間から、冷たいすきま風が流れる。

ぴゅうつと一陣の風が二人の間をすり抜けたとき、夢斗が動いた。一気に間合いを詰め、剣を振るう。

刀身が光を反射しつつ気道を描くも、乾いた金属音が響き渡った。夢斗の一閃はイブの刀に防がれたのだ。

負けじと、剣でイブを押す。さすがは男である。イブは夢斗の力

に負け、後ろへじりじりと退かざるを得なくなる。

「夢斗。なかなか良くなったわ。でも、まだまだね」

集中する夢斗にその声が聞こえたかは誰も知らないが、次の瞬間には、夢斗は腹部に鈍痛を覚えた。

「ぐっ！」

一瞬ひるんだ所に、イブは空かさず次の一撃を加える。

夢斗の利き腕に狙いを澄まし、峰打ちを各所に放つ。

夢斗の右肩、右腕、右手首と順々に痛みが走る。痛みを耐えかね、手にしていた剣を落とす。

「あっ！」

夢斗がいきなりの反撃にひるむ間に、イブは最後の―撃を夢斗の膝裏に放った。

下からすくい上げるような蹴り。しかし、ひるんでいた夢斗は、そのまま姿勢を崩す。

「！」

片膝を付いて痛みを耐える夢斗に、イブは刀の切っ先を眼前に向ける。武器と名付けるのに疎ましさえを覚えるほど、美しく洗練され抜かれた切っ先。

「攻撃は良くなったわ。でも、守りがいい加減ね。攻撃後の隙がありすぎるわ」

「ちい。じゃあ、どうすれば良いんだよ……」

夢斗はふてくされた様に言う。

「どんな風にしたときに反撃されたかをしっかり考えて、次は、そうならないように動きの筋道を立てることね。行き当たりばったりが通用するのは、相当な力押しの時だけよ」

イブは表情を変えることなく、淡々と総評する。

「オレは、力抜いてるわけじゃない」

「でも、今の夢斗には腕力よりも基本的な部分が必要よ。現に、夢斗より腕力の無いワタシでも、夢斗を倒す事はできるわ」

それは正論であり、反論の余地や矛盾は無かった。

「チクシヨウ！ イブ！ 次、頼む！」

夢斗は剣を握り直し、姿勢を正してイブと向き合った。

「それよ。何よりも、その根気とやる気が大事よ」

イブはそう言って、夢斗と向き合い剣を構えた。

夕日の差し込む廃工場での修行は、その日の夕日が落ちるまで続いた。

第三章 第二話 修行（後書き）

何かお気づきの点がありましたら、遠慮無くメッセージを下さい。
その時は、そのメッセージの内容について善処致します。

第三章 第三話 秘密（前書き）

前の話の前書きで「夢斗の成長」といった旨を書きましたが、「夢斗の心情の変化」といった方が適切であると、この話を書いて思いました。皆様の心の中で書き換えて置いて下さい

第三章 第三話 秘密

夕日が沈むと、その日も赤い月が出た。

二人は満員電車に乗って、いつもの繁華街へと向かう。

「混んでるなあ」

夢斗はそう呟くと、目の前に居るイブに目をやった。イブは夢斗と向かい合う形で密着しており、夢斗の鼻息がイブの前髪を撫でるほどに近付いていた。

イブはいつもと変わらぬ表情で、じつと降りる駅に着くのを待っていた。

（結構、キレイ系かな……）

夢斗はイブの顔を見下ろし、心の中で呟く。イブの顔は見れば見るほど端正であることがわかる。それは、見下ろす恰好になったとしても同じだった。

『え〜、間もなく〜、社王子前〜、社王子前で〜、ござい〜ますっ』
車内アナウンスがそう告げると、夢斗は手にしていたギターケースを握り直した。

赤い月が輝き、その光が刀身に映る。

ここは、昨日とはまた違ったビルの屋上。数メートル先には五頭の犬と二頭の鬼。

「難しいわね。援護は要る？」

イブは小首を傾げて夢斗に訊く。

「大丈夫。犬五匹くらいなら何とかなるさ」

夢斗ははきはきと答える。それは、自信の裏付けでもあった。

「そう。じゃあ、始めましょう……」

イブがそう言ったとき、目の前の鬼が斬られる。見事な抜刀術で鬼の左足を切断。

夢斗も遅れを取るまいと、犬に向かって一歩踏み出す。先頭の一

頭に狙いを定め、左から切り上げる。

切った、と感じられない程軽い手応え。まるで薄布を裂いたようだった。

犬の右の前肢が斬られ、そこから血が溢れる。犬は足を失った事と激痛に驚き、がくりと姿勢を崩す。

「まだまだ！」

夢斗は無防備な犬に、容赦なく止めを刺す。

眉間を真正面から突く。突き立てられた剣は、脳幹を完全に貫き、犬の呼吸を止める。

「次だ」

次に飛びかかってきた犬を、剣を横薙ぎにふるって吹き飛ばす。

「次い！」

間を空けず、三頭目に攻撃する。背中を横に大きく切り裂き、ひるんだ所で止め。そこに、二頭目が飛びかかる。まだ生きていた二頭目は、最期の力を振り絞って夢斗に突撃。夢斗はその一撃をしゃがんでかわすと、身を翻して体の側面をかつさばく。傷は心臓に達したのか、盛大に血が噴き出る。

「次！」

間髪入れずに襲いかかる四頭目。夢斗は、返す刀で四頭目に斬りかかる。四頭目の右半身に深く斬りつけると、止めを刺さずに五頭目を狙う。

「……！」

五頭目は既に夢斗に飛びかかっていた。

夢斗は五頭目の牙をしゃがんで避けると、五頭目が自分の頭上に来た所で、五頭目に半月斬で攻撃した。

五頭目の胴体は見事に輪切りにされ、夢斗は頭の中から血を浴びる。

（臭くなるな、コレ……）

夢斗はそんな事を思いつつも、止めを刺さなかった四頭目を探す。力無く倒れる四頭目を見つけると、迷うことなく頭に剣を突き刺す。程なくして四頭目も事切れる。

「お前で最後か」

夢斗は最後の一頭である五頭目を見つけると、剣を逆手に持って心臓を貫いた。輪切りにされたときに出血したのだから、心臓を突き刺しても返り血は無かった。

「終わったな」

夢斗はそう言って辺りを見回す。

鮮血と五つの死体があった。

「イブ。こっちは完了だ。そっちはどう？」

夢斗が声を張り上げて言うと、イブは既に両手をかざしていた。

「終わっているわ。夢斗が三頭目を倒したときに」

呪文を唱え死体を処理。死体と血は完全に消え去り、そこは元の屋上に戻った。

「ずいぶん良くなったわ。不思議ね、前まではあんなにいい加減な戦い方だったのにね」

イブは刀をしまつて言う。

「はは。イブのスパルタのお陰さ。ま、笑ってるほど愉快な物じゃないけどね」

夢斗はそう言って首を押さえる。ちなみに、入りが浅かったのだろう、右手の痛みは引いていた。

「ふふ。それはどうも」

イブは微笑んだ。夢斗と出会ってから初めて笑顔を見せた。

「イブ……!？」

イブの笑顔の間近で直視してしまった夢斗は、しばし声を失う。

「夢斗。アナタは十分強いわ。でも、まだまだな部分もあるけど」

イブは夢斗の手を取り、再び微笑む。その笑顔は、紛れもなく美しかった。

「……イブ……!？」

夢斗の心の中はイブの笑顔で一杯になり、言いようのない暖かさを全身に感じる。じんわりと染み渡るような暖かさ。それは心地良いもので、夢斗はそれにいつまでも浸っていたいとさえ感じた。

「…………。ううっ…！」

夢斗の鼻腔を例の臭いが襲う。それは、夢斗を現実に戻すには十分すぎた。

「ごほっ。ごほっ。ヤバイ、ダメ」

臭いの元である犬の血は、夢斗の頭にある。臭いはその分いつもより強く、夢斗はその場で悶える。

「大丈夫？」

イブはまた夢斗に微笑みかけた。

「ムリ……………！」

夢斗は消え入りそうな声でそう答えた。

「イブは、この臭い、平気なの？」

「ええ、大丈夫よ」

「何者？」

「さあ、何者でしょう？ これは夢斗にはまだ…………」

イブは口籠もる。

「夢斗には…………」

イブはなかなか次の一言と話そうとしない。

「…………。夢斗、そこで待ってて。今から水を持ってくるわ」

イブはそう言って踵かかとを返すと、近くの水道場へと歩き出した。

「オレには…………、一体何なんだ？」

消え入りそうな意識の中で、夢斗はそう呟いた。

イブは水道場を見つけると、そこにあったバケツに水を注ぎ始めた。イブが蛇口をいっばいまでひねると、冷たい水がすさまじい勢いで出てくる。

「夢斗には…………、話すべきなのかしら…………」

バケツの中で泡立つ水を見ながら、イブは静かにそう呟く。

イブは後ろを振り返る。そこから夢斗は見えなかった。

「言えるかしら…………」

イブがそういうと、イブのシルエットが変形し始めた。

その時のシルエツトが限りなく面妖であるところを知るものは、
本人であるイブ以外知り得ない事実であつた。

バケツから水が溢れだしていた。水面には、面妖なイブと赤い月
が歪みながら映っていた。

第三章 第三話 秘密（後書き）

何やら後を引くような終わり方をしました。勘の良い方は、既にイブの存在を疑いまくってるかも知れませんが、イブの秘密については、もっと後になってから解りますので、それまでは色々と山を張って下さい。それでは、また次回まで。

第三章 第四話 操り人形の気持ち（前書き）

ここでひとつ設定が加わります。

第三章から、イブは夢斗の家に居候いこうします。それを前提の上、今後の展開をお楽しみ下さい。では、いづつくりどうぞ。

第三章 第四話 操り人形の気持ち

イブはバケツ一杯の水を持って、夢斗の元へと戻ってきた。イブが戻ってきたとき、夢斗は気絶寸前で、目は半開きだった。

「夢斗。目を覚まして」

イブは夢斗に水をかける。逆さにしたバケツからは、大量の水が一気に流れ落ちる。

「うおっ!! 冷たっ!!」

夢斗はあまりの冷たさに目を覚ます。

「どう? 臭いは取れた?」

イブに訊かれ、夢斗は鼻を利かせてみる。

「うーん、まだ残ってる……」

イブは苦虫を噛みつぶした様な顔をして答えた。

「それはお気の毒。さ、そろそろ帰りましょう」

「そだね。早くシャワー浴びたいし。へっくし!」

夢斗はくしゃみをして、帰路に就いた。イブも、それに従った。

家に帰り着いたとき、時刻は既に十二時を廻っていた。

帰り着くなり直ぐさまシャワーを浴びた夢斗は、スウェットに着替えベッドの上に寝ころんでいた。ちなみに、イブはシャワーを浴びている。

「ふいー。今日も疲れた。というか、テストどうしよう……」

夢斗は昨日の試験の事を思い返した。半分ほどしか埋まっていな回答欄。それが帰ってくる頃には、ナイキのロゴによく似た赤い印が並ぶことだろう。そう思うと、頭が重い。

「きつと補習だな……」

夢斗はそう言っ、首を横に回す。部屋の入り口近くに立て掛けられた剣が目に入る。

「……………」

夢斗はしばらくの間、無言で剣を見詰める。

鞘に収まった諸刃の剣は、その切っ先を下にしてその場に佇む。鞘の所々には華やかな装飾が施され、まばゆい輝きを放っていた。

「そう言えば……、何で……？」

夢斗は初めての戦闘の事を思い出した。

「あの時は……、何故、イブをかばって戦おうとしたんだ？」

自分が危険を顧みず、イブを守るために前に出た事に、今になって疑問を抱く。

イブは疲弊していた。自分は元気だった。

イブはあのととき負傷していた。自分は無傷だった。

イブに請われるままに、犬に止めを刺す事により、相手の命を奪うことに対する抵抗は、僅かながらに消えていた。

しかし、何故。

「何でだ……」

夢斗は起きあがり剣を握む。

「何で、オレは戦った？」

鞘から剣を抜き、刀身を眺める。

所々に血の付いた剣に、自分の顔が映る。

「くそっ」

夢斗は剣を鞘に戻し、その場に放り出すとベッドに戻った。

「何でだ！？ 何で戦ったんだ！？」

あれは自分の決定だったはず。しかし、言いよの無い疑問が湧き上がり、夢斗を悩ませる。まるで、他人の意思を押しつけられ、それに対し何の文句も疑問も無く受け入れてしまった様な感覚。『操り人形は日々こんな感覚に苛まれるのか』と、夢斗は痛感する。

「チクシヨウ！ わかられねえ！！」

「どうしたの？」

夢斗が狼狽しているとき、イブが部屋に入ってくる。

「イブ……」

「何か、あったの？」

夢斗はイブを見詰める。

「いや、何でもない。今日はもう寝よう。お互い疲れてるだろうか」

「そう。じゃあ、お休みなさい」

イブはそう言ってドアを閉め、向かいの姉の部屋へと向かう。足音の直後に、向かいのドアの閉まる音。

「イブ……」

夢斗はそういうと、部屋の電気を消して眠りについた。

第三章 第四話 操り人形の気持ち（後書き）

ある読者の方に「何故、何の疑問も無く、夢斗は剣を取ったのか？」という質問をされました。同じ疑問を持つ方もいらっしゃると思います。その事については、もう少しお待ち下さい。本当に済みませ
ん > m () m <

第三章 第五話 「ゴメンな、イブ……」

試験の翌日、答案の返却が行われた。

夢斗の結果は散々なものであった。夢斗の読み通り、帰ってきた答案には多くのナイキのマークが並んでいた。

「うえ、一八点か。どうしょ……」

名字が『足達』なので早くに呼ばれた夢斗は、その分長い間苦杯を舐めることとなる。

「次に呼ぶ者は、補習プリントをやるように。足達、関島、田中、野島」

夢斗は渋々教卓に向かい、両面五枚のプリントを受け取りため息をついた。

その日の夕刻。自宅に帰った夢斗は、直ぐさまプリントとの格闘を始めた。提出期限は明日である。

「夢斗。行くわよ」

イブが夢斗の部屋のドアを開け、夢斗を誘う。

「ああ、イブ、ゴメン。今日は行けないんだ」

夢斗はペンを持つ手を一旦休め、振り返ってイブの前で手を合わせて詫びる。

「何故？」

「宿題があるんだ。修行も魔物退治にも行けそうに無い。本当にゴメン」

夢斗は深々と頭を下げる。

「わかったわ。でも、出来れば来て。今日も敵が多そうなの」

「わかった。出来る限り行こうと思う。あの、がんばってね。これ、切符代。行き方は解るだろ？」

夢斗は財布から千円札を取り出して、イブに差し出す。

「ええ、もう覚えたわ。ありがとう」

イブはそう言って千円札を受け取り、夢斗の家を後にした。

「さて、オレもがんばるか」

夢斗はそう言って、再びプリントと対峙した。

数分後。夢斗は机の前であくびをした。

「ふー、これで良かったのか？」

プリントの空欄には、既にある程度の回答が書かれていた。実は試験返却の直後の休み時間の間に、補習仲間同士でプリントを大方片付けていたのだ。従って、宿題があるというのは、修行と魔物対峙をさぼるための口実である。

「……」

始終黙りこくって黙考する。

気味が悪かった。自分の意志を他人に操られ、本来なら避けるべき事を無理矢理押しつけられたような感覚に苛まれたことが。

(何で、なんだ……)

机に突っ伏し、そのことだけを考える。

時刻は五時を廻っていた。昨日のこの時間には、自分は剣を取っていた。

ふと、昨夜のまま放り出されたままの剣に目をやる。

柄つかの上部に竜の彫刻が施された剣。その彫刻の竜の眼が、夢斗に語りかけてる様だった。

『お前はそれで良いのか。片手の使えないイブは、恐らく満足に戦えないぞ。イブはお前の事を、少なからず信頼している。イブの信頼を裏切って良いのか？ イブをほったらかしにして良いのか？』

お前は……』

「うるさい！！ 黙れ！！」

夢斗は耳を塞いで部屋を飛び出した。ベランダに出て夕日を見る。剣の語りかけが、自分の中で渦巻く疑問や悩みであることは痛いほど解る。イブを見送ったときの疑問であったからだ。

「チクシヨウ！！」

ベランダの手すりを掴み、歯を食いしばって俯く。

「オレだって、戦うのが嫌な訳じゃない。でも、解らないまま戦うのはイヤなんだ!!!」

どこかでカラスが鳴いた。

（オレは、どうしたら良い!? 何をすれば良いんだ!?!）

また、カラスが鳴いた。

夢斗は手すりを強く叩き、自らの決意に従った。

「ゴメンな、イブ……」

夢斗は部屋に戻り、剣を取った。

第三章 第五話 「ゴメンな、イブ……」 (後書き)

さあて、さて。夢斗はこれから先どうするのでしょうか！ 次回に期待！！

第三章 第六話 「ゴメンな」(前書き)

久々の更新です。じゅっくりじゅっぞ。

第三章 第六話 「ゴメンな」

夢斗はイブを追いかけ、住宅街をひた走る。向かうは、最寄りのバス停である。

(この時間じゃ、駅行きバスが来る。急がなきゃ……)

夢斗は最寄りのバス停に着いたが、バスは既に出ていた。

「はあ、はあ、はあ。イブ……」

次は駅に向かって駆け出した。

『ドア閉まりますっ』

駅内アナウンスがそう告げると、列車のドアが一斉に閉まる。直後、列車のモーターが力強く唸りだし、総重量十数トンの車体を動かし始める。

「しまった!!」

夢斗がホームに着いた瞬間に列車が発車した。

「次の電車は!」

振り返ると時刻表がそこにあった。

「あと十分……」

夢斗はホームで立ち尽くす。

「待っててくれよ、イブ!」

彼にとって、次の電車を待つ十分は、かなり長いものとなった。

日が傾いた繁華街を、イブは一人で歩き進む。

「ここね」

イブは歩く向きを変え、いつもの雑居ビルの裏口へと向かう。

裏口のドアに手をかけたとき、イブは鋭い殺気を感じた。

「……」

イブの赤い瞳が、ビルの屋上を睨み付ける。

イブはギターケースの中の業物を取り出した。業物を帯の中に押

し込むと、鐔つばを左手の親指で押し上げる。続けて右手で刀を抜くが、右肩に鈍痛を覚え、左手に持ち替える。

「今日は、いつもより大変そうね……」

イブはそう言っつて、階段を昇り始めた。

イブに遅れること十分強、夢斗はなんとか繁華街に降り立った。

「チクシヨウ。イブが乗ったのは急行だったか」

改札を抜け、バイト先だったビルへと駆け足で向かう。通行人とぶつからないよう、人通りの間をすり抜けながら疾走する。

既に辺りは薄暗く、繁華街はいつもの様に賑わい始めていた。

ビルに向かう途中、イブと初めてであった路地裏の前を通る。夢斗が路地裏への入り口を睥睨すると、未だに黄色いテープが張り巡らされていた。

路地裏へ思いを馳せる間もなく、夢斗は足を速めた。

走り初めてから数分して、夢斗は例のビルに辿り着く。

「着いた！」

夢斗はそう言つと、迷うことなく非常階段を駆け上がる。

最後の一段を踏み抜き、屋上へ躍り出る。

「イブは……」

そこにイブも敵の姿も無かった。

てつきり戦闘が始まっていたと踏んでいた夢斗は、そこがあまりに普通すぎることに戸惑いを隠せなくなる。

「イブは……、どこにいるんだ……？」

息を切らしながら辺りを見回すが、特に変わった光景は見受けられない。一応、いざというときのために、手にした剣を鞘から抜く。その直後、鼻を突く例の臭い。

「くっ……。見つけた……」

夢斗は鼻を押さえ、臭いの方向へと歩を進めた。

殺気を感じて階段を登つてからは早かった。イブは屋上に着くな

り、隣のビルに敵を発見した。

イブは素早い動きで隣のビルに飛び移り、そこで敵と対峙する。今日の敵は犬二頭と鬼一頭、そして、新顔が数羽。数羽ということ、少なからず鳥に似た感じの敵である。間違いなく、うさぎではない。

「来なさい」

イブはそう言って刀を構える。すると、『鳥』が最初に襲いかかってきた。鳥たちは一気に空中に展開し、一目散にイブを狙う。鳥が翼を飛ばたかせるたびに、羽の一枚一枚が木の葉の様に舞う。

一斉に襲いかかった鳥を、素早く空中で斬り裁く。すると、大量の羽が舞い、イブの視界を遮り始めた。

「しまった!」

イブがそう気付くもつかの間。犬の牙が襲いかかる。

「くっ!」

イブはそれを横に跳んでかわすと、尚も嘴くちばしを向けて突撃する鳥を捌いた。

「きりが無いわ!」

鳥は大方倒したが、それでもまだ嘴の応酬は続く。鳥に気を取られるイブを狙い、犬が飛びかかる。イブはその全てを危うい所でかわす。

刀を持つ手が利き手でないからであろうか、イブの刀裁きにイマイチ冴えがない。いつもなら、既に戦いは決着しているが、今日は戦いの流れを掴めずにいた。

「コレで、最後!?!」

イブはそう言って、最後の鳥を屠った。しかし、背後に強烈な殺気。

イブが振り向くと、そこには鬼が仁王立ちしてこちらを見ていた。二つの閃光が不気味に輝いている。

「シヤアアアア!」

鬼はそう言って腕を振った。

イブはかわそうとして横向きに跳ぶが、いつもと勝手が違うせいか、腕から逃れることが出来なかった。

「くっ……」

脇腹に重い痛みを覚える。その直後、イブは数メートル宙を舞い、高さの違う隣の建物の壁に叩きつけられた。

「かはっ……」

あまりの衝撃に眼を見開き吐血する。

イブが壁に衝突した瞬間に、もう一頭の鬼がイブに迫る。爆発的な瞬発力で飛び出し、頭部を鋭い角を向けて、イブに体当たりを仕掛ける。

「……！！」

イブが鬼の角を視認した瞬間、強烈な突撃により言葉を失う。鬼の頭頂部はイブの腹部ダイレクトに捉えた。イブが細身であったことが幸いし、鬼の角の間に挟まれ、致命傷は避けられた。醤油瓶ほどの鋭い角が直撃しよう物なら、間違いなく命を落とすであろう。角の硬度は、穴の開いたビルの外壁を見れば伺い知れた。

「が……は……」

腹部を中心にじわじわと激痛が拡がっていく。気が段々と遠くなり、視界がぼやけ始める。それはイブのこれまでの生涯の中で、これ以上に無いほどの激痛である。

(……夢斗……。助けて……)

イブは僅かな希望を乗せて、心の中でそう唱えた。目の前には鬼の爪。

(ここで……終わるワケには……)

そのときだった。

「イブ！！」

どこからかイブの名が響く。

視界の彼方に見えたもの。それは、剣を構えてイブの名を叫び、鬼に狙い定めて疾走する夢斗だった。

そんな夢斗に、犬が飛びかかる。

「どけえ!!」

夢斗はそう言って剣を振るい、犬を一刀の元に切り伏せる。犬は首を切断され、派手に血が噴き出す。

続けざまに二頭目。

「邪魔だア!!」

夢斗はそう言って二頭目吹き飛ばす。剣の軌道が犬の頭部を捉え、それを半分に切断した。頭部の断片と脳漿や頭蓋骨がまとめて吹き飛び、朱色の血が撒き散らされる。

「イブから……!!」

夢斗はそう言って剣を構え。

「離れる!!」

爪を掲げる鬼を叩き斬る。

鬼は腰から切断され、下半身と上半身が分離し、イブの視界から消えた。

「貴様も!!」

鬼を切り伏せた夢斗は大きく跳躍し。

「どけエ!!」

鬼の頭部を両手かつ逆手持ちの剣で一気に貫く。

噴水の様に血が盛大に噴きだし、イブと夢斗を赤く染める。

夢斗は壁を蹴って反動をつけると、後ろ向きに跳んで着地した。

「ハア……、ハア……、ハア……」

夢斗はその場をぐるりと見渡すと、全員仕留めたことを確認した。

「イブ」

夢斗はイブの名を呼ぶ。

「……何？」

イブは消え入りそうなか細い声で返す。

「ゴメンな」

余談だが、イブがビルに駅に着いたとき、東の空の月は赤く輝いていた。

第三章 第六話 「ゴメンな」(後書き)

どうですか、夢斗はかなり強くなりました。次回かその次辺りで、第三章が完結します。

第三章 第七話 「好きだ」(前書き)

第三章完結です。凄いことにしました。詳しくは本文で……))

第三章 第七話 「好きだ」

「ゴメンな」

夢斗はこの一言を言えたことで、胸のつかえが取れるような感覚を覚えた。

夢斗は礫状態はりつけのイブを見る。イブの胸元には、彼女の吐いた血が飛び散っている。また、イブの顔は苦痛に耐えているせいか、相当苦しそうであった。

「……夢斗……」

イブはその赤い瞳で夢斗を見下ろした。

「ん、何？」

イブは夢斗の顔を見て、微かに微笑んだ。

「あり……がと……う……」

低く押し殺したような声。夢斗でなければ聞き取れなかったであろう。

夢斗はイブの声を訊いて安心したのか、その場に座り込んだ。

「はああ。良かった、間に合って……」

「そう……ね。あと……少し……おそ……かったら……」

苦しそうに喋るイブに、夢斗が手のひらを向ける。

「イブ、喋るな。辛いだろうから。」

「……夢斗……？」

夢斗は手を下げると、座ったままイブと向き合って続けた。

「オレさ、『何で戦ったのか』ってずっと考えてたんだ。だってさ、おかしいじゃん。普通の高校生はさ、こんな状況に合わないだろ。

それなのに、気付いたら剣を持ってたなんて、考えられる事じゃないよ……」

夢斗は手にした剣を見た。敵の血が刀身を伝って流れ落ち、彫刻の竜の口がそれを啜って（すすって）いる様だった。

「でもさ、オレは無我夢中で剣を振ってた。イブが疲れてぶっ倒れ

た日のことだよ……。何で振ったのかが分かんなかった……」

夢斗は彫刻の竜と眼を合わせる。イブと同じ深紅の瞳は『続ける』
と言っているようだった。

「戦った理由が分かんなくて……、剣を振った理由が分かんなく
て、それが怖くてウソついたんだ。そのことは、ホントにゴメン」

夢斗はイブに対して頭を下げる。

しばらくして、夢斗は頭を上げ、続きを話し始めた。

「でも、戦った理由が解ったよ。オレは、イブを守りたかったから
だ。で、何で守りたかったかというと、その……」

夢斗は顔を赤らめてよそ見をする。よそ見というよりは、イブの
視線から逃れるようにした、といった方が正しい。

「オレは……、その……」

夢斗は口籠もり、気恥ずかしそうに顔を逸らす。そして、意を決
したようにイブを直視した。

「オレは、イブが好きだからだ」

「……」

イブは驚きを隠せず見開いた。

「イブは、結構カワイイっていうのもあるけど、何ていうのかな、
どこか惹かれる所があるんだ。きつと、普通じゃない出会いで、普
通じゃない状況を一緒にくぐり抜けたからかな。うん、多分それだ」

夢斗は剣を置くと、立ち上がってイブに向かって歩を進めた。

「イブ。オレは本気なんだ……」

夢斗は真っ直ぐにイブの瞳を見詰める。吸い込まれそうな深紅の
両眼に夢斗が映る。

「だから……」

「待って……。もういいわ……」

イブはそう言って夢斗を止めると、例の呪文を唱える。敵の死体
は溶けるように消えた。

自由になったイブは、よろめきながら夢斗に近付く。

「夢斗の気持ちは分かったわ。夢斗の『好き』の意味も分かるわ。

ありがとう」

イブはそう言って再び微笑んだ。

「イブ……」

気が付いたとき、イブは夢斗の肩に手をかけていた。

「本当に、嬉しい……」

イブはそう言って眼を閉じる。体力の限界だったのだろう、彼女はそのまま寝息を立て始めた。

「イブ……」

肩に掴まり寝息を立てるイブを、夢斗の両手が優しく包み込む。

「お休み」

夢斗はそう呟いた。

それからしばらくの間、二人はそうしていた。しかし、夢斗はある異変に気付く。

「ん!？」

鼻を突く例の臭い。しかし、臭いの元である敵の血は、イブの呪文によってとうに消えている。自分の体を確認するが、返り血は一切無い。剣は少し離れた所にある。

「どこから……?」

夢斗はイブを床に寝かすと、辺りを探り始めた。しかし、イブから少し離れた所に来たとき臭いがぴたりと消えた。

「何で……?」

夢斗は不審に思い、辺りを更に注意深く探る。もしかしたら、敵の残党がいるのでは、と疑心暗鬼にも陥るが、それらしき者は一切見当たらない。

「一体、何が原因なんだ……?」

ひとしきり辺りを探り終えイブの元へと向かう。

それは、夢斗に残酷な運命を告げた。

「くっ!」

イブに近付いたとき、夢斗は鼻を押さえた。

「まさか!？」

夢斗はイブの全身を見渡す。イブの服の胸元に、彼女の血が付いていた。それ以外の物は見当たらない。

夢斗は数歩後ずさる。臭いはしなかった。

「そんな……。ウソだろ……。!？」

赤く輝く月。そのみが、答えを知っているようだった。

第三章 第七話 「好きだ」(後書き)

次回、こつご期待。

第四章 第一話 夢の中の姫君

三日月の輝く夜。だが、月は赤い。

月光に照らされているのは、無数の魔物の屍しかばねと息絶えた近衛兵このえへい。

「姫君だけは、何としても護るのだ!!」

老兵がそう叫んで、手にした古来の得物で敵に突撃する。

「誰か……、助けてくれ……」

若い兵士が助けを請う、しかし、その声は戦場の怒号によって掻き消された。彼は誰に看取られることもなく、静かに息絶えた。

矢が飛び交い、怒号と叫喚の渦巻く戦場の片隅に、十五、六の少女の姿があった。赤い瞳の彼女は、白い着物を身にまとい、二本の剣を大事そうに抱えている。

物陰から辺りの様子を伺い、意を決して駆け出す。直後、先程の老兵の首が飛んできて、壁に当たって落ちる。

「!!!」

彼女は一瞬たじろぐが、構うことなく走り出した。

「姫君!!!」

後ろから野太い声が聞こえた。

「誰」

彼女は振り向く。そこには、隆々とした体格の男が立っていた。

「ここから先は危険ゆえ、拙者が護衛致します」

男は彼女の前で片膝をつきひざまずくと、左手の拳を右手で覆い、最敬礼で旨を伝える。

「わかったわ」

彼女はそう言って、剣を帯に挟む。

「行きましよう。こちらです」

男は得物を掴み、彼女を導くようにして走り出した。その直後、男の背中を追っていた彼女の視界が、強烈な閃光で遮られる。

(!!!)

イブは眼を覚ました。そこは何度か見たことのある光景。『ここは夢斗の自宅の一室である』とイブは悟った。

イブは身を起こし、辺りを見回す。どうやら、夢斗の姉の部屋の様である。

額に手をあてて、自分の記憶をさかのぼってみる。最新の記憶は、夢斗の肩に手をかけた所だった。

ベッドからおりて、ドアに向かう。ノブに手をかけたところで腹部に鈍痛。前の戦闘の傷跡は深かった。うつむいて痛みを顔をしかめる。そのとき、自分の服に付着した血の跡が目に入る。

「……………」

血の跡を無言で見詰める。しばらくして、クローゼットに向かう。(シャワーを浴びたい……………)

イブはそう思いつつ、以前着たことのある服に手を伸ばした。

再びノブに手をかけてドアを開ける。すると、ドアを開けた瞬間に、向かいの部屋の夢斗と鉢合わせになった。

「イブ。おはよ」

夢斗はそう言つと、イブの持っていた着替えに気付く。

「風呂？」

夢斗が訊くと、イブは首を縦に振った。

「ゆっくり入ってていいよ。あと、上がったら修行に付き合ってくれないか？ 今日にはガッコーないから」

夢斗はそう言つて、イブに笑顔を作つて見せた。作つたというよりも、自然に現れた笑顔だった。

「わかったわ」

イブはそう言つてバスルームへと向かった。

第四章 第二話 夢斗の想い（前書き）

今回は夢斗の気持ちについて書きました。

第四章 第二話 夢斗の想い

浴室から聞こえる水の落ちる音。それを何気なく聞き流しながら、夢斗はトーストをかじりテレビを観ていた。

「数日前に発見された遺体の正体は、未だ解っておりません。また、遺体は強烈な腐敗臭を放っており判別作業は困難を極めています。県警は本日中に判別出来なかった場合は、遺体を処分すると発表しています」

リモコンを手に取り、他のチャンネルを見る。しかし、遺体に関するニュースはどの局も報じていなかった。

「……………」
テレビのスイッチを切り、アップルジュースの注がれたコップに手を伸ばした。中身を一気に飲み干すと、テーブルの一点を見据えて黙考する。

(イブ。イブは一体、何者なんだ……………)

昨夜の戦闘で知ったイブの事実。夢斗はそれをすんなりと受け入れられなかった。

(イブは……………、オレとイブがこれまで倒してきたのと同じ存在なのか……………?)

トーストの最後の一切れを口の中に放り込むと、椅子の下に置いた剣を抜いて彫刻を見詰める。竜の彫刻の眼は、昨日よりも赤くなっている気がした。

「オレは、イブを問いつめるべきなのか？」

夢斗は彫刻と眼を合わせる。

「お前の中にある疑問は、いずれお前を苦しめる。かといって、それをイブにぶつけた所で、お前が救われるという保証はないがな……」

彫刻の声が、自分の心の中の本音であるという事を夢斗は知っていた。自分の中にある本音を映し出す鑑として、自分の意志を知る

ため、自分に嘘をつかない証として剣と向かい合っているのである。
「訊くしかないかな……」

夢斗は剣を鞘に納めると、静かにそう呟き、椅子から立ち上がった窓を外を見た。

すつきりと晴れ渡った青空。直視出来ないほどの日の光が、マンションの一室を暖かく照らしていた。

「さて、そろそろ上がる頃かな」

夢斗はそう言って自室へと向かった。未だ寝間着のスウェット姿のままである。

自室に着いて動きやすいジャージを探そうとクローゼットの中を探る途中、ベッドの上の携帯が主にメールが届いたことを告げた。

「何だ？」

着替えを一旦止め、携帯をひつつかむとメールの内容を確認する。

「園美か」

メールの内容を黙々と読み耽る。どうやら、デートのお誘いのである。

「映画か……。ムリだな……」

夢斗は即座にそう判断し、断りのメールを入れた。

「そっぴゃ、オレと園美は付き合ってたんだよなあ……」

メールを送信し、着替えを再開して言う。

夢斗と園美の関係は、五ヶ月前にさかのぼる。夢斗が唯一の得意分野である数学を園美に教えてる内に、二人は次第に親密な関係となり、いつの間か付き合っていた、という感じである。夢斗としては、園美を特に意識した事は無いのだが、園美はその気が有るらしく、三年になり同じクラスになってからは、園美の方からの働きかけが多い。

「園美とは、別れるべきかなあ……」

夢斗にとっては、園美よりイブの方が気になる存在である。それに、イブも夢斗に好意を寄せている様である。ここで、関係をぐずつかせるよりきっぱりと割り切った方が良いのでは、と夢斗は考え

ていた。

「どうしようか……?」

夢斗はしばらく考えたが、良い結論は出なかった。

「まあ、いいか。月曜、ガッコーで考えよう」

夢斗がそう言った瞬間、浴室からイブが姿を現した。

「夢斗。準備は良い? 私はいつでも大丈夫よ」

ドアを開け、顔だけ出してイブは言う。

「オレの準備は完了だ。行こうか」

夢斗はそう言ってドアを大きく開けると、イブと一回アイコンタクトしてから玄関へと向かった。

第四章 第三話 強くなる為に(前書き)

またもや修行のワンシーンを書きました。

前回の修行シーンと読み比べて、二人がいかに仲良くなったかを汲み取って下さい。

第四章 第三話 強くなる為に

いつもの廃工場にて、彼らは修行に勤しんでいた。

「行くわよ」

次の瞬間、イブは一気に夢斗との間合いを詰め、右下から斬り上げる。

「くっ！」

夢斗は素早く反応した。左半身を引いて斬撃をかわすと、右足に重心を預けて斬りつける。

乾いた金属音が響く。振り切った刀を素早く返し、眼前で地面と水平にして夢斗の一撃を防いだ。

「夢斗、強くなったわね。これからは、本気で行くわ」

イブは左足を軸にして後ろ向きに回転すると同時に、夢斗の剣を巧みに流した。清涼な金属音と共に、夢斗は体制を崩す。そんな夢斗の腹部を、柄つかの頭かしらが捉えた。

「ぐっっ……」

腹部に鈍痛を覚えた夢斗は、堪らずかがみ込む。

夢斗の姿勢が低くなったところで、イブは夢斗の首筋すれすれのところところに刀を突き立てた。刀は夢斗の首筋をかすめ、地面に触れる寸前で止まった。

「……！……」

夢斗は自分の首の真横に付けた刀身を目の当たりにし、凍り付き絶句する。

「夢斗。さっきの言葉、少し変えるわ」

イブは刀を動かすことなく言った。

「な……、何て……？」

夢斗は震える顎で、声を絞り出した。

「『これからは本気』じゃなくて、『これからは八分』。本気を出したら、夢斗はもうこの世に居ないから」

イブの言葉の影に隠れた冷徹さに、夢斗は再び絶句する。夢斗は首が刀に触れないよう注意を払いつつ、首を捻ってイブを見る。その目は怯えきっていた。

「……………イブ……………」

ガチガチと震える夢斗を見る。直後、イブの冷徹な表情が崩れた。

「フフ。冗談よ。夢斗を殺すことはおろか、傷つけたくもないわ」

イブは笑顔でそう言つと、刀を引いて鞘に納めた。

夢斗はそれを確認すると、地面を押し上げ姿勢を戻し、埃を払って立ち上がった。

「じゃあさ、この練習法、やめない？」

「それは出来ないわ。こうもしないと夢斗は強くなれないもの」

さつと身を翻し、夢斗に背を向けて言う。

「イブ……………」

イブの背中を見詰める夢斗。

「どうしたの？ まだ終わりじゃないわよ」

振り返って言った。

「そうか……………、まだ続くのか。痛ててて」

腹を押さえる夢斗を見て、イブからは再び笑みがこぼれた。

「フフ。まだまだ続くからね」

イブがそう言ったとき、二人の距離は程良く離れていた。

「さあ、行くわよ」

イブは再び刀を抜いて夢斗と対峙する。

「わわっ。ちよつと待って！」

夢斗も慌てて剣を構える。

夢斗が剣を構えた直後、イブが一気に間合いを詰めた。

「チクシヨウ。二度もやられて堪るか！！」

夢斗はそう言つて、イブに斬りかかるが、あっさりかわされ背中に手痛い打撃を受けた。

「まだまだね……………」

イブは呆れたように言ったが、その一言には暖かさが込められて

いた。

第四章 第三話 強くなる為に（後書き）

次は戦闘シーンを書きます。
では、また次回で。

第四章 第四話 新たな敵（前書き）

前回のあとがきで「戦闘シーンを書く」と公言しましたが、今回は戦闘シーンになりませんでした。期待されてた方、本当に済みませんm(_____)m

第四章 第四話 新たな敵

その日は一日中修行に明け暮れた。

日が傾き出した頃、夢斗は全身埃まみれで擦り傷だらけだった。

「夢斗、そろそろ月が出るわ。行きましよう」

「おう。今すぐ行くよ」

夢斗はカラのドラム缶の上の私物をひつつかみ、イブの後ろを追っかける。

このとき、夢斗は決意した。『今日の戦いの後で、イブに本当の事を訊こう』と。

「イブ。待ってくれ」

夢斗は大袈裟に言葉を放ってイブの後を追う。イブは一瞬振り返り、そんな夢斗の姿を見て微かに微笑んだ。

二人が廃工場を出たとき、あの繁華街に新たな刺客が現れた。

「くう、ここはどこだ？」

例の路地裏に姿を現したそれは、後頭部を押さえてゆっくりと立ち上がった。

「ここがああまのクソ女の来た所か？」

それは辺りを見回す。

そのおり、静かなそよ風が吹いた。すると、それは鼻を利かせて風の臭いを嗅ぎ取り、不敵な笑みを浮かべる。

「ヒヤハハ、どうやらここで間違いないらしい。これで、オレの野望が、悲願が、何もかもが叶う」

そう言っつて空を仰ぐ。その直後、その後ろには見慣れた敵達が居た。

「ああ。てめえ等も来たのか？」

それは気配を察知し振り向くと、まるで古い友人と再会したような台詞を吐いた。

いつもの連中はそれに近付くが、不思議と威嚇や攻撃のたぐいと見られる行動は示さず、変わりに服従の意思表示とも取れる反応を示した。

「ハハア、良いぜ、てめえ等も来い！ オレと一緒に戦いな。その為のてめえ等だ」

それが再び空を見上げたとき、東の彼方の月が、ほのかに赤く色づいていた。

二人はいつもの駅に降り立つと、いつもの雑居ビルへと向かう。

「夢斗。今日はいつもより大変になるわ。覚悟しておいてね」

イブは歩きながら言った。

「え！？ それはどういう事」

夢斗はイブに聞き返す。

「フフ、何となくよ、なんとなく。でも、用心するに越したことはないわ」

イブは微笑んで返した。

「何か怖いなあ、イブにそーゆー風に答えられると……」

夢斗はがっくりと肩を落として、とぼとぼと力無くイブと並んで歩き続けた。

「頑張りましょうね。二人で」

イブはそう言っつて、もう一度笑ってみせる。

「ういゝゝす……」

夢斗は力無く答え、イブはそんな夢斗を見て三度目の笑みを浮かべた。

「みいゝゝつけた」

それは繁華街で一番高いビルのでっぺんから眼下を見下ろし、遂にイブの姿を捉えた。

「へっへ、じゃあ早速、彼女を血祭りに上げますか……」

それはくぐもった口調でそう言っつと、唇に舌を這わせてニヤリと

笑った。その時、その眼は血も凍り付くほどの恐怖と殺気に満ちていた。

「まずはてめえ等が行きな。あのアマをちよいと揉んでやれ」

それはいつもの敵にそう命じる。すると、彼らは素直に従った。

「さあて。お楽しみはこれからだぜ、お姫様……」

第四章 第四話 新たな敵（後書き）

次回では、絶対に戦闘を書きます。一度とウソは尽きません（固い決意）
では、また。

第四章 第五話 イブの懸念(前書き)

戦闘シーンです。今回は皆様の期待を裏切ってしまい、本当にすみませんでした。> m () m <

第四章 第五話 イブの懸念

二人がある程度歩を進めたところで、イブの表情が変わった。

「どうかした？」

「来たわ」

イブはそう言って、手近なビルの非常階段を登る。

「待って」

夢斗はイブの後を追う。

「今日の敵はどれほど？」

「それが、よく分からないの。何か、ワタシの感覚を狂わせる何かがあるみたい……」

言い終わると二人は屋上に着いた。立て続けに屋上伝いに移動する。

「そいつは……、強いのか？」

「解らない。ワタシの取り越し苦労だと良いけど……」

「……。解った。とにかく上手くやろう」

夢斗はそう言って、ギターケースからイブの刀を手渡す。

「ありがとう。行くわよ」

イブはそう言って足を止め、向かいのビルの一点を睨む。そこには、鬼三頭と犬二頭がいた。

「鳥は……、いないな」

夢斗は剣を鞘から抜き、竜の彫刻と目を合わせて、自分に渴を入れる。

「そうね」

イブは剣を抜き、左手で凜と構えた。

両者の間に緊張が流れる。

先に動いたのは向こう側だった。

犬達が一斉に駆け出し、大きく開口して牙をさらけ出す。

「イブ。オレは右だ！」

夢斗はそう言って飛び出した。

「ワタシは左ね」

イブも夢斗と同じタイミングで飛び出す。

夢斗は飛びかかってきた犬を、一刀のもとに切り伏せる。また、イブは犬の攻撃をさっとかわし、首を一発で切断する。

二人が殆ど同時に犬を屠ると、その光景を見ていた鬼が三頭一気に攻め込む。

「来るぞ！」

「ええ！」

端の二頭は虚空に向けて跳躍し、真ん中の一頭は直線の軌道を描き迫ってきた。

「オレが行く!!!」

夢斗がそう言った瞬間、一頭目が着地した。

「来い！」

着地の衝撃で砂埃が舞う中、敵は夢斗を爪で狙う。

爪は空を裂くが、夢斗は横に跳んでかわした。かわしまに太腿に剣を突き刺し、敵の動きを封じようとする。

「ガアアアっ!!!」

敵が叫ぶ。夢斗は容赦なく次の一撃を脇腹に放つ。

「まだまだ！」

返り血を避け、敵の正面に周り、敵を縦一文字いちもんじに斬る。返り血に染まりながらも、今度はバットをフルスイングするような形で横に斬りつけた。

敵は声を出すことも困難なほどの苦痛を喰らい、口を大きく開けたまま前屈みになる。

「止めだ!!!」

敵が前屈みになり、急所である心臓が近付いたところで、迷うことなく左胸に剣を突き刺す。

夢斗は顔面から血を浴び、上半身は赤く染まる。

「くっ……」

下を向いて血を浴びる量を少なくしようとしたが、そうする前にかなりの量を浴びていた。夢斗が後ずさると、しばらくしてから敵は倒れた。

「イブ。終わった？」

夢斗がそう訊いたとき、イブは二頭目を葬った。

「終わったわ。やっぱり、左手だけだとやりづらいわ。昨日、夢斗が来てくれなかったら、ワタシは確実に死んでいたわ」

「ゴメン」

「もう済んだ事よ。謝らないで」

イブはそう言って微笑む。

「はは、イブの笑顔、これで何回目だろう。じゃあ、オレは体洗って来るよ」

夢斗はそう言って上に着ていた服を脱ぐと、そのまま一目散に水場を探して走り出した。

イブは、そんな夢斗を見届けた後、また微笑んで呪文を唱えた。

「あゝあ。もう全員殺されちゃった」

それは向かいのビルの屋上でため息をつき、手すりに肘をついて頬杖をついた。

「さてさて、それではオレの出番かな……」

それは面倒くさそうに言うと、腰にぶら下げた得物に手をかけた。尻尾の様に垂れ下がった得物は、二つの棍を鎖で繋いだ、いわゆる三節棍と呼ばれる武器だった。

それは得物を手にして振り回してみる。棍は生き物の様に宙を舞い、それは棍を自在に操る。

ある程度やったところで、それは棍を振り回すのを止めた。

「よし、行くか」

それはそう言うと、両手を手すりにつけて反動を付けてから一気に跳んだ。

「もう終わりね……」

イブが手を下ろした瞬間、彼女は言い知れない存在に気付く。考える間もなく、イブの感覚が刀を手にしていた。直後、刀を握る手に鈍い衝撃が走る。

「アナタは……!？」

「久しぶりだなあ、お姫様」

第四章 第五話 イブの懸念（後書き）

次回では「それ」について掘り下げていこうとおもいます。
では、また。

第四章 第六話 イブの真実（前書き）

この回では、これまで「それ」と表記していた人物を「男」と表記します。あしからず。

第四章 第六話 イブの真実

敵の顔はどこかで見たことがあった。それがどこかは思い出せないが。

敵の声はどこかで聞いたことがあった。どこか人を馬鹿にして舐めきっているような横柄な声

敵の目つきは知っていた。蛇のような鋭い瞳。

敵の名は知っている。しかし、思い出したくない。

「どうして、アナタが」

イブは声を荒げ、鼻息が掛かるほど接近したそれに向かって言う。「へっへ。お姫様を追っかけてきたのさ。オレって王子様みたいだろ」

男はニタニタと笑い、右手で棍を引き寄せて左手で反対側を掴む。「まあ、正確には敵国の王子様だけだな」

棍を先程よりも高速で振り回し、その風圧は足下の埃を巻き上げる。

「覚悟ッ!!!」

男の心臓を狙い、刀を突き出す。しかし、イブの一撃を棍を繋ぐ鎖が阻んだ。

「オレを殺せるとでも思ったか？」

直後、敵は突き立てられた刀を流し、無防備になったイブに棍を浴びせた。息つく間もなく、再び棍がイブを襲う。

「!!!」

高速で迫る棍を捉えることが出来ず、イブはなす術なく二発喰らった。イブは二発目を浴びた瞬間に、横向きに吹き飛ばされる。

(速い……)

イブがそう痛感した瞬間、更なる衝撃がイブの体を貫く。イブが地面に着くより速く、男の膝が腹部を直撃する。

イブは敵の膝を浴びた後、床を数メートル滑ってから止まった。
「終わりかい？」

男は攻撃に使った方の膝を曲げたまま、反対側の脚で着地した。
棍はタオルの様に首に掛けていた。

「情けねえなあ。そんなんじゃ、国民全員殺されるよ」

横柄な態度でイブを見下ろすが、未だ警戒の糸は解いていない。
何かしような物なら、すぐにでも反応できるであろう。

「そっぴや、さっきの男はどうした？　ここに來てナンパでもしたのか？」

「夢斗の……こと？」

イブは痛みを堪えつつ、体を強引に制御し立ち上がる。イブは立ち上がったときに、棍がどこを打ったのが解った。右腕の二力所に鈍く重い痛み。

イブが痛みを知って顔を歪めたとき、男は口を開いた。

「安心しな、骨は大丈夫さ。まあ、オレが本気出したら、お姫様は一瞬でコナゴナだけどね」

イブはそれがハツタリではないことに気付いていた。男は余裕綽々と言わんばかりに、棍を手にしたまま左の小指を耳に突っ込む。

「それでさ、さっきの男って誰？」

「アナタに言ってる……どうなるというの？」

「たんなる興味さ。別に嫉妬じゃねえよ」

男はそう言っつて、小指をふうつと吹いた。

「でよ。誰？」

「関係ないわ」

「シラ切る気かよ。まあ、いいか」

男はそう言っつて両足を床に着けると、一旦俯いてから上目遣いでイブを睨む。いつの間にか、棍を体の正面で構えていた。

「死んでもらう」

男はそう言っつて姿を消した。

「何処へ……！！」

イブは男の姿を探すが見当たらない。次の瞬間に衝撃が来ることを思うと、身がすくんでしまう。

「くっ」

肩の痛みを承知で、右で刀を構える。そうでもしないと、本当に殺されてしまうほど相手が強いことをイブは知っているからだ。

「……！」

イブは自分の背後から殺気を感じた。すぐに反応するが、それより早く男がイブに肉迫する。

「ぐう……」

男は三節棍を巧みに操り、イブの背後から首を締め上げる。

「ま、殺すつっても色々あるから」

男はそう言って、更に締め付ける。

「く……は……」

尋常に無いくらい強い力で締められる。息が詰まって死ぬより、首が折れて死にそうな程の強さだった。

イブは苦しみのあまり、棍を握って逃れようとするが、男の力はそれをたやすくねじ伏せた。

「お姫様は非常にお綺麗ですから、その身体に傷を付けるつもりは御座いません」

わざとらしい口調で言った。すると、男の息が耳に掛かる。

「しかし、わたくしもいっぱしの敵ですので、やるべき事はさせて頂きます」

「……！？」

「麗しいお姫様には死んで頂きます」

イブの耳にその一言が入ったとき、彼女のぼやけた視界の中に、一人の見慣れた男の姿あった。

（……夢斗……？）

夢斗は男に首を絞められてるイブを見た途端、血相を変えて剣を握る。

「イブから離れろ……！」

夢斗は雄叫びを上げ突撃する。

「ほお。アレがさっきの……」

男がそう言った瞬間、イブは力を振り絞り男の鳩尾みぞおちを肘で打つ。

「ぐうっ……!!」

男の棍にかける力がゆるまり、その隙についてイブは男から逃れる。

「イブ、怪我は……」

「夢斗、逃げて!!」

男から解放されたイブは、最初にその一言を放った。

「え!? 逃げろって」

「早く!!」

「イブ。後ろ」

「!!」

夢斗に言われてイブは振り返る。するとそこには、怒りを露わにした男が立っていた。

「このアマ、舐めやがって!!」

男は高速で振り回して勢いの着いた棍でイブを吹き飛ばした。

「きゃあっ!!」

「イブ!!」

イブはそのまま宙を舞い、夢斗にぶつかってようやく止まった。

夢斗は飛んできたイブを腕で受け止めると、数歩後ずさって体勢を整えた。

「イブ、大丈夫!？」

イブの頭からは血が流れていた。

「それよりも、早く逃げて!!」

「いや、逃げれない。イブを置いて逃げれない。一緒に戦う」

「ダメよ。ヤツは強すぎるの! 夢斗では敵わないわ!」

「でも……」

「早くしなさい!!」

二人が言い合っている間に、男は二人に近付いてくる。

「鬱陶しいな。二人ともここで殺す」

男は静かに言った。その分、その言葉には殺意が込められていた。慣れた手つきで棍を振り回し、二人に対して殺意を剥き出しにする。「夢斗。どうしても、逃げたくない？」

イブは夢斗に背を向けたまま言う。

「え？ どういう意味？」

「どっち？」

イブは背を向けたままだった。

「逃げない」

「だったら、ワタシの真実からも逃げないって約束してくれる？」

「え？ それって……」

返答に手こずる夢斗を尻目に、イブが夢斗の言葉を制した。

「時間切れ。もう、遅い……」

その言葉の直後、イブのシルエットが変わり始めた。

第四章 第七話 深紅の姫君（前書き）

この回では、イブと男の本名が解ります。

まあ、ごゆっくり楽しんでください。――（――）

第四章 第七話 深紅の姫君

イブのシルエットは変貌を続けていた。背中が裂け、髪を掻き分けるように何かが生えてくる。皮膚の色は変わり始め、両手の爪が鋭く伸びる。

男はそんなイブを見ながら、相変わらず棍を振り続ける。

夢斗は変貌するイブと、強烈な殺気を放つ男を見ながら、何も出ずにいた。

「どうやら、カレシの前で本当の姿になる気か？」

男は訝しげな顔で言う。

「そうしないと、ワタシはアナタに殺されるわ」

イブはそう言って、更に姿を変える。

「ちっ。そんなに言うならよ、本当の姿になる前に殺してやる！」

男はそう言って、棍を振りながらイブに向かって走り出した。イブとの距離を殆ど一瞬で詰めると、棍を最高速で振り抜いた。

しかし、棍がイブに触れたと思われる瞬間、イブが閃光と突風を放ち、男を吹き飛ばした。

「！！！」

空中に直線軌道を描き、高速で宙を飛ぶ。男は給水塔に激突して止まったが、男を受け止めた給水塔には大穴が開き、盛大に水を流し始めた。その流れに押し流されるようにして、男が屋上に再び舞い戻る。

「イブ。一体何をし……」

夢斗は絶句した。何故なら、イブのいた場所には、イブとはほど遠い外見のものが立っていたからである。

「……」

男を吹き飛ばした張本人は、ゆっくりと振り返って夢斗を見る。

「夢斗。信じたくないでしょうけど、これが本当のワタシなの」

「え……！！？」

蝙蝠こうもりのような翼。鋭く伸びた二本の角。漆黒の様な髪。そして、深紅の瞳とそれによく似た色合いの肌。

「イブ……なの？」

「ええ、ワタシは『イブ』よ」

夢斗は自らの眼を疑ったが、眼の前に居るのはイブで間違いないと悟った。その証拠に、イブの服は姉の物であるし、握られた刀はイブの刀である。それに何より、声はイブの物であった。

「おお、痛え……。ふざけやがって……」

男はびしょぬれになりつつも、立ち上がり様にそう言った。

「アナタも本当の姿が有るでしょう」

イブは静かにそう言った。

「へへ、女に本気出すほど、オレは落ちちやいねえよ……。それによ、ここにきたばっかで、ちよいと力が出ねえんだよ」

「あらそう。アナタのさっきの一撃は、どうも全力を注いだような気がしたけど」

「黙んなー!! とにかく、ここでめえを殺す。そこのカレシも一緒になー!!」

男はそう言うのと、姿を消した。

「ど、どこへ!?!」

夢斗はあわてふためき、辺りを伺う。

「夢斗。ワタシの側を離れないで」

イブがそう言うのと、夢斗は少し躊躇い（ためらい）ながらも、イブに背中を預けた。

「そう。そのまま動かないでね」

イブは夢斗の安全を確保すると、両手で刀を構えて辺りを睥睨する。

「来なさい」

その直後、イブのすぐ隣の床に大きなひびが入った。間髪入れず、男が現れてイブに一発浴びせるが、イブはその一撃をたやすく弾いた。

「どうしたの。さっきより力が入ってないみたいだけど？」

イブはそう言うと、男に刀の切っ先を向ける。

「ちい、どうも調子が出ねえ……」

男は再び攻撃に出る。

姿を消すと思いきや、耳をつんざくほどの轟音と共に連撃が放たれる。

イブはその一撃一撃を丁寧にし、一瞬の間について斬りつけた。「がはっ……」

腹部を横一文字に切られた男は、血を吐いてうずくまる。

「くそっ。なんて女だ……。オレが振り回されてるなんて……」

「一つ良いかしら？」

イブが男を見下ろしたまま口を開いた。

「アナタの名前、思い出したわ。思い出したく無かったけど」

「……」

「『アルバ』……。確か、そんな名前だったわね」

イブがそう言うと、アルバと呼ばれた男はゆっくり立ち上がった。

「ああ、そうさ。オレの名は『アルバ・デラン』。そう言うてめえの名前も思い出したぜ」

イブは沈黙したままアルバを睨む。

「『イブ・キール』だったよな。キール三代目の愛娘、『深紅の姫君イブ・キール』」

第四章 第八話 「サヨナラ」 (前書き)

この話でイブの唱えた呪文を、逆さに読んでみてください。彼女の覚悟が解ります。

第四章 第八話 「サヨナラ」

「……」

アルバの衝撃的な一言の後、両者の間を沈黙が流れる。

そんな重苦しい空気を崩したのはイブだった。

「アナタがアルバ・デランというのなら、ガデュー・デランを知っているはずよ」

「ほう、オレの親父を知ってんのか」

「ええ、知っているわ」

互いに挑発的な会話を交わす。

そのおり、夢斗がめくるめく展開に耐えかねて、思わず声を上げた。

「イブ！ 『深紅の姫君』って一体!？」

夢斗の言葉の直後、アルバは夢斗を睨み付けた。

「うるせえ。関係ないヤツは黙ってる!」

そう言った瞬間、アルバは姿を消し、夢斗の体が宙を舞う。

「……!」

生まれて初めての感覚に言葉を失う。

「夢斗!!」

宙に舞う夢斗を見て、イブは声を上げた。

数秒の対空の後、夢斗の体は屋上の床に帰ってきた。

「夢斗。大丈夫?」

「か……、あ……」

夢斗は苦痛により声が出ない。

「殺しちゃいねえよ。オレは平和主義者だからよ」

アルバの言葉に触発されたのだろうか、イブの表情がきつくなり、キツとアルバを睨んだ。

「『平和主義者』!？」 笑わせないで。あの戦争は、アナタの一存

でしょ！！ アナタの下らない理想とか野望の為に、一体どれだけの国民や兵が犠牲になったと思っっているの！？」

イブは激昂して言ったが、アルバには蛙の面に水のようにだった。耳掃除をしながらあくびをする。

「ふあゝあ、うるせえな。とにかく、オレは平和主義者なんだよ。弱いヤツは殺さねえし、オレは戦場に出てねえしよ」

「同じ事よ！！ 聞けば、軍事の最高指令もアナタが下してたそうじゃない！？」

「ああ、そんな事もあつたなあ……」
アルバは伸びをしながら聞き流す。

「何故、無抵抗な民間人を攻撃したの！？ 何故、負傷した捕虜の兵士も殺したの！？ 結局、アナタは平和なんかどうだって良いのよ。私欲さえ満たせば、それで良いのよ！！」

イブの怒りは最高潮に達していた。肌の色は、限りなく深紅に近づき、翼は目一杯開いていた。

「あゝあ、うるせえ、うるせえ。オレがためえの中で平和主義者じゃなかったら、ためえはオレをどうする気だ？」

アルバは首の関節をコキコキ鳴らしながら言う。
「アナタを……、ここで葬る！！」

イブは刀を構え、有りとあらゆるエネルギーを闘志に変える。
「葬る？ ここで？ オレを？ はっは、たいそうな事をおっしや

いますねえ、姫君」
イブの怒りをさして気にも留めず、ましてや逆撫でするような身振り手振りで挑発する。

「姫君の特長は存じていますよ。姫君はわたくしを一瞬のうちに切り刻むおつもりでしょうが、わたくしには特別な呪文が掛けられています」

アルバはそう言うと、先程の刀傷を見せつけるようにして背筋を伸ばす。すると、アルバの腹部に有るはずの傷は、服の切り裂かれた跡のみを残して、綺麗さっぱり消えていた。

「わたくしに剣は効きません。なぜなら、わたくしの体は刀剣による一切の傷が一瞬で癒えるよう、強力な呪文が掛けられていますのでよって、姫君はワタシを葬れません」

アルバはそう言うと、得物の棍を捨てた。

「残念でした。それでもわたくしを斬りたいというのなら、どうぞ御自由に」

立ったまま大の字になり、空を見上げる。隙だらけと言うよりは、隙そのものであった。

「さあ、どうぞお好きなように」

顎を上げた状態でイブ見る。当然の事ながら、下目使いをしなればそう出来なかったが、それは、イブに対する侮辱と嘲笑の意味を含んでいた。

「早くやれよ」

「覚悟！」

イブは一步踏み出すと同時に、神速とも言える速度で刀を振り抜く。そのあまりの速さにより、夢斗の鼓膜は破れそうになり、彼はその痛みで目を覚ました程だった。

「ハッハハハハハハ。斬れるモンなら斬りな！」

その言葉と殆ど同時に、アルバの首が宙を舞う。

斜陽に照らされたアルバの首は、邪心に満ちた笑顔のまま虚空を泳ぐ。

「イブ……、倒したの……？」

夢斗は何とか声を絞り出し、肩で息をするイブに近寄る。

「ハア、ハア……」

膝に手を突き、首のないアルバの体を睨み付ける。

アルバの首が床に落ち、鈍い音が聞こえたとき、イブは勝利を確信し僅かに微笑む。

「やった……」

イブはそう言って胸を撫で下ろす。

しかし、その直後、二人は想像もし得ない体験をすることとなる。

「誰をやったって？」

陰険で横柄な声。その声が響いた直後、首を失ったアルバの体が動き出した。それも、ゾンビのようなふらふらした動きではなく、確実に力強い躍動だった。

「な……。何で……？」

イブは我が眼を疑う。

「言つたる。オレには強力な呪文が掛けられてるって」

体の数メートル先に落ちたアルバの生首は、二人をギラギラと睨んで喋っていた。

「……！」

「……！」

あまりに不気味な光景に、二人は絶句する。夢斗はアルバに釘付けになり、イブはがくりとうなだれる。

「残念でしたねえ。姫君……」

アルバの体は首に引き寄せられる様に歩き、己の首を拾って元の位置に戻した。首と体の境目が触れる瞬間、そこから電光によく似た光が発せられた。

「さて。どうしようかな？」

アルバは二人を交互に見る。

「姫君は、ここで始末しようかな。ま、元々それが目的だったワケだし」

アルバは棍を拾い上げる。

「隣のカレシは……。うん、どっか山奥に連れてこよう。そこでのたれ死んでもらおう」

アルバは棍を回し始めた。

「どっちにしる、二人とも助からねえさ」

口をニタニタと開き、舌が口の周りを這い回る。まるで、御馳走を見て舌なめずりするかのよう。

その時だった。うなだれていたイブから、静かだが力強い声が発せられた。

「夢斗。短い間だったけど楽しかった」

「え!?!」

「夢斗と過ごした時間や、夢斗の言葉と想い、絶対に忘れない……」
イブはアルバを睨み付ける。その眼には、確固たる覚悟と決意が秘められていた。

「イブ! ダメだ!」

イブの眼を見た夢斗は、彼女の思いを肌で感じ取った。イブを止めようと動き出すが、それよりも早くイブが振り向いた。

「夢斗……。これまで、ありがとう……」

「!?!」

イブは泣いていた。深紅の双眸から大粒の涙を流し、潤んだ瞳で夢斗を見詰める。

「生まれ変わったら……。また、夢斗と逢いたいな……」

イブはそう言って笑うと、涙をぬぐう。

「夢斗。サヨナラ……」

「イブ!?!」

その言葉の刹那、イブはアルバに肉迫していた。

「お別れの言葉は済んだのかい?」

二人の会話はアルバに筒抜けの様だった。しかし、この際、そんなことは気にしてられなかった。

「デンシ……」

イブは静かに呪文を唱え始めた。

「おいおい。何する気だ?」

アルバはイブの行動の意図が読みとれないでいる。

「二エ……」

イブは呪文を唱え続ける。

「てめえ、まさか。アレを使う気か?」

アルバはイブに訊く。

「カキ……」

イブは答えずに、呪文を唱え続けた。

「おい。それ使つと、オレはおろかてめえも死ぬぞ！ カレシの前でグチャグチャになつても良いのか!?」

アルバはここに来て、ようやくイブの覚悟を悟つたようである。

「……」

イブは呪文を一端やめ、アルバを見た。

「もう、お別れは済んだの」

「本気かてめえ!!」

「……ヒ」

「聞いてんのか!?」

「……ト」

「止める!!」

「……チ」

「おい!?!」

「……ノ」

「止めるつつつてんだろ!!」

「……イ」

イブが呪文を唱え終えた時、イブとアルバを巨大な閃光と爆音が包み込んだ。

「……」

呪文が唱えられ、閃光と爆音の瞬間に、夢斗はイブの名を叫ぶが、その声は誰にも届かなかつた。

第四章 第八話 「サヨナラ」 (後書き)

t o b e c o n t i n u e d .

第四章 第九話 イブ（前書き）

この話では、イブの名前の由来が解ります。

第四章 第九話 イブ

強烈な爆音、閃光、そして僅かに遅れて衝撃が夢斗を襲った。

「くう……」

夢斗は身を低くして衝撃を免れる。

幾つもの風が通りすぎ、辺りに静けさが戻ってきたとき、夢斗は身を起こし爆発の中心部を見る。黒い跡が不規則な星形となり、煙幕が立ちこめていた。

「……、イブ……。どうなったんだ……？」

夢斗は呆けたように立ち尽くす。イブの別れの言葉の後、イブは敵に近付き何やら語り始め、敵が悲鳴を上げた直後、イブは爆発の中心になった。夢斗にはそれが解らなかった。

「……本当に……。もう会えないの……？」

突然の別れ。夢斗はそれを受け入れることが出来ず、その場に膝を付き俯いて涙を流した。

「そんな……。イヤだ……。やっと、やっとイブと分かり合えたのに……」

頬を伝う涙は、床に落ちて染みになる。

夢斗は再び、爆発の中心に眼をやる。少しずつ煙幕は晴れ、向こう側の景色が見えようとしたその時だった。

「イブ……」

不規則な星形の中心にイブが居た。うつぶせに倒れたイブ。イブの衣服の所々は破れており、全身傷だらけであった。

「イブ……」

夢斗はイブに駆け寄る。

「イブ、大丈夫！？」

イブの胴体を抱き上げ、固く閉じた瞳に問いかける。夢斗にはイブの体を伝って、鼓動と呼吸が感じ取れたが、それは微弱なものであった。

「イブ！！　お願い、眼を開けて！！」

涙ながらに懇願し、イブをさする。

「……………夢斗……………？」

イブはゆっくりと眼を開けた。

「……………。夢斗……………ゴメンね……………。倒せなかった……………」

何とか言葉を綴ろうとするが、上手く唇が動かない。何より、体を動かす度に、動かした箇所には激痛が走る。しかし、イブは痛みを堪えて尚も話そうとした。

「……………、ヤツは……………、もう……………いない？……………」

そう言われて、夢斗は辺りを見回す。イブの起こした爆発によって、辺り一帯の物は歪にひしゃげていたり吹き飛んでいた。仮に、アルバが生きていたとしても、恐らくタダでは済んでいないであろう、と夢斗は直感した。

「大丈夫。ヤツはもう居ないよ……………」

「……………そう……………良かった……………」

夢斗はこのとき、アルバの姿を見ていたとしても、イブに本当の事を告げなかったであろう。もし、アルバが生存しよう物なら、イブは無理をして本当に命を落としかねない。イブと別れたくない想いで一杯の夢斗なら、間違いなく嘘を付いていた。夢斗はそのことを自分の中で噛みしめつつ、イブの頭を優しく撫でた。

その時だった。

「おい、さっきこの辺で凄い音がしなかったか？」

「ああ、したな。何があった？」

「行って見てみよう」

そのビルの非常階段から、数人の男の話し声が聞こえた。

「まずい……………」

夢斗はそう言ってイブの刀と自分の剣を回収し、イブを抱き上げた。

「ここは危ない。どこか安全な所へ……………」

夢斗はイブを抱いたまま走り出した。

何度かビルを屋上伝いに渡り歩き、夢斗はようやく安全な場所を見つけた。

「ここなら、もう大丈夫だよ」

そこは例のバイト先である。

調理器具やテーブルは既に無くなっており、無機質なコンクリートの壁に囲われた空間。しかし、イブの姿を隠すには、それで十分だった。

「イブ、さつきから辛そうだけど、大丈夫？」

イブはあの爆発の時から具合が悪そうだった。肌が紅いので青ざめていると言いつつ難かったが、とにかく辛そうである。

「無理もないわ……。の呪文は……。自分の命……。引き替え……。相手……。殺す呪も……。だから……」

それを聴き、夢斗は驚愕した。まさか、イブがそこまで思い詰めていたの知らされたからである。

「そんな……。死んだら、どうする気だったの!？」

「ごめんなさ……。で……。うするしか無かつ……。……」

「そうするしか無いって……。それに……」

夢斗がそう言おうとしたとき、イブは夢斗の眼を見詰めて夢斗を制した。

「な……。何？」

「ワタ……。夢斗に……。全部話す……。も……。隠し通せないみた……。……」

イブはそう言うと、ゆっくりと語り始めた。

とある宮殿にて、一人の女の子が産声を上げた。全身燃えるような紅い肌で、瞳は吸い込まれそうなほど美しい深紅。その女の子は、父親が皇帝に即位する前夜に生まれた。

「アナタ。可愛い女の子よ」

「そうだな、この子の名は『イブ』にしよう。私が皇帝になる前夜

に生まれたから」

「素敵ね。『イブ』という名前」

『イブ』。それは、これから幾多の争乱の渦中に生きる悪魔の名。

第四章 第十話 EVE（前書き）

このお話は、コレまでになくぐらぼつに長くなってしまいました。
本当に申し訳御座いません。m（――）m^

第四章 第十話 E V E

イブが生まれた翌日。彼女の父、クロン・キールが皇帝に即位した。彼はアリンス帝国の前皇帝ボワズ五世直々の指名を受け、ボワズ五世の死後、皇帝に即位した。

皇帝の住まう巨大な城の『皇帝の間』で行われた『即位の儀式』において、彼は皇帝の証とされる王冠と剣と玉杓を継承し、新たな皇帝となった。

儀式が終わると、彼はしきたりに従い、国民達の待つ城内の広場へと向かう。

「陛下。姫君も国民にお披露目なさるのですか？」

キール家に代々使える老執事が行った。

「そうだ。あと、私の妻も呼んできてくれ」

「ははっ。仰せの通りに」

そう言って、老執事は皇妃を呼びに行った。

新しい皇帝が誕生した丁度その時、他国にて新たな命が生まれた。ガデュー様。お生まれになりました」

妖しげな神殿にて新たな命が生まれたことを、その神殿の司祭が父親に告げた。司祭は全身を黒いローブで包み、頭を黒の三角頭巾ですっぽりと覆っていた。

「ほう、ようやく生まれたか。ならば、その子の名は……、『アルバ』だ」

「はい、かしこまりました」

司祭はそう言っつてその場を去ろうとする。それを、アルバの父親が止めた。

「わかっているだろうな、アルバは我が跡を継ぎ、アリンス帝国を征服し、ゆくゆくは魔界全てを統治する身だ」

「はい。心得ております」

「私がお前に言っておいた事、忘れるな」

「はい。ではこれより、アルバ様にまじないを掛けに参ります」
司祭はそう言っ、部屋を出た。

「フフ……」

セルバの父親、ガデュー・デランは不気味に笑った。

「頼むぞ、アルバ。私の代わりに……」

ガデューに四肢は無かった。それに、彼の顔は傷だらけであり、左眼には眼帯がされていた。

「この頼りない体の私の代わりに……」

「ギヤアアアアアアアアアア……」

赤ん坊の悲鳴が轟く。

「……」

ガデューは訝しげな表情でドアに目をやる。

しばらくして、例の司祭が現れる。

「ご心配なく。まじないは無事にかかりました。おい、お連れしろ」
司祭がそう言うと、数人の司祭と同じ恰好の部下が現れた。その中の一人が、先程下ろされたばかりの赤ん坊を抱いていた。

「おお、これが我が息子が……」

ガデューは生まれたての息子、アルバを覗き込む。アルバはすやすやと眠っていた。

「おい、まじないの効果を見せろ」

ガデューがそう言うと、部下の一人が壁に飾ってある剣を手に取り、おもむろに鞘から抜きはなつ。

「では……」

部下が剣を構えると、アルバを抱いていた部下がアルバの右腕を持ち上げる。

「ハッ！」

部下はアルバの右腕を切断した。しかし、アルバは何事も無かったかのように眠っている。

一同に見守られる中、アルバを抱く部下が、斬られた腕を肩の切

り口に重ね合わせる。すると、そこから電光が走り、腕は傷跡一つ無くくつついた。

「おお、見事だ。そう言えば、カヤラはどうした？」

カヤラとは、この国王妃の名である。

それを聞かれた司祭は、重々しく口を開いた。

「カヤラ様は……、御分娩の血の病で御座います。助かる道は……御座いません」

「なんと……」

ガデューはその報告を聞き愕然とした。

しばらくの沈黙の後、ガデューは感慨深げに言った。

「アルバ……、我が腕で抱けぬのが残念だ……。我にはもう、お前しかおらぬ……」

『アルバ』。後に戦乱の渦中となる悪魔の名。

皇帝が新しく君臨してから十年の月日が流れた。皇帝の信頼は絶大な物となり、国は繁栄の一途を辿った。

荘厳な城。その中にイブが居た。

「オズ。早く行くわよ」

城の中の広場にて深紅の瞳と紅い肌のイブが誰かを誘う。

「姫君、待って下さい」

イブに誘われた者は筋骨隆々で牛の頭を持ち、首から胸にかけてたてがみで覆われ、足は蹄であった。彼の名は『オズワルド・バンフ』。キール家に代々仕え、主にキール家の者を護衛するのが使命である。しかし、キール家の当主が皇帝に即位したため、セルバ帝国の軍事も司ることとなった。オズワルドは、バンフ家の三男である。

「姫君。城の外に出てはならないと、陛下にきつく言われているではありませんか」

「構わないでしょう、少しくらいなら」

「いけません。それに、城下は危険です。今すぐお部屋に戻って下

「さい」

「もう良いわ」

ぷいっとそっぽを向き、城内へ引き返す。

その時、広場に野太い声が響く。

「オズワルドー！」

「ち。父上！」

オズワルドを遙かに凌ぐ彼の身長は、優に三メートルを越えていた。彼の名はアーノルド・バンフ。バンフ家の当主であり、皇帝の護衛と軍事の最高統率の二足のわらじを履く。彼は歴戦の剛勇であり、『無敵の牛鬼將軍』と他国の軍から畏怖されている。彼の手には、歴代の当主に受け継がれてきた豪槍・牛頭ウシガタが握られていた。

「オズワルド。稽古の時間だ。早く来い」

「はいっ。父上」

アーノルドは踵を返し、城に隣接する道場へと向かい、オズワルドもそれに続く。

「……………」

イブはその模様の一部始終を、植木の影から見ている。

「痛つてえな。コラ」

アルバが生まれてから十年。彼はその国の王子として暮らしている。しかし、王子とは名ばかりで、毎日のように傲慢な日々を送っている。しかし、やはり王子たるもの武術を身につける必要は、多かれ少なかれある。そう言うわけで、彼は例の司祭に武術の稽古をつけられていた。

「さあ、お立ち下さい。アルバ様は、いずれ魔界を背負って立つお方なのです」

先端に小さな突起の付いた金棒を持ち、アルバに突きつける。アルバは三節棍を持っていた。

「だったらよ、もっと優しく相手出来ねえのか？ オレは魔界の王だろ？」

「それは、アルバ様が私の言うとおりにしたららの話です。毎日のように稽古をさぼっているようでは、魔界の王にはなれません。さあ、立ってください」

「うるせえ！！ オレはオレのやりたいようにヤル！！ てめえの言うことなんか聞けるか！！」

アルバはそう言つて部屋を出た。

「くっ……。何とも生意気に育つたものだ……」

司祭は苦虫を噛みしめたような表情をして言った。

イブが生まれてから一四年の月日が流れたある日。イブは自らの角と翼と紅き肌を隠す術を学び身につけた。しかし、どれだけ努力しても、彼女の深紅の瞳だけは隠せなかった。

「何故……。これだけは変わらないの……」

何度も何度も試みるが、鏡に映るのは深紅の瞳。

「イブ。出来ましたか？」

イブの部屋に入ってきたのは、その国の皇妃でありイブの母でもある者だった。

「母上……。申し訳有りません、どうやっても、この眼だけは紅いままです……」

うつむき顔を逸らし、強く握り拳を作る。イブは、母に対する申し訳なさでいっぱいだった。

そんな彼女に、母が優しく手を差し伸べる。

「良いのですよ。それに、その深紅の瞳はキール家の証。無理に消す必要は有りません」

「母上……」

「私の目は青ですが、イブはその眼に誇りを持つのです。イブはこの国を引き継ぐ者なのですから」

「はい。わかりました」

イブは顔を上げ、母と対面して強く頷く。

「さ、これから剣術の稽古の時間です。一国の姫たる者、身につけ

るべき物はしつかりと身につけなくてはなりません」

「はい、心得ています」

イブはそう言うと、飾り棚に鎮座した刀を手にする。

「では、母上。言って参ります」

そう言つて、部屋を後にした。

「立派になったものね……」

母はそう言つと、頬を流れる涙をぬぐつた。

アルバは近くの河原にいた。土手に寝っ転がり、草きれをくわえ、鼻歌交じりに空を見上げる。今日もいつもの様に武術の稽古をさぼつていた。

「ちい、あんなじいさんに教わるより、スラムの連中と喧嘩した方が強くなれっぜ」

ぶつぶつとぼやきながら、自分の棍を振り回す。

そのおり、数十メートル向こう側の橋に、例の司祭がいた。

「ちっ。探しに来やがった。ええい、こうするか」

アルバは精神を統一させると、なんと別の人物へと姿を変えた。

その外面だけでは、誰も彼を王族の物だとは思わないであろう。今の彼は、どこからどう見ても、スラム街の老人だった。

「へっへ。コレでよし」

アルバはそう言つて、満足げな表情を浮かべる。

しばらくして、司祭が変化したアルバに近付く。

（見破れるんなら、見破つてみな）

心の中でそう呟く。しかし、アルバの企みは会えなく司祭に見破られた。

「さあ、アルバ様、稽古に戻りましょう」

（何でだ？）

アルバは一瞬動揺したが、平静を装い司祭に話しかける。

「何か恵んで下され……」

アルバは貧民の様にか細い声を出す。

「無駄です。アルバ様はいつの間にも『変化』を覚えた様ですが、その衣服は王族特有の刺繍が施されています。それに、その棍に下々は触れられません。さあ、行きましよう」

「（ちっ、やなこった） お恵みを……、お恵みを……。わしは生まれながらの貧乏人じゃて……」

アルバは尚も貧民のフリを続ける。

「そうですか。では、刃を恵んでしんぜよう……」

司祭は腰から長刀を抜く。

「ひいいい！ お止めくだされ！！」

「覚悟っ」

司祭はアルバを斬った。胴体を袈裟切りにする。

「さあ、行きましよう」

アルバには、斬られた時にできる傷が無かった。服のみが切り裂かれ、しよぼくれた瘦身がその隙間から覗く。

「ちっ。ばれちゃしようがねえか……」

アルバは観念し元に姿に戻った。

「妙な所に賢くなったもんだ……」

司祭は小さくこぼした。

イブが一五歳になった日。突如、隣国の軍勢が大挙して押し寄せてきた。理由は無かった。単なる侵略戦争だった。

「將軍。どうか宜しく頼む」

皇帝は軍事大臣アーノルド・バンフに懇願した。

「お任せ下さい。既に国境付近に兵を向かわせております。ご心配にはおよびません、すぐに終結するでしょう」

アーノルドは皇帝の前に跪き、右の拳を左手で覆ってそう告げた。

「何とも心強い。頼むぞ」

「はっ」

アーノルドは得物を取り直し、踵を返してその場を去った。

「はっは、面白くなってきたぜ」

王宮の一室にて、アルバはなんとも愉快そう笑っていた。

「親父の夢だかな、オレがすっかり叶えてやっぜ」

アルバは棍を手を取った。

その時、あの司祭がアルバの部屋に飛び込んできた。

「アルバ様！ なりませんぞ！ 何が有ろうとも、アルバ様は戦場に赴かせませぬ」

ドアの固く閉め、手足を大きく広げてアルバの行く手を遮る。

「勘違いすんな。オレは戦争がしたいんじゃない。この国の兵士を操ってみたいのさ」

「それもなりません。アルバ様は用兵を学ぶより、政治を学ぶのが先決で御座います」

「ちっ、いつつも『あれは駄目。これも駄目』だ」

アルバはふてくされ、乱暴に棍を叩きつける。

「チクシヨウ……」

軍事侵略が始まってから半年の月日が流れた。

当初、長くて三ヶ月を要する、と踏んでいたアリンス帝国軍は、敵国であるソドル王国の予想以上の軍事力に圧倒され、各拠点では撤退を余儀なくされていた。

「まさか。向こうがこれほどまでとは……」

アーノルドは狼狽し、円卓を強く叩いた。

『父上！！』

円卓の向かい側に座っていた二人の息子が、同時に声を上げる。

「シラルド、ラバルド。どうかしたのか？」

「拙者達が参ります。この戦況、拙者達が打開して見せましょう」

「お前達……」

アーノルドは交互に二人に目をやる。重い空気が流れ、ただならぬ雰囲気となった。しばしの沈黙の後、アーノルドは重い口を開けた。

「解った。お前達に三万の兵を託す。何とかこの状況を打開してくれ」

『はっ！！』

二人同時に跪き、これまた同時に声を上げた。

「ガデュー様！ それは左様で御座いますか！？」

ガデューの伏す部屋に、司祭の素っ頓狂な声が響く。

「アルバ様に、この国の軍事の最高支配権を譲ると！？」

ガデューはゆっくりと静かにうなづく。

「な、言つたる。親父はオレに軍事を譲ってくれたつて」

アルバは司祭の肩に手を掛け、何を吹き込むように言った。

「くっ……。ガデュー様がそう仰られるのであれば、私がとやかく言うことは出来ませぬな……」

司祭は不服を強引に噛み殺し、その場を重い足取りで後にした。

司祭がいなくなった後、アルバは懐から青い小瓶を取り出した。

「流石、秘伝の誘導薬だな……。これがなきゃ、オレは普通の王子様のまんまだつた……」

アルバはこの薬をガデューの飲み水の中に混ぜ、それをガデュー

に飲ませた上で『軍事の最高支配権を譲れ』と吹き込んだのである。

司祭は、アルバが軍の指導者になったことを証明させるための証人だった。

かくして、アルバはソドル王国軍の最高支配権を手に入れた。

「えっ！？ オズ、それは本当なの！？」

城の広場の片隅にて、イブとオズワールドが佇んでいた。

「はい、本当です。私の兄は……。武人として……。最高に名誉の最期を遂げました……」

「そんな……」

オズワールドは空を仰ぎ、声を出さずに泣いていた。

「父上は……。二人の仇を取りに……。明日、戦場に赴きます……」

こみ上げてくる嗚咽を堪え、途切れ途切れに言葉を綴る。

「もしかして、オズも行くの？」

「拙者は……まだ一八ではないので……、戦争には行けません」
バンフ家のしきたりで、一八に満たない者は、例えどれほどの実
力があるうとも、戦争には行けないのである。

「そう……。お気の毒に……」

「いえ。兄は武人としての指名を全うしました……」

一陣の風が流れ、オズワルドの頬の涙をどこかへ持ち去った。

「いやー、今日の戦いはしんどかった」

アルバはかなり疲弊していた。

「と、申されますと？」

司祭はアルバに訊く。

「それがさ、牛みたいなヤツが二人も居てよ、そいつ等が兵士をバ
ツタバツタとぶっ飛ばしてくれてよ、それで、仕方なくオレが出た
んだけど、そいつ等が強くてよ。マジで殺されそうだった。あー、
しんど……」

アルバはベッドに横たわると、そのまま寝入ってしまった。

「何！！ 将軍が……戦死……」

皇帝は驚くより他なかった。なぜなら、全幅の信頼を寄せていたア
ーノルドが、戦地にて死んだというからである。

「……将軍」

椅子に座り直し、頭を抱える。

「陛下……、これが遺品です……」

老執事がそう言うと、数人の兵士が一本の槍を抱えて現れた。
その時だった。

「父上が！！ 父上が死んだとは誠まことでありますか！！」

そこに現れたのは、他でもないオズワルドであった。

「ああ、この槍を見る限りでは……、信じざるを得ないな……」

皇帝は静かに呟いた。

「父上えー!!」

オズワルドはその場に倒れ込み、大粒の涙を流した。

「オズ……」

オズワルドを追うようにして皇帝の間に入ってきたイブは、ただ泣き伏すオズワルドにそっと触れる。

その日、城内にはオズワルドの泣き声が響き続けた。

「チクシヨウ……。何なんだ、あの野郎は……」

アルバは戦場と間近の山林の中にいた。アルバは全身アザだらけで、衣服はボロボロに引き裂かれていた。

アルバはつい十数分前まで、アリンズ帝国最強の將軍、アーノルド・バンフと戦っていたのである。アーノルドの強さは尋常ではなく、刀剣の効かない体のアルバでさえ苦戦を強いられた。その証拠に、彼の左腕はあらぬ方向に曲がっていた。

「クソツ！ ふざけやがって……」

アルバは額から脂汗を流し、必死に痛みを堪える。しかし、生まれて初めての痛みに耐えかね、アルバは為す術なく気絶した。

アーノルドが戦場での最期を遂げると、指導者でもあり軍事の象徴でもあったアーノルドを失ったアリンズ帝国に、ソドル王国の軍勢を止める手だては無かった。各方面の士気・兵力は見る見るうちに減少し、帝国の首都と戦線が僅か数キロにまで迫っていた。

ソドルの侵攻は、アリンズ帝国の農村部にまで及んだ。それを知ったアルバは、とんでもないことを口に出した。

「民間人？ だからどうした。侵攻の妨げになるなら全員殺せ」

「しかし、それはあんまりにも……。それに、それを実行する兵も気が進まないかと……」

「じゃあよ。そこに魔獣を放せ。あいつらなら、目に見えるもの全

てを食い尽くすまで止まらないしよ、兵はなんもしなくて良いぞ」

「しかし……」

「やれ」

その言葉の直後、アルバは目の前の司令官を鋭く睨む。その眼光は、心臓を射抜けそうなほど鋭かった。

「はい……。かしこまりました、最高司令官殿……」

そう言ってその場を去ろうとする司令官に、アルバがさらに告げた。

「ああ、そうだ。牢獄でうなってる捕虜がいただろ。アレ、痛そうで可哀想だからさ、殺しといて」

「……！！」

振り向き驚きを露わにする司令官に、アルバは更に告げる。

「オレ、平和主義者だから。痛いのが我慢して、まだ戦おうとするやつ見ると、なんだ可哀想でさ。ま、そーゆーことだからヨロシクね」

その夜。アリンズ帝国のへんぴな農村に魔物が放たれ、城の地下牢獄にて、何名かの捕虜が斬首された。そのことは、アリンズ帝国が送り込んだスパイを経て、翌日中にアリンズ帝国の皇帝の耳に入ることとなった。

民間人への攻撃、捕虜の虐殺。この情報がもたらされたアリンズ帝国の軍は、一旦は勢力を盛り返したが、それはほんの一次的なものだった。

アリンズ帝国に残された道、それは無条件での全面降伏しかなかった。しかし、アルバはそれを聞き入れることなく、尚も侵攻を続けた。

「このままでは、我々は滅亡です。最後になにか、出来ることがあるでしょう……」

今後の国の行く末を決める会議にて、往年の老執事は重々しく口を開けた。

それに答える者はおらず、このまま重い空気が流れる、と誰もが

悟ったとき、一人の魔導師が拳手した。

「一つだけ、我らが滅亡を逃れられる術があります。それは、姫様を別の次元へ逃がすことです」

議場の誰もが言葉を失ったが、それ以外の良策が出ることは無かった。

イブを逃がす夜。彼女は自らが学んだ剣術で使う刀と、キール家の家宝である剣を手に城を出た。

城下は既に戦乱のまっただ中であつた。そこら中に屍が転がり、雄叫びと断末魔の叫びが耐えることなく響き続ける。

「姫君だけは。なんとしても護るのだ！」

一人の老兵が叫ぶ。

「助けてくれ……」

どこからか誰かの助けを請う声が聞こえる。

しかし、イブはその一つ一つを無視し、意を決して走り出す。

イブが走り出してから間もなく、先程の老兵が死んだ。眼の前に彼の首が飛んできて、それが壁に当たって落ちる。

「……」

イブは一瞬たじろぐが、なんとか足を動かす。

(もういや。なんで、みんな死ななきゃいけないの!?)

走りながら必死に涙を堪える。感情を表に出すことは希だが、彼女は人一倍国民思いで、心優しい性格なのである。しかし、『姫』という立場上、それを表に出すことは出来なかつた。

その時だつた。

「姫君……」

背後から聞き慣れた野太い声。

「誰」

イブは振り返る。オズワルドだつた。

「ここから先は危険ゆえ、拙者が護衛致します」

オズワルドは跪き、右の拳を左手で覆い、最敬礼で胸を伝える。

「わかったわ」

イブは無表情で答えた。

「行きましょう。こちらです」

オズワルドの先導されてイブが走り出す。目指すは例の魔導師の家。そこに行けば、自分を無事に逃がしてくれるのだという。イブは、自分が何処に逃がされるのかを知っていたし、イブの両親も、数少ない国民達も知り認めている。イブに課せられた使命、それは無事に逃げ延びること。『自分だけ逃げたくない』などと甘えている余裕など無いことはよく解る。それを踏まえ、深い悲しみと罪悪感を押し殺し、イブは走り続けた。

走り出してからどれ位経ったであろうか。二人は城下を離れ、郊外の野道を走っていた。魔導師の家まであと僅かだった。

しかし、その時。

「ぐう!!」

「オズ!!」

待ち伏せていた敵がオズワルドに矢を放った。

イブが現状を把握した直後、オズワルドは大声で言った。

「姫!!! どうか、ご無事で!!!」

オズワルドはそう言って、伏兵の待つ修羅場へと突撃した。

(オズ……。ワタシだけ逃げて、ゴメンね……)

イブは堪えきれなかった涙を流し、その場を一目散に駆け抜けた。

イブは無事魔導師の家に辿り着いた。

魔導師の家に入り、部屋の中央にあった魔法陣の中にはいると、自分の視界に幾つもの光が現れ、そのまぶしさに眼を閉じそして開けた瞬間に、自分は見たことの無い所にいた。

自分の居場所が掴めぬまま、その場でキョロキョロしていると、すぐに敵が現れた。犬が数頭。

「もう、来たの……」

イブは走り出した。しかし、何かで滑り地面を転がる。身を起こ

したとき、周りをぐるりと敵に囲まれていた。

しかし、イブは怯えることなく凜と立ち、刀を手にして敵を睨む。そして、一言。

「来なさい」

その後の事はよく覚えていなかったが、どこからか人の声、夢斗の声が聞こえて振り返ると、そこには事態を把握出来ずに混乱する夢斗がいた。

「君がやったのか？」

第四章 第十話 EVE（後書き）

本当に申し訳御座いませんでした > m) (m < もし皆様に広
い心がありましたら、これからもどうか見放さないで下さい > m)
| (m < 勝手な事ばかり言って、本当に申し訳御座いません
> m) (m <

第五章 第一話 しぶとい男（前書き）

久々ですね。あれだけ長くした後でまだ読んでくれる方が居るかどうかが不安ですが、どうか読んでください。

第五章 第一話 しぶとい男

イブは全てを話し終えると、静かに眠りについた。成功はしなかったものの、自らの命を犠牲にする呪文を発動し、その後、ボロボロの体にむち打って話し続けたのが災いしたのだろう。

イブの寝顔は、涼やかで穏やかさを保っていた。

夢斗はイブを見守るように、側に座って黙念する。イブが全てを語ってくれたお陰で、夢斗のイブに対する不安や疑いは消え失せた。

何故、イブの眼は紅いのか。

何故、あのような怪物共が現れるようになったのか。

何故、イブは剣を持っていたのか。

しかし、イブに対する不安が消えたと同時に、これから彼女とどう接すれば良いかが分からなかった。彼女が目覚めてから、彼女に何と言えばいいか。夢斗はイブの隣で、そのことを考えていた。

「イブ……。俺はこれから、イブとどう接したら良い?……」

そう呟き彼女の寝顔を見詰め、そつと頭を撫でる。イブは未だ本来の姿のまま、頭には真っ直ぐ伸びた鋭い角が生えていた。

「……………」

黙ってその角を見詰め、指先でなぞってみる。規則正しい節の間隔が、そのまま指先の神経を伝う。興味本位から少しつくと、彼女の角は相当硬質なものである事が感じ取れた。

「イブ……。色々背負って来てたんだね……………」

夢斗はそう言って、すつと立ち上がる。

数歩歩くと、ひしゃげたままで立て掛けている搬入口のドアをどかし、外へ出た。非常階段をゆっくりと登り屋上へと出る。

(ここで初めて戦ったんだよなあ……………)

しみじみと物思いにふける。あのとき、自分は疲弊するイブを前に、何もせずにあたふたしていたことを思い出す。

冷たい夜風が吹き抜けた。

夢斗はそれに促されるようにして、空を見上げる。その日は珍しい月は黄色かった。つまり、普通の月の光を放っていたのであった。まばゆい月光は、周りの星と調和し合って、夜空を彩る。

「そっぴや、イブが来てからは、いつも月が赤かった……」

何気なく見上げた空に思いを馳せ、イブが目覚めて元気になってからそのことを訊こう、と決めた。そして、久々の夜空を再び見上げた。

しばし夜空と向き合ってから目線を元に戻す。道路を挟んだ対岸のビル群からは、煌々と明かりが灯る。夢斗はその中に、赤く規則的に見え隠れする明かりを見つけた。その光は、ビルの外壁をせわしなく走り続ける。

「もしかして！」

夢斗はあることを直感し、手すりから降り出して眼下を見渡す。

数台のパトカーと警官の姿が見えた。恐らく、夕刻の爆発音を調べに出勤したのであろう。警官は仕切りにパトカーの無線で連絡を取り合い、道行く人に手当たり次第に聞き込みを行っていた。

「これは……、ただごとじゃないな……」

夢斗は携帯を取り出すと、発信履歴の先頭にいた男友達に電話を掛けた。

「夢斗？ どうかしたか？」

電話越しの相手は、特に慌てた節もなく電話に応じた。

「俺だ。今、テレビ見てるか！？」

夢斗の語気は自然と荒くなっていた。しかし、相手は特に気に留めずに、

『ああ、見てるよ。なんかさあ、お前のバイト先の近くでテロが起きたっぽいよ。ビルの屋上で爆弾が爆発したってさ』

と、淡々と答えた。

友人の言葉を聞いた直後、夢斗は電話を切る。

間違いないと、確信した。

イブが命懸けの賭けをしてから数刻。丁度、イブが夢斗に全てを打ち明けた直後の事だった。夢斗がいる次元とは別の次元にて、一人の男が目を覚ました。全身傷だらけで服はボロボロ。しかし、手には鋼鉄製の三節棍を握りしめていた。

「……………」

意識を取り戻し、ゆっくりと眼を開ける。

身を起こそうとしたが、全身に激痛が走り上手く行かない。

その場に力無く大の字になった男は、小さく呟いた。

「チクシヨウ……………。あのアマ……………」

第五章 第二話 学校での出来事（前書き）

更新が遅れた事を深くお詫びいたします。

えー、イブは五章に突入しましたが、ここで凄い展開を迎えます。
どれくらい凄いかというと………、実際に読んで確かめて下さい
（形容出来ません。すみません）。では、どうぞごゆっくり。

第五章 第二話 学校での出来事

イブはその後、三日三晩眠り続けた。

そして、四日目の朝。彼女は夢斗の姉の部屋で目を覚ます。

(夢斗に、心配掛けちゃったかな……)

ベッドから身を起こした彼女が最初に思った事はそれだった。

彼女は立ち上がり数歩歩いてみる。幸いな、体に痛みやだるさの類などは見られなかった。部屋に置いてある縦長の鏡を見ても、特に異状は見られなかった。しかし、自分が本当の姿に戻っていることには気付いた。

彼女は慌てて人間の姿に化ける。相変わらず、瞳の色は同じであった。

自分の姿がかりそめの姿になったところで、衣服の異変にも気付く。至る所が破れ、千切れ、裂けていたり、尋常ではなかった。

「ああ、これはアノ呪文の」

と彼女は納得し、それと同時に夢斗に対する申し訳無さも込み上げて来た。

そう言えば、自分がこの次元に来てから、夢斗には迷惑を掛けてばかりだ。嫌な思いや辛い事実を突き付けてしまったし、何より、自分は夢斗に対して、恩を返すとか罪を償うなどといった事が出来ない。自分が次元を越えて逃亡する際、「ある程度の安全が確保できたら、こちらから迎えに来る」という取り決めが成された。姿を変えるだとか記憶を忘却させるといった魔法は使えるものの、次元を飛び越えるなどという途方も無く高度で複雑な呪文は使えない。つまり、向こう側からの使いが来れば、自分は否応なく帰らなければならぬのである。自分の故郷ふるさとに帰りたい反面、互いに好意を持つ関係を崩したくないという二つの彼女の私情が複雑に絡み合っていた。

イブは、気付けばその事でかなりの時間を費やしていた。その証

扨に、西向きの窓からは、紅い斜陽が差し込んで来ている。

(そろそろ、夢斗が帰って来る時間かな)

彼女はドアノブに手を掛けたが、一瞬躊躇った。

『夢斗はワタシの全てを知っている』

イブの躊躇いの理由はそれだった。もし、ドアの向こう側に夢斗が偶然居合わせていたらどうしよう。化け物の様な自分を気味悪がり、避けられるのではないか。迷惑を掛けてばかりの自分を嫌い、話掛けられないのではないか。

葛藤し、ドアを開けるか否かの瀬戸際にいたイブの脳裏に、あの時の夢斗がよぎる。自分に想いを告げてくれた時、本当の姿に戻った自分に迷わず背中を預けてくれた時、命と引き換えの呪文を使った自分を気遣ってくれた時。

(大丈夫たよね。夢斗、優しいから)

イブは幾つもの不安を押しつける様にして、勢い良くドアを開けた。

廊下に出ると、とりあえずリビングに向かう。テーブルの上には、目玉焼きとトーストが皿に乗せられラップがかけてあった。その隣には、夢斗直筆のメモが置いてあった。

『目が覚めたら食べて』

イブはそのメモに目を通す。

「ありがと……」

自然と目頭が熱くなる。こみ上げる物を踵を返すことによって振り払うと、彼女はバスルームへと向かった。

服を取りに部屋へ戻る途中のことだった。イブは夢斗の部屋から、ごく微かな物音が漏れたことに気付いた。

(夢斗がいるの……?)

不審に思ったイブは、恐る恐る、中の様子を伺いつつ夢斗の部屋のドアを開けた。

部屋には、ベッドにもたれるようにして床に座る、げんなりとした表情の夢斗が居た。彼の目の下には大きな隈ができ、頬は異様な

までにやつれていた。

「何で……」

てつきり学校に行つてたとばかり思つていた夢斗が部屋にいたことに驚き、きよんとする。

夢斗は学校の制服姿だった。しかし、上着は脱ぎ捨てられ、鞆は中身を撒き散らしてほっぽつてある。

ややあつて、やつれきつた夢斗が重々しく口を開いた。

「俺……。イブとはもう……。付き合いたくない……。出ていってくれるか……」

時を遡ること二日。イブが夢斗に全てを打ち明けた翌日。

夢斗の学校では、近所で起きたテロ疑惑が話の肴だった。校内の至る所で、昨日の話題が取りざたされる。

いつもより遅めに登校した夢斗は、あちこちで練り広げられる小さな論争に耳を傾けつつ、内心気が気ではなかった。勿論、昨日のテロと思しき爆発は、テロではない。イブの命懸けの行いである。

夢斗はテロの真相を知ってしまったて居るばかりに、とてもばつが悪かった。

夢斗がテロの起きた瞬間にテロ現場に居たことがばれると、質問責めされることは明らかだった。そうなると、イブの存在を隠さざるを得なくなり、どこかでつじつまの合わない発言を

する恐れがある。その事から、人目を避けるようにして教室へと向かう。

教室の戸を開けたとき、戸がいつもより重々しく感じた。足を踏み入れ最初に目に映った物は、クラスメイトの視線であった。その視線は「ああ、足達が来たのか」という他愛ないものではあるが、夢斗には「あ、テロの現場にいた奴だ」というニュアンスが込められているようにも感じた。

「足達君、おはよー」

ドアの側で話し込んでいた女子のクラスメイトの一人が、教室に

入ってきた夢斗に挨拶する。声とともに屈託の無い笑みを浮かべる。
「ああ、おはよ……」

彼女とテロは無関係であることは明白だったが、何やら後ろめたく思う夢斗は俯いたまま返す。

挨拶も程々に席に着く。

他人の話し声が気になる。隣のグループの話は、例のテロのことなのだろうか。先程こちらを一回だけ見た人は、話のネタの張本人を見たのだろうか。

根拠の無い疑心暗鬼に襲われ、机に伏せる。

傍目からは眠いだけにしか見えないだろうが、夢斗自身には拷問に耐えかねて参っている姿に見えただろう。

ふさぎ込んで黙り込む夢斗に、一人の女子が近付いてきた。

「ねえ、夢斗」

夢斗は声の聞こえた方を、恐る恐る向いてみる。

「話があるんだけど、ホームルームが終わったら非常階段に来てくれる。」

そこには、怒りとも疑問とも不安ともとれない表情で佇む園美がいた。

夢斗は園美に言われるまま、ホームルームが終わると、園美の後に付き従うようにして教室を後にした。

夢斗はこのとき、デートをすっぽかしたから別れ話だろうと高をくくっていたが、話の内容はそんな何処にでもあるようなレベルでは無かった。

廊下の突き当たりの扉を開けると、外から冷たい風が吹いてくる。最初に園美が踊り場に降り、それに夢斗が続く。夢斗は踊り場に出ると、廊下と非常階段を繋ぐ扉を閉めた。

園美と向き合つと、園美が重々しく口を開いた。

「ねえ、あの娘こだれ？」

その問いは、夢斗の心臓を貫いた。

第五章 第三話 日常を返せ

夢斗は返す言葉が見付からなかった。

最悪な事に、昨日イブと共に戦っていた事が園美に露呈してしまった様だ。

たった一言で冷静を失うと、全身の血圧が上がリ発汗していることが自分でも良く分かった。

俯き冷や汗を流す夢斗に、園美は更に続けた。

「ワタシとのデート断って、何やってたの？ それに、あの娘は誰？ 知り合い？ 友達？ 新しい彼女？」

次から次に積みかけられ、夢斗はどう答えれば良いかが分からなくなる。それ以前に、最初の一言で核心を衝かれてしまい、それからは答えられず仕舞いだ。

(なんて答えれば良いんだ……。分からない……)

夢斗はいつそ、この非常階段の踊り場から身を投げたかった。それほどまでに追い詰められていたのである。

慎重に言葉を選ぶ夢斗に対して、園美の方は何を喋るか決まっているようだった。夢斗が俯いて沈黙する夢斗に、園美が更に畳みかける。

「ワタシね、昨日夢斗がテロの起きた近くのビルの階段昇るところ見たの。ねえ、何か知ってるでしょ。全部話してよ」

『自分とテロは無関係だ』と主張したい反面、『あの娘と怪物退治をした』とも言える筈もなく、その強烈なジレンマと葛藤に板挟みになりながら、夢斗は更に塞いでしまった。

そのおり、休み時間終了のチャイムが鳴る。その直後、園美が重々しく告げた。

「夢斗が今回の事件に関わってること、みんなに喋るからね……」

園美の脅しに夢斗は我に返る。どうしたら喋らないでいてくれるか、と聞く前に、園美の方から妥協案が示された。

「夢斗が……、昨日のあの娘との事話してくれたら、ワタシその事秘密にするけど、話さないんなら、ワタシが思ってることみんなに話すよ。良い？」

園美は境界線のドアに手を掛けていた。

夢斗はまずいと確信したのか、ここに来て初めて口を開いた。

「分かった。全部話すよ……」

それから夢斗は堰を切ったかの様に喋り始めた。

イブとの出会い。イブと何をしてきたか。昨日の出来事。自分のでしていること。イブと合ってから出来事を全て話した。クラス全員に間違った認識をされるより、一番自分の事を受け入れてくれる相手に全てを話す道を選んだのだ。

授業が始まっているのも関わらず夢斗は喋り続ける。夢斗は話し終わるとその場を去り、教室に戻ると鞆をひつつかんで、一目散に走り出した。その後、園美や周りの反応がどうなったか、彼は知らなかった。

「夢斗……」

非常階段から夢斗を見詰める園美。しかし、夢斗はその視線を知る由もなかった。

その後家に帰った夢斗は、自室に籠もった。その際、園美に「別れてくれ」という旨のメールを送ったが園美からの返信はなく、夢斗は言いようのない虚無感に浸される事となった。

何故、二回も路地裏に行ったのだろう。変な好奇心さえ起こさなければ、こんな事にはならなかった。

何故、あそこでイブを誘ったのだろう。イブとそこで別れば、イブと再び会う事はなかったかも知れない。

何故、イブと戦う道を選んだのだろう。普通に考えれば、剣なんて物騒な物、一生に一度触れるか触れないかなのに。

何故、イブを助けたりしたんだ。イブに死んで貰えれば、こんなゴタゴタに巻き込まれないし、全てをリセットできたはず。

抜け殻の様になり、ただ漠然と天井と向き合う。携帯がメールの受信や着信を告げるが、夢斗はそれに目を通さなかった。いつの間にか、自分から好きと言った筈の相手を、心の中で憎み嫌い、あまつさえ殺意すら抱くようになった。

夢斗はふと、隣の部屋で眠っているイブの事を思いだした。

(今なら、殺せる)

モラルだとか道徳だとか、その様な基本的な心理を弾き返すほど、夢斗のイブに対する嫌悪は深かった。

(俺の日常を壊しやがって……)

沸々とこみ上げる殺意を押さえられず、怒りに身を任せて剣を手に取る。

しかし、その時。夢斗の中に眠る僅かな良心が、剣を手から弾いた。

『イブを殺せば、お前の日常は帰って来るのか？ 帰ってこない。

イブの事が好きでは無いのか？ 好きだ。イブのこれまでの人生を受け止めて、これからも一緒に歩もうと決意したのは誰だ？ お前だ』

剣がそう言った。正確には、それが夢斗の本心であり本音であり、僅かな良心であった。

「チクシヨオオオオ!!」

剣を壁に投げつけ、床の鞆を思いきり蹴り飛ばすと、自分の弱さが滲むように足に鈍痛が走る。

このとき、夢斗は決意した。

(もう限界だ……。イブと……。別れよう……。このままじゃ、俺は俺で居られなくなる……。もう……。面倒はゴメンだ……)

夢斗の頬を伝う涙が、そのまま床に落ちて染みになっていった。

これが、イブが眠っている間の夢斗であり、イブはこの事実を知らない。

その後、夢斗が部屋の中で朦朧とした意識に沈んでいると、ドア

の向こうからイブが現れた。

「何で……」

イブは思わず声を出してしまった。

そして、夢斗は言った。

「俺……。イブとはもう……。付き合いたくない……。出ていって
くれるか……」

第五章 第四話 夢斗に芽生えた邪念

夢斗が己の中で渦巻く感情を告げたと同時に、室内の二人は言葉を失った。夢斗は廃人によく似た眼で床の一点を見詰め、イブはそんな夢斗を呆然と見ていた。

二人の間が沈黙に包まれてからややあつて、イブが口を開いた。「どうして……？」

ようやく綴られた言葉。それが発せられるまで、イブは夢斗の発言に戸惑っていたのである。

ベッドを背にしてうなだれる夢斗は、重々しく返す。

「俺の日常を壊したんだ。もう、出てってくれ……」

イブから逃れるようにして、夢斗は視線を逸らした。

イブには、夢斗の言葉とその後の行動が信じられなかった。そして、自分にとって最も恐れていたことが現実起こってしまったことに対する恐怖心もあった。何か言おうとして止める。彼女の口からは、出損ないの言葉が溢れる。

夢斗は視線を逸らしたまま、何も言わず押し黙っているばかりだった。

途方もなく思い空気の中、イブは何とか言葉を絞り出した。

「ワタシ……、夢斗の日常を壊しちゃったの……？」

夢斗の反応は無い。しかし、僅かに頷いたように見えた。

イブはそんな夢斗を見逃さなかったが、それにより数限りない罪悪感に襲われた。これまで過ごしてきた中でも、何回か微弱な罪悪感に苛まれた事はあったが、そのときは夢斗との会話や信頼で何とか乗り切ってきた様に見えた。実は乗り切ったのではなく、イブが心の奥底に封印していたのである。今回、夢斗が頷いたことは、これまでため込み押し殺してきた罪悪感を呼び覚ますと同時に、その裏付けにもなった。祖国から逃げてきた時も感じた罪悪感。しかし、今回はそう以上に重くのし掛かる。元来、責任感の強いイブは、石

の様に固まった。いや、それしかなかったのである。

このときの夢斗はイブに対する嫌悪に支配されていた。出来ることなら、今すぐ剣を手に取り、その白刃をイブに突き立てたくていっばいだった。しかし、気力の伴わない彼には、何もすることは出来なかった。ただただ、抜け殻になるのみである。

罪悪感に潰される寸前のイブと、抜け殻か廃人と化した夢斗。互いの精神状況は最悪そのものであった。しかし、皮肉なことにイブの本能が敵の襲来を感じ取ってしまった。

「……敵」

そう呟くイブ。イブにとって、この陰鬱でよどんだ悪循環を断ち切る動機としては最適だったが、一人で行かざるを得ない状況である。夢斗はもう、使い物にならない。

「夢斗……。敵が来たから、ワタシ行くね……。待つてるから……」
使い物にならないという結論を出したが、それでも夢斗への期待を込めて、彼女は『待つてる』と告げた。以前、自分の命を救ってくれた彼に対する、僅かな希望を乗せた末の決断だった。

イブは若干の不安を抱きつつも踵を返し、姉の部屋の刀を手に取り玄関へ向かった。外に出るとき一度だけ振り返り、彼女はもう一度夢斗に向けて言った。

「待つてるからね……」

イブはそう言ってドアを開け、その場を去った。

夢斗からの返事は無く、マンションの一室にイブの声だけが響いていた。

イブが発ってからどれだけ時間が経ったであろうか、自分だけになった夢斗は、内心ほっとしていた。自分の生活を狂わした元凶が居なくなっただからで有る。とはいえ、いつ戻ってくるかも知れないので、完全に安堵を漏らすことはしなかった。

姿勢や視線を変えず、無表情のまましばしの心地よさに浸る。

呆然とどこかを見詰めつつも、夢斗はこれからの身の振り方につ

いて考えを巡らせていた。敵が現れたらしいが、もう自分には関係ない。イブが死のうが、無関係な人間が死のうがどうだって良い。元々、自分も一般人だったのだ。いつイブに付き合っただけ物退治をしようが、いつそれから抜けようがそんなのは良心とか親切心に任せれば良い。また、例の路地裏にでも行けば、俺みたいな物好きと出くわす。そいつと化け物退治に精を出せばいい。とにかく、俺はもう沢山だ。二度と帰ってくるな。お前の存在は、俺にとって迷惑、邪魔、障害でしかない。消えてしまえ。何もかも知ったことが罵詈雑言の一切が頭の中を駆け巡った。

夢斗は、いつの間にか自分が拳を強く握りしめていたことに気付く。そこで、彼は知ってしまった。

（なんだ、まだ何か出来るほどの力が残ってるじゃないか）
自分が無気力に包まれている事は良く分かっていた。しかし、イブに対する嫌悪のお陰で、拳を強く握れるだけの力が有ることが判明した。そして、自分の持つ力に、その先があることも知る。詰まる所、彼は自分の力を歪んだ思想の為に使える物であると、そう確信してしまっただけである。

夢斗は迷うことなく、部屋の片隅に放置されていた剣を取った。鞘から刀身を開放すると、自分の顔が白刃に映る。夢斗は自分の顔を数秒間見た。しかし、その顔が邪念を露わにしていたことには気付かなかった。

勢いよく部屋から飛び出し、玄関に向かい靴を履く。この時、剣は鞘から抜き放たれたままであった。これはきつと、夢斗の剥き出しになった邪心の表れであろう。

玄関から外に出ると、今度は辺りを見回す。既に日は落ち、夜空にはあの日の様な赤い月が出ていた。思えば、イブとの関係が近付いたときは、いつも赤い月だった。しかし、今日は違つと確信していた。

（今日の赤い月は仲良くなるための月じゃない。イブと永遠に別れるための月だ……）

夢斗の思いには、まだ続きがあった。しかし、イブを追うためには一秒が惜しい。続きを言うのは後にして、夢斗は歩き出した。

共通廊下をつかつかと歩く中で、夢斗は先程の続きを思った。
(イブを、あの月みたいに……。アイツの眼みたいに、真っ赤にしてやる)

もう戻れはしない。と、夢斗の良心が告げたが、今の夢斗はそれに気付かなかった。

第五章 第五話 入れ違い

イブがマンションのエントランスを抜けると、一つの後悔が生まれた。

(電車賃……)

普段は夢斗から上面して貰うのだが、今回はそれが無かった。そんな事を考えつつも、彼女の足は進んでいた。これも、イブの責任感の強さからであろう。

彼女はそれから休まず歩いたが、住宅街の十字路でぴたりと足を止めた。正面に進めば駅まであと数分。左に進めばありきたりな造りの公園。そして、右に進めば無人の廃工場。いつもの練習場に辿り着く。

彼女は右に顔を向けた。その先に住宅はなく、無人の月極駐車場が道の両端に建ち並んでいた。緑色のフェンスに囲われ、地面は地肌が剥き出しで、駐車スペースには空気が目立つ。

「こんな近くまで……」

イブは深く落胆した。皮肉なことに、彼女の持つ敵の出現と場所を特定する力は、『廃工場に敵がいる』と告げていた。しかし、少し救われた気にもなった。気まずいムードの中、半ば逃げるようにして飛び出してきた彼女に、今更「お金くれる？」と夢斗に切り出す勇氣は無い。不謹慎であることは解っていながら、自分に僅かな安堵を許した。

そこに街灯は無く、暗く不透明な闇が広がっている。その上、今夜はいつもの闇に別の闇が紛れているようにも見える。それも、その別の闇は、徐々にその割合を増していくようにも見えた。

(敵は……、一人？ でも、かなり強い……)

十字路から廃工場までは、距離にして五〇メートル。イブは意を決して歩き出した。

廃工場への道を歩く中、イブはほんの数日前の事を思い返してい

た。

夢斗と一緒に歩いた道。その時の夢斗はとても元気で、無口な自分を氣遣ってか軽い冗談を交えながら歩いてきた。その時、自分はこの世界に慣れていない事もあってか、少しも笑えなかったが、夢斗の笑顔だけは強く心に焼き付いている。

(今はもう……)

気がつけば、イブは廃工場の目の前に立っていた。頭の中で何度も夢斗を思い出す内に、いつの間にもやらかここまで来てしまったのだ。三メートル程の高さの灰色のフェンスに囲まれた廃工場は、五年前までは稼働しており、とある有名企業の専属工場だったらしい。だが、本社の経営難により閉鎖され、今では『立ち入り禁止』の看板が至る所に掲げられ、堅牢な錠が人の侵入を阻んでいた。

イブは廃工場の周囲を歩き、あるフェンスの前で止まった。そのフェンスは他のフェンスと変わらず、鈍色の針金にびいるが格子状張り巡らされ、頂きには有刺鉄線を湛えている。彼女は迷うことなくフェンスに手をかけると、おもむろに手前に引いた。すると、いとも簡単にフェンスがフレームから剥がれ、人が難なく通る事の出来そうな隙間が生じた。

イブは躊躇う事無くその隙間に身を通すと、敵の気配が強く感じる所に向かって歩き出した。

イブが目を覚ました時から、遡ること数時間。アルバの住む宮殿は大騒ぎになっていた。

事の発端は、その日の昼下がり。昨日の夕方から部屋に籠もり切りのアルバを心配した執事が、アルバの部屋を訪れた時に起きた。何でも、部屋はもぬけの殻で、部屋の床の中央には複雑な魔法陣が描かれていた。また、普段は壁に掛けてある彼の得物も消えてる。

その事を知った神殿の大司祭であるヒュエル・ガ口は、激しく狼狽した。

「ああ、何と言う事だ。まさか、人間界に行かれるとは。こうして

はおれん。私も今すぐ参りましようぞ！」

ガロは自分の得物。長柄の先端に重りと無数の突起の付いた武器狼牙棒ろおげぼうを掴み、神殿の祭壇に向かう。

祭壇に到着したガロは、すぐさま次元転換の儀式の準備を始めた。しかし、祭壇を警備していた部下の僧侶に制止される。

四人の僧侶はガロを取り囲み、四人掛かりで羽交い締めにする。

「ガロ様。落ち着いて下さい。次元転換の儀は大変危険な行いでございます。どうか、お引き戻りを」

「ええい。五月蠅い。今、一番危険なのはアルバ様じゃ。離すのだ！」

「なりませぬ。どうか、お引き戻りを」

「黙れ。ええい、かくなる上は……。エイッ」

ガロは精神を統一すると、すぐさま解放。すると、竜巻の様な衝撃波が発生し、四人の僧侶を一発で吹き飛ばした。

「うわあああ！」

部下という事もあってか、ガロの攻撃は手を抜いているように見えた。しかし、僧侶達は例外なく五メートルの高さまで飛ばされ、地面に落ちるとバタバタともがく。彼等の体には、腕と胴体を縛る光の輪があつた。

「アルバ様。今参りますぞ」

祭壇の中央、また魔法陣の中央に立つたガロを無数の光が包む。

「ガロ様！」

僧侶の一人が叫んだ時、ガロは強烈な光を纏い、祭壇の魔法陣から姿を消した。

辺りに静寂が戻り、祭壇はいつもと変わらない厳粛な雰囲気になりました。

「ガロ様……。あつ」

ガロが姿を消してから数秒後、僧侶達を縛る光の輪が消えた。自由を取り戻した僧侶達は、各々立ち上がり互いの顔を見合わせる。

その時、また祭壇が騒がしくなる。

「おおい！ だれでもいいから来てくれ！」

祭壇は神殿の最深部にあるのだが、神殿全体が大理石の造りであり、また神殿内は天井が高いので声の反響が顕著に表れる。

神殿の中を反響するざわめきや足音が、事態の重大さを告げてる。最初の叫び声も、かなり取り乱した様なニュアンスが感じ取れた。

神殿内の雰囲気にも飲まれた僧侶達は、冷や汗を流しながら事の運びに気を張り巡らせる。

「……怪我……。生命の危機……」

「今すぐ……。取り返しが……」

「大司祭……。一刻も早く……」

声から察するに、入り口付近は大変な騒ぎに見舞われている様だった。どうやら、重体の患者がかつぎ込まれたらしい。

この国は神殿を中心とした熱心な宗教国であり、医療、教育、政治、立法、軍事などの国事一切は、神殿の司祭と国王が中心となつて行われる。

しかし、ここは王族の宮殿直属の大神殿である。ここを利用できるのは、王族と位の高い貴族、軍将校のみである。

騒ぎ声は段々大きくなっていく。どうやら、この大祭壇に向かっている様だ。

神殿に急患がかつぎ込まれてから数十秒後、担架に乗せられた患者が祭壇に到着した。

担架に乗せられた患者を見て、四人の僧侶は言葉を失った。担架に乗せられていたのは、他にもないこの国の王子、行方不明のアルバであった。

「おい。すぐに治療を始めろ。アルバ様の命が危ない」

アルバを運んできた大柄の僧侶は、四人の僧侶にそう言った。その間にも、アルバは祭壇に運ばれる。

四人の僧侶の内の一人が、大柄の僧侶に尋ねる。

「容態は」

「どうやら、かなり強力な呪文でやられたらしい。その上、その衝

撃で強引に他の次元から弾き飛ばされた。体へのダメージは深刻だ」

大柄の僧侶は淡々と容態の説明をした。

「わかった。すぐに治療を始めよう」

四人の内の一人がそう言うと、残りの三人が素早く祭壇に駆け上がる。四人目が踵を返したところで、大柄な僧侶がそれを制する。

「おい、それより大司祭のガ口様はどうした？」

すると、四人目は気まずそうに口を開いた。

「それが。つい今し方、アルバ様を追って、人間界へ……」

僧侶の言葉は、『アルバ様とガ口様は入れ違いだ』と告げる。最初からガ口による治療を臨んでいた大柄の僧侶は、目的の人物が居ない事を知ると力無く絶句した。

神殿が更なる混乱に見舞われたことを知らないガ口は、人間界への次元転換に成功し、例の廃工場に降り立った。

「むう……。アルバ様がアルバ様はこの次元の何処かに……」

ガ口は小さく呟くと、得物を肩に担いでその場を睥睨した。

第五章 第六話 深紅の姫君と大司祭

イブは廃工場の敷地内を歩く。しかし、ふらふらと彷徨うような歩き方ではなく、確固たる信念に基づいたようなしつかりとした歩みだった。

イブにしてみれば、それは当然の事である。自分の直感が敵の所在を突き止めているので、何も考えずに歩けば問題は無い。

「ここね」

イブはとある建物の前で止まった。建物の入り口は巨大な鉄のスライドドアで、その扉の上には大きく『第三ライン』と書かれた看板があった。

彼女は意を決し、その鉄扉を開けた。鍵は掛かっておらず、一人分の隙間だけ空けると、彼女はその中に吸い込まれるようにして足を踏み入れた。

建物の中は、機械部品の製造に関わる機械で埋め尽くされていた。ベルトコンベアー、プレス機、ロボットアーム。どれもが使われた形跡が無く、表層には埃が積もっていた。また、機械の陰による死角も多く、敵がどこから襲ってきてても不思議はなかった。周囲三六〇度に警戒し、慎重な足取りで奥へと進む。足を進める度に、敵の気配が強くなっていた。

ややあって、イブは前方からの強烈な気に足をすくませた。彼女の前方一〇メートルの地点に、黒いローブで全身を包み、長柄の狼牙棒を手にした人物が居た。人物は何かの機械の上に腰掛けている。フードで顔は隠れており、表情や性別、年齢などは不明だった。身長は一〇〇センチ程度、しかし、しゃがんでいたので断言出来なかった。

イブは気の正体が目の前の人物であることを確信した。

「アナタは、誰………？」

その気の強さから、相手が相当な強者であり、同時に言葉を理解

できると推測したイブは、震えかけの声で訊ねる。すると、意外なことに、目の前の人物はあっさり答えた。

「私の名はヒュエル・ガロ。ソドル王国大神殿の大司祭である」

『ソドル王国大神殿大司祭』と聞いた瞬間、イブの表情が凍り付いた。目の前の人物が、自分の祖国を滅ぼした国の中枢にあたる人物だったのだ。

「ところで、そなたは何者かね」

ガロは静かに訊いた。

「私はイブ。アリンズ帝国の姫、イブ・キールよ」

イブは怯える自分を奮い立たせ、凜とした口調で答えた。しかし、やはり無理が生じたのか、最後の方の声はうわずってしまった。

ガロはそれを感じ取ったかどうかは定かではないが、先程よりも強い口調で再び質問した。

「アルバ様は何処だ」

「知らないわ。彼は行方不明よ」

「行方不明？ 貴様、はぐらかす気か」

「そんな気ないわ。彼は本当に行方不明なの」

イブが必死にそう答えると、ガロは押し黙る。しばしの沈黙。その後、ガロは口を開いた。

「では、質問を変えよう。そなたは本当にイブ姫かね？」

「本当よ。ワタシの目を見れば解るわ」

イブがそう言うと、ガロはゆっくりと顔を上げる。ガロの顔が月明かりに照らされ、さっきまで解らなかつた事が白日の下となった。ガロは男性、それも相当な高齢である。皺の多い顔の中央、鼻の下と顎に白くて長い髭を蓄えていた。

皺の奥に隠れた、ガロの灰色の眼がイブの眼を覗き込む。

「ふむ、どうやらそなたは、本当にイブ姫のようだな」

ガロはぼつりと漏らす。

イブはガロの感想を聞き取ると、今度は自分から訊いてみた。

「アナタは、ここに何をしに来たの？」

すると、ガロは僅かに考える素振りを見せた。

「ふむ、私は昨日の夕刻から行方知れずのアルバ様を捜しに参った。アルバ様は、ご自分のお部屋から人間界にやってきたようだが、私はその理由を知らない。とりあえず、アルバ様を連れ戻しに参った、という所だね」

ガロの答えを元に考えると、アルバは自らの意志でここまで来たようである。

「そうなの。でも、この世界に彼は居ないわよ」

「そうか。ならば、私がここに居る理由も無かるっ」

ガロはそう言って明かり取りの天窓を仰ぐ。月は赤く輝いていた。「ふむ、しかし、せっかく来たのだ、私が何もせずに帰るのは少し虚しく感じる。どうかね、私と一緒に帰らないかね。そなたの居るべき世界へ」

イブはどきつとする。目の前の男は、敵ではあるが自分を元の世界へ連れて行ってくれるというのだ。

イブの心中は激しく揺れ動いた。夢斗と気まずくなくなったし、これ以上迷惑を掛けられない。それに、自ら敵国へ赴いて停戦を呼びかけるのも強ち間違っているとも言えない。しかし、そんな考えの中で、自国の迎えを待つという選択肢も生まれた。自分を信じて頑張っている国民を裏切るような事はできない。

合理的な道を選ぶか、それとも皆を信じるか。究極の二者択一に悩み、回答を決めかねているイブに、ガロが声を掛けた。

「そなたは自国の救援を待っているのかね？」

その声に気付き、一旦思考を止めると、イブは静かに頷いた。

「ふむ、そなたの愛国心と国民を信じる気持ちには頭が下がる。しかし、この世には受け入れなければならない事実というものもあるのだ。そなたの祖国、アリンズ帝国は、我らの侵攻しより滅亡した。王族、貴族は全て処刑され、国民の殆どは死んだか別の地域に逃げ、国土は荒れ果てている。首都も陥落し、そなたの住む城も宮殿も無くなっている。どうかね、これでも自国の救援を待てるかね？」

『滅亡』 この一言に、イブは激しい怒りと絶望感を抱いた。信じていた、愛していた祖国は滅び、大切な家族は殺され、国民も城も無くなってしまった。

「そんな……、ウソよ……」

イブは自分の心の奥からこみ上げてくる物を止められなかった。それは雫となつて、眼からこぼれ落ちる。

しかし、そんなイブにガ口は追い打ちを掛ける。

「嘘や偽りではない。そなたの行方が知れなくなってから暫く経たない内に、そなたの国の九割は我らが掌握した。そして、すぐに王族と貴族の処刑は実行され、国民は魔獣共の餌となつた。これは全て事実だ」

ガ口の口調は静かで、それ故に残酷さが顕著に伝わる。表情を変えることなくここまで言われると、激しく言われたときよりも怒りがこみ上げてくる。

『何故、冷静でいられるの？』

怒りが更に湧き上がり、それが彼女を支配する。血に怒りが混じって体中を巡り、どうしようもなくなる。

止められない。

抑えられない。

我慢出来ない。

行き着く所、殺したい。

イブにはこれまで感じたことの無いほど、激しい殺意が生まれる。気付けば、彼女は腰の刀を抜いていた。

「ほう、私に刃を向けるとはね。年老いたとは言つても、昔はソドル王国では知る者が居ないとまで称された男なのだよ。それでも、私と戦うのかね？」

イブはその問いに答えず、深紅の両眼でガ口を睨んでいた。

「ふむ、沈黙は肯定でもなければ否定でもないが、態度での意思表示はできる。そなたは私と戦いたく、あわよくば殺したいのだね？」

ガ口の回りくどく、なのにも的確な心理分析に、イブは更なる苛立

ちを覚えた。

「黙りなさい！ これ以上ワタシを馬鹿にしないで！ 人を舐めるのもいい加減に」

イブはそう言いかけると言葉を失った。激しすぎる怒りで、それ以上言葉を綴ることが出来なくなっただのである。

「そのように怒ると、そなたの美しい顔が台無しであるぞ」

空気を読まないこの発言は、果たして真意か挑発か。その命題に答えを見いだすことも面倒になってきた。目の前の敵を切り刻めたら、どれほど爽快だろう。

「やるのかね？」

鬱陶しい。

「いいのかな？」

煩わしい。

「是非もなし」

さっさとやれ。

直後、激しい金属音が、無人の工場に響いた。

第五章 第七話 不可解な強さ

イブとガロは至近距離で睨み合う。鏢迫り合いだ。

最初に動いたのはガロだった。その証拠に、イブは刀を抜いた位置から寸分も動いていなかった。

自分から刀を抜いたのに、随分と惨めな格好になってしまった、とイブは齒軋りしながらガロを睨んだ。

「ふむ」

ガロはとても小さく、言った本人しか聞き取れない位小さく洩らした。

「中々やるようだね。流石はイブ姫」

彼は後ろに跳んで、イブと距離をとる。

「これほどの手応えを感じたのは、アルバ様以来だ」

狼牙棒を高速で回旋させる。それと共に、足元の埃が舞い上がり、ガロの周りの空気の流れに従い、それを顕著に表す。体の正面、側面、頭上と順々に位置を変え、ある一点に達した瞬間、それを横薙ぎに振るい、静止させた。すると、先程まで気流に翻弄されていた埃が、余韻に浸って漂い出す。

「さあ、参られよ」

皺の奥に隠れた瞳でイブを睨んだ。

多く、武術にその身を投じる者は、戦いの直前や最中で、こうしたアクションをとる。これは相手への威嚇と、自分自身の戦意を高揚させるウォーミングアップを兼ねている。また、静止した武器をいきなり振り回すよりも、ある程度の勢いを付けた方が破壊力が増す。一見、些細で無駄とも見えるこの行為は、結果的には理にかなっているのだ。

ガロは悠然と得物を構える。

彼の準備は万端だったが、対するイブは動き出せずじりた。彼と一合目を打ち合った瞬間に、相手のレベルの高さを直に体感してし

まったのだ。しかし、彼女の闘志と憤怒は収まらず、目の前の脅威に立ち向かう、という選択を下した。

イブは柄をぐっと握りしめると、ガ口を睨み付けた。次の瞬間、彼女は一気に間合いを詰め、ガ口に肉迫するや否や斬りつける。しかし、彼女の攻撃はいとも簡単に無力化された。先程と同じ様に、狼牙棒の先端が刀身を捉える。

ガ口はイブの顔を下から覗き込むと、不敵な笑みを浮かべた。
「くっ……」

その笑みに、自分の全てを見透かされた様な気になったイブは、その場から素早く離脱し、次の一手を思案する。

しかし、ガ口はイブに一刻の猶予も与えなかった。老人とは思えぬ程の勢いでイブに迫る。刹那、ガ口の狼牙棒がイブの鼻先を掠めた。

「!？」

イブの顔全体に風圧がかかった。とっさに身を引かなければ、頭は粉々に砕かれていただろう。

ガ口は攻めの手を休めなかった。返しの一撃が、再びイブを襲う。今度は彼女の下肢を狙っていた。どうやら、彼女の機動力を削ぐ為の攻撃である。

イブは跳躍でその一撃をかわすした。しかし、矢継ぎ早に次の一撃が襲い掛かる。縦一閃の打撃。際どい所で横っ飛びで回避し、着地の際、床を転がる。それは、柔道の前回り受け身に良く似ていた。即座に片膝をつくど、刀を構え次なる攻撃に備える。

「はあ、はあ」

ほんの僅かな間に、イブの息はかなり上がっていた。予想を甚だしく上回っていたガ口の攻撃に意表をつかれ、必要以上の体力を消耗してしまったのだ。

ガ口は片膝をついて息を荒げるイブを見下ろした。

「ふむ。そなたは中々の腕を持つようだか、その力を十分に發揮できていないと見える。怒りに我を忘れ、自分を見失っており。それ

では、私には勝てんよ」

冷静な口調で淡々と告げる。内容が今のイブの状態を、これ以上はない程的確に射抜いていたので、イブは更に苛立った。

「だから、何？ アナタを殺すという考えは変わってないわよ」

歯を食いしばり、深紅の如く紅き眼でガロを下から睨み付ける。

しかし、ガロは冷静を保ち、一切の動揺を見せず微動だにしなければ。かてて加えて、まるでイブを品定めしている様な目で見渡していた。

ややあつて、ガロがおもむろに口を開いた。

「しかし、全力ではないとはいえ、私の連撃を全てかわすとは、あなたは相当の実力の持ち主。私も、全力で相對するより他なかるう」

「何を……」

イブは言葉に勢いを込めつつ、ガロに刀の切っ先を向けながらゆつくりと立ち上がる。

「私以上の武を持つ者は、今も昔も数限りない。その中で、どうしても私の様な瘦せぎすが最強と称されるようになったか、気になるかね？」

ガロはゆつたりと身を包むローブを纏っていたので、彼の体系を正確に把握する事は出来なかった。しかし、それでも標準的な体格からすれば痩せているようにも見えた。

だが、彼の打撃力の高さは異常だった。彼の放った縦一閃の打撃はイブに当たらなかつたが、そのかわりに、工場の床が大きくえぐれていた。まるで、浅く埋めた爆弾が爆発したような、そんなえぐれ方だった。

ガロの所業の痕跡に目をやるイブに向け、彼は不敵な笑みを浮かべた。

「フフ。イブ姫であれば、この存在は知っているのであろう？」

そう言つて懐に手を伸ばすと、何かを取り出した。

「これであるよ」

「！？ どうりで……」

懐から取り出された物は、明かり取りから注ぐ月光に照らされ、不可解な輝きを放っているようだった。

「呪符。自分の魔力を封じ込め、自由自在、千変万化な使い方を擁するという。極めて初歩的で、それ故に高度な使い方も可能……」

扇状に広げた呪符を持ち、流暢にそう言った。

「私はこの呪符の力により、あれほど素早く力強く戦えるのである」
すると、ガ口は呪符を宙に放った。宙に舞うや否や、呪符はそれぞれが意思を持っているかの如く宙に浮き、ガ口の周りを衛星の様に周遊した。

「さて、まだ終わりではないよ」

更なる戦闘が幕を開けた。

第五章 第八話 既存の問題と新たなる問題

夢斗はイブの息の根を止めるべく、彼女の追跡に徹していた。途中、彼女がこちらの追跡に気付いたり、繁華街への電車代をせびりに来る可能性があることを考えたが、『その時はその時で殺せばいい』と開き直り、更に歩を進める。

家を出てから数分。駅に行く途中の十字路でイブを発見した。彼女は十字路の中央で立ち止まり、こちらに背を向けていた。

(しめた)

と、確信する。

このまま後ろから近付いて、心臓を一突きにしてしまおう、というプランが浮かんだ。

そうなると早かった。柄をしつかりと握りしめると、切っ先をまっすぐイブに向け、迷うことなく走り出す。二人の距離は一〇メートル弱。ほんの四、五秒で到達しうる距離だった。

(死ねえ)

彼はイブの死、そして不幸の元凶の消滅を確信する。目の前には無様にも無防備な背中をこちらに向けるイブがいる。足音が立っているかどうかは気にならなかった。仮に立っていたとしても、気付く前に殺せると信じていた。

そのおり、突然彼女が動く。彼女が十字路の右の分岐に体を向けたのである。むこうの目立つアクションはこれきりで、そのまま道の奥を凝視して動かない。しかし、『気付かれた』と直感した彼は、とっさに電柱の陰に身を隠す。

(気付かれただと。そんな馬鹿な)

夢斗の心中は激しく揺れ動く。

彼女の戦いにおける感覚と、相手の気配を伺い知る能力は自分も良く知っている。それ故に、電柱に隠れざるを得なかった。その時のイブと言えば、ただひたすらに闇と対峙し、夢斗の存在や殺気は

微塵にも感じ取っていなかった。

心臓がこれまでになく激しく脈打ち、全身を激流の如き勢いで血が巡る。鼓動が日々頭蓋骨の中で木霊し、脂汗が額を満たす。言い知れぬ恐怖に襲われて、それが瞼をこじ開けている。

(クソ。なんて勘の良い)

剣の柄と掌の間に汗が溜まり、蒸れ始めている。いざとなったら滑るかも知れない。しかし、気付かれた事に対するショックの方が大きく、その事に気を配る余裕は無かった。

十字路の方からはイブの足音が聞こえる。彼女の靴底とアスファルトの擦れる音が、彼の恐怖を何十倍にも増長させる。

「……」

あまりに切迫した恐怖に、心身共に沈黙する。

しかし、足音は次第に遠ざかって行く。すると、緊張が一気に解け、思わずため息が漏れ、その場に力無くしゃがみ込んだ。

足は震え、体中に汗のぬめりと冷たさを感じる。未だ、心臓の鼓動は収まらず、しつこくドクドクと脈打っていた。

フルマラソンの直後のような余韻に浸るうち、足音は完全に聞こえなくなる。

暫くして、ようやく落ち着きを取り戻した。脈拍は通常値に近くなり、汗もすつと引いていた。しかし、新たな感情が生まれつつあった。

「何で、イブに見付かることを怖がったんだ……」

静かに呟く。

その答えはすぐに出た。自分は心の奥底で、イブを殺したく無かったのである。

だが、イブに対する激しい憎悪が、良心の答えを否定しそれに背を向ける。悪意の激しい呵責が容赦なく襲いかかる。先程の小さな呟きが、何度も何度もエコーしていた。

「チクシヨウツ」

後悔。憎悪の呵責。僅かな良心。自分の中の真意。それら全てが

葛藤し、どす黒い渦を巻くと、彼はそれに耐えられず、僅かな呟きと共にアスファルトに拳を突き立てた。

呟きは闇に包まれる様に消え、拳の痛みがそれに反比例して増していった。

呪符が戦闘に用いられてから、戦況は前にも増してガロに傾いていた。彼の呪符の扱い方は巧妙かつ芸術的な波があり、全てにおいて一切の隙が無かった。

「まだまだであるよ」

そう言つて、周遊する呪符を一枚手にすると、おもむろに放る。

放たれた呪符は、流星の如く炎を纏うと空中で離散し、無数の火球となつてイブに襲い掛かる。

(また!?)

火球の直撃を避けるため、イブはコンプレッサーの陰に飛び込んだ。しかし、一つの火球が彼女をかすめ、服の裾が焦げた。慣性の法則に従つて暫く床を滑ると、勢いが消えた所で先程まで自分のいた空間に目をやる。すると、残りの火球はそのまま飛び去り、空中で呆気なく燃え尽きた。

物陰で安堵するもつかの間、新たなる刺客が彼女の前に現れる。

一枚の呪符が別の機械に突き刺さるのを視認した直後、符に描かれた文字や模様の僅かなずれに気付く。

(これは? しまった!)

それが二枚重ねの呪符であることに気付いた瞬間、身を翻して走り出す。刹那、背後で竜巻が発生し、彼女の体を宙へ軽々と舞い上がらせた。

機械に突き刺さつた呪符は、さしずめ二枚目の移動と意識の陽動を兼ねた物。そして、一枚目の符に貼り付いた二枚目が、攻撃用の符。物陰に身を潜める敵には、一度懷まで潜り込ませてからの一撃が、非常に有効に働く。ガロは、それを知り、狙っていたのだ。

風に煽られ、空中で何度もきりもみしながら、イブはガロの姿を

探す。すると、彼はまた新たな呪符に手を伸ばし、それをイブに向けて放つ、正にその瞬間だった。扇状に呪符を持つと、すぐさま横薙ぎに一振り。五枚の呪符が直線と曲線の軌道を交互に描き、迷うことなくイブに迫る。

彼女は呪符の一枚一枚が、鋭利な刃物になっっていることを直感した。しかし、空中で竜巻に弄ばれているため、身動きが全く取れない。きりもみしながらの視認だったため、放たれた呪符が五枚であることすら疑わしい。だが、この際枚数などどうでも良かった。今現在の危機的状況の打破に精一杯だからだ。

（なんとかしないと……）

突如、風が止んだ。呪符の効力が切れたのか、それとも飛来する呪符の攻撃の妨げになるからか。事情は様々であったが、とにかく風が止んだ。

しかし、その瞬間、五枚の呪符が一齐に、示し合わせかの様にイブに牙を剥いた。

ガ口を見ながら落ち始めていたイブに、呪符の襲来は確認できたが、それを避けるために身を動かす時間は無かった。四肢や胴体を情け容赦なく呪符が通過し、鋭い痛みが走る。

「痛っ……」

彼女が真正銘身を切る痛みで喘いだ直後、固い床に叩きつけられる。

「うっ……」

続けざまに襲ってきた激痛に表情を歪め、自然と苦悶に満ちた声が漏れる。

重く鈍い痛みの上に、鋭い痛みが思い出した頃に再来した。腕と脚、それと左の脇腹から、血の感触が伝わる。傷は深く無かったが、その分鋭い痛みがいつまでも響いていた。彼女と僅かに遅れて、愛用の刀が落ちる。いつの間にか手放してしまったのである。刀は刃の方を下に向けて落ちてきたので、床にざくりと突き刺さる。位置は、数メートル先。手を伸ばしても到底届く距離ではなかった。

彼女は刀の突き刺さる音で我に返り、固い決意の元、意識だけはつきりさせる。体中がずきずき痛むが、まだ命に関わるレベルでは無いことに気付く。臥したまま拳を握りしめ湯を入れると、傷ついた脚を庇うようにしてゆっくりと立ち上がった。目の前には、呪符と狼牙棒を構えるガロがあり、二人の中間地点に刀が刺さっていた。

二つを交互に目をやる彼女に、ガロが語りかける。

「そなたの強さはわかったよ。そなたでは私を殺すことはできない。左腕の傷口を抑えながら、彼女は黙ってそれを聴いていた。そして、数秒おいて口を開く。

「だったら、それがどうしたと言うの……。ワタシをこれから殺す……?」

「それはあり得ぬ。私に弱者をいたぶる嗜好は無い」

「じゃあ、どうする気?」

「帰るとするよ。私の故郷に」

そう言った後、彼の周りの呪符の周遊速度が速まり、徐々に彼の周りに膜を張るように包み込んでゆく。

「そうだ。そなたにこれを渡しておこう。そなたも故郷に帰りたいためである」

直後、イブの前に一括りの呪符が現れた。呪符は暫く彼女の眼前にて浮遊し、その後魂を抜かれたかの様に床に落ちる。

「では、ご機嫌よう」

次の瞬間、ガロの体は無数の光に包まれ、幾つもの閃光を放つ。

イブはまぶしさのあまり瞼を閉じるが、目の前の光景を自分の経験と重ね合わせた。きっとこれが次元転換の光、と確信しつつ、顔を腕で覆った。それでも、瞼越しの閃光は明るく、暗闇の世界を朝焼けの様に照らす。

ややあつて、朝焼けが元の暗闇に戻った所で、彼女はゆっくりと瞼を開けた。目の前に老司祭の姿は無く、自分の刀と残された五枚の呪符があるだけだった。傷口は相変わらず痛みを電気信号に変え

て脳に伝え、鮮血を滴られるが、今の彼女はそれを無視した。そして、いつしか煙の様に消えた殺意とそのあっけなさに、ただひたすら呆然とする。

「はあ……」

深くため息をつく。重圧やプレッシャーから解放された時のようになりラックスしたため息。しかし、ぬぐい去れない不安もあった。目の前の残された呪符や、夢斗の事。祖国の現状など不安因子は様々で、先程のため息は一過性のため息であることに気付く。確かに、あの男はここから居なくなった。しかし、死んだわけではない。それに、仮に殺せたとしても、それから解らない。冷静になつて考えても、糸口が見付からない。

俯き渋い顔であれこれと思案するが、考えることさえ億劫になる。いつそ、ここに横たわり、朝まで一眠りしたいと思つた。しかし、起きたら起きたで別の問題がやってくる。結局、自分は何から何まで、不安と問題に苛まれるしかないのだ、とそう痛感した。

「どうしよう……」

自然と零れた言葉。正に、今のイブの心情をストレートに表していた。

その時、また新たな問題が発生した。

工場の入り口に見覚えのある男。

「え？」

とにかくここから離れよう、と思つていた彼女が振り返つた瞬間に、その男が視界に飛び込んできたのだ。

学校の制服。少し乱れた感じの髪。そして何より、自分の家の家宝の剣。

「夢斗……」

信じられない訳ではなかったが、それでも意外性は一番だった。双眸を大きく見開き、痛む体を引きずつて彼に歩み寄る。

二人の距離が縮まり、互いの顔が判別できそうな位になると、俯きがちだった夢斗はゆっくりと顔を上げた。

邪念と殺意に満ちていた。

「なんで……？」

彼は刀身の剥き出しになった剣を振りかざし、一気に走り出して彼女に斬りかかった。

第五章 第九話 暴威

暴威のみの太刀筋が額を掠めた。その後も、荒れ狂う剣は止めどなく暴れ続ける。力任せで抑揚のない攻撃は、振りも大きく隙だらけなのでかわすに労は無いが、脚を負傷しているイブには、些か危なげであった。

「待つて。落ち着いて！」

乱撃を避けつつ夢斗をなだめる様に言う。しかし、彼の耳にその言葉は届かない。

芸の無い攻撃を避けて後ずさるうち、彼女の背中に細長い感触があった。手を背中に回し、後ろ手に手探りすると、愛用の刀の柄に手が触れた。彼女は一心不乱に柄を掴むと、床から引き抜いて体の正面にて構える。

僅かな間を置き、暴威の剣が刀身と激突した。

柄をしっかりと握っていたのが幸いしたのか、刀は動ずる事なく剣を捉えている。

ぎちぎちと互いの刀身が震え、得物を挟んで睨み合う。彼女の脳裏に特訓の時の情景が甦り、目の前と重なった。

目の前の男の眼は邪念に満ち、剣は猛烈な殺意を放つ。

あの時と遥かに遠く、到底及び得ない光景に、イブは思わず目を背けそうになる。

(やだ。あんな夢斗、見たくない……)

顔を逸らし俯くと、忘れかけていた痛みが襲い来る。

「あ……」

全身からの激痛に怯み、彼女は思わず刀を持つ手を緩めてしまった。夢斗の剣はそれを見逃さず、彼女の刀を弾き飛ばす。刀は床に落ち、しばし滑るように旋回して止まった。

(しまった……)

刀の動向に意識を奪われていた彼女は、振り上げられた剣の存在

を知るのに遅れた。刹那、斬撃が首筋を掠る。とつさに顎を反らしたのが幸いし傷は浅いが、一筋の血が首を流れ落ちた。

夢斗に目をやると、彼は返しの一撃を放つ為の予備動作に入っていた。彼女から見て左下。彼の左の太腿の高さに、刀身が光っている。自分の脚に力が全く入らず、ふらつきながら最善策を一瞬で練り上げる。彼女は反射的に空いた両腕を突きだした。

直後、体の正面から突き飛ばされた夢斗は、よろめいて後ずさる。一度大きく後足で踏ん張ると、小刻みに後退して姿勢を正す。

武器もなく、脚に力の入らない彼女には、両手で突き飛ばす位の抵抗しか出来なかった。負傷した脚では蹴りの威力も半減だし、かといって軸足にすることなど不可能に等しい。重傷を避けるためには、ほんの少し剣の軌道をずらせば良いので、両手で思いきり押した。しかし、意表をついたささやかな抵抗は、結果的には大いにプラスになった。

しかし全体の有利不利はそのまま、彼女の振りに変わりはない。しかし全体はなかつた。

「はあ、はあ……」

肩で息をする。思えば、今日の戦闘では不利になってばかりだ。ガ口はレベル的に格差があつて不利になり、夢斗とは負傷と疲労で不利。どうも上手く運ばない展開に、苛立ちを感じていた。

そのおり、またも傷口が痛み出す。どうやら、夢斗を突き飛ばした時、僅かに踏ん張ったのが災いしたのだろう。例え一瞬だけ忘れられても、必ずぶり返してくる。

「うっ……」

思わず膝を付いてしまう。夢斗はそれを見逃すことなく、剣を逆手に持ち、大きく振りかぶった。

避けられない。やられる。これが運命。こればかりは受け入れなければならぬ。

そう悟った。

しかし、来るとばかり思っていた激痛は襲ってこなかった。

目を瞑って覚悟を決めていた割には、大分期待はずれで呆気ないことに戸惑い、恐る恐る目を開けた。視線を横へ横へとずらしていくと、激しく震える両足があった。

「え……？」

更に視線を上げる。すると、怯えきり冷や汗まみれの夢斗が、自分を見下ろしていた。手には剣がしっかりと握られ、切っ先が首の付け根の、ほんの数ミリ手前で震えている。そして、その更に上には、怯え、戸惑い、恐怖のどれともつかない表情の夢斗の顔があった。

イブは床に両手を付き、その場にへたり込んで夢斗を見上げる。彼の眼は、想像を絶する恐怖と対面したように眼を見開き、顔中に汗を滴らせている。

夢斗の状態に一番驚いたのは、他でも無いイブであった。あれほど剣を狂気で満たして襲ってきたのに、目の前の状況があまりにも意外すぎた。おおよそ、凶徒には似つかわしくない表情。

「何で……」

彼の凶行と目の前の表情に驚きを隠せず、小さく漏らす。

その時だった。彼はイブの声を聞き、またスイッチが入った。再び剣を振りかぶり、力を込めて振り下ろす。イブは思わず瞼を閉じて、腕で頭部を庇うように覆った。

しかし、鮮血が花を咲かす事は無かった。

その代わり、困惑の中でただ呆然とし瞑目する彼女の頬に、何か熱く小さな物が落ちてきた。一滴、二滴とその量を増し、一筋の痕跡を残して顎へと伝う。伝うものの温度は、夢斗に別れを告げた時の感覚と似ていた。いや、そのものだった。この懐かしくも哀しげな感覚に気付き、瞼を開ける。

すると、そこには大粒の涙を流す夢斗がいた。

第五章 第十話 本当は…（前書き）

さて、第五章のラストです。

果たして、夢斗はイブを殺すことが目的だったのか？ イブは、夢斗と別れを告げるのか？ 二人はこれからどうなるのか？ 第五章の謎が、ここで全て明かされる！（映画の宣伝風に）

さて、お遊びが過ぎました。最近前書きとか書いてない反動ですね
コレ。

では、ごゆっくりどうぞ！

第五章 第十話 本当は…

ぼつりぼつりと、まるで降り始めの雨の様に、涙の雫がこぼれ落ちる。それは、一滴一滴、たったひとつの例外なく、一人の少女の頬に落ち、伝う。

殺せなかった。

一人の凶徒、いや数瞬前の凶徒だった彼の脳裏で、そんな言葉が生まれた。

深い後悔。そして、何故か溢れ出る涙。

そもそも、俺のやりたかったことは何だ？ 彼女、不幸の元凶である悪魔を殺す。

では、殺せそうだったか？ 殺せた。それも、ほぼ確実に。どうして、死んでいない？ わからない。

剣が問いかけ、自分が答えていた。しかし、剣の音が、自分の心の奥底の心理だと言うことは、大分前から熟知していたし、それを利用して自分を奮い立たせたこともあった。

目の前には、震える自分の手と、それに握られた剣。それと、イブ。

「チキシヨオオオ　　！！」

これまでに聞いたことのない、獣の咆哮のような叫び声が響いた。

夢斗は一際大声で叫んだ後、剣を思いきり床に叩きつけた。床に触れると、数回バウンドしてから止まる。

剣には一瞥もくれず、イブは叫喚するのみの夢斗をしげしげと見詰めていた。

数十秒経って、彼の叫び声は止まり、工場内の木霊も無くなった。彼はそのまま力無くうなだれると、だらりと腕を垂らし何かを考えられているような素振りを見せる。

刹那、夢斗はイブの喉元を両手で押さえた。いきなりの行動に反応出来ず、細い首ががちりと掴まれる。指に段々と力が込もり、ぎりぎりどと息道を締め上げていく。視界がぼやけ、全身が酸素を欲している。息の上がついていた彼女にとって、いきなりの絞首はたったの一〇秒ほども命取りだろう。徐々に、ゆっくりと意識が薄れて

て
しかしまた、それが彼女の命を奪う事は無かった。ふっと力が指から抜け、気道への圧迫が無くなる。

「ごほっ、ごほっ……」

力無く咳き込み、のど笛を押さえる。幸い、絞首によるダメージは大した事は無かったが、首に微かな圧迫感が残っていた。喉を押さえたまま視線を上げてゆく。目の前の夢斗は、今度は床に突っ伏しうずくまっていた。殆ど微動だにしない。

剣は遠くにあるので、警戒することを忘れなければ大丈夫、と踏んだイブが、彼の肩にそっと手を置いた。夢斗からのリアクションはない。その代わりに、僅かな振動と彼の体温を手に感じる。

「うう……」

静かに、とても静かに彼は泣いていた。

その事を知ったイブは、彼の後ろに周って胴体に腕を回すと、

「訳を、話して」

優しく囁いた。

『何故、イブを殺そうとしたんだ』

彼は殺意が芽生えたときからの問いを、未だに解決出来ずにいた。正確に言えば、正解を導き出せずにいた、と言った方が正しいであろう。

殺意が芽生えたとき、その時は確かに良心が働いた。『殺してはいけない』と。しかし、イブに対する殺意で心が充満しつつあった彼は、『あいつは不幸の元凶だ。だから殺す』と強引に答えを出し、無理矢理自分に言い聞かせた。

その後も何度か良心は、その姿をかいま見せた。しかし、その度に『彼女は不幸の元凶』と、ずっと言い聞かせた。

『不幸の元凶』と、何度も何度も自分に言い聞かせ、イブに対する殺意を正当化しようとした。最初のうちはそれでも何とか耐えた。しかし、十字路で電柱の陰に隠れたとき、彼の殺意もまた僅かに姿を隠し、その代わりに良心が影を落とす。『殺してはいけない』と、良心に囁かれた彼は、固い地面に拳を突き立て、再び殺意に心を染めてしまった。

そして遂に、彼はイブを追い詰めた。見ると、彼女は全身傷だらけで、歩き方もぎこちない。顔を上げたときに見えた彼女の姿は、何よりも弱々しく見えた。

夢斗の殺意は、迷うことなく暴れ出した。何度も何度も暴威に染めた剣を振るい、幾度と無く彼女を殺す一歩手前まで歩み寄れた。しかし、あと一歩という所で、不運にも良心が力を振り絞った。『殺すな』と頭の中で叫ばれ、手に掛けるかどうかを思わずとまどってしまふ。涙が溢れる。何故だ。追い打ちの様に剣の音が聞こえた。『お前は、いや、俺はイブが好きだ。愛している。愛おしく思う。殺すのは間違いだ』

最後の切り札を見せつけられ、その時の夢斗を支配していた悪意は、剣の声に耳を塞ぎたい一心で、獣の様に雄叫びを上げ、剣を何処かへ放った。そうすると、剣の声は聞こえなくなる。

武器を失ったが、殺すことは出来る。息が出来なければ、向こうは死ぬ。そう確信して彼女の首を掴む。細い首を難なく覆うと、渾身の力を込めて握りつぶす。

(あと少し、あと少しで終わる)

不幸の元凶が無くなる。邪心に染まった心と眼で、今にも消えかかりそうなイブを見た。苦悶に満ちた表情で、じつと自分の顔を見ている。すると、あるう事が良心が最後の力を振り絞る。

『イブが死んじゃうだろ。死んで欲しいのかよ。本当は、大好きなんだろ!？』

ふつと、彼の指から力が抜け、全身からも力が抜けた。すると、これまで気付かなかった涙の熱さに、ここに来て初めて気付いた。そうなるからには早かった。がくりとうなだれうずくまると、自分の腕に突っ伏して泣いていた。不思議と声が出ない代わりに、こんこんと涙が溢れ出る。

（もう駄目だ。俺にイブは殺せない。イブの事が好きで好きで、限りなく愛おしい。でも、こんな事をしてしまったら、間違いなく嫌われる。どんなに優しく寛大な人でも、絶対に怒る）

「訳を、話して」

暖かいイブの腕に包まれ、優しいささやきが心の真相まで染み渡る。その時、最初の問いの正解が導き出された。

『何故、イブを殺そうとしたんだ』

『それは、イブが悪魔で、俺はイブの事が好きだったからだ』

イブは悪魔。しかし、俺は人間。この恋は実るはずがない。彼女とは、いつの日か別れないといけない。なのに、これ以上親しく愛おしく思えば、別れがとても辛くなる。

その為に、イブを殺してこの愛を無くしてしまいたかった。つまり、本当は殺したくなんか無かった。本当は死んで欲しく無かった。でも、結ばれないことが恐くて、嫌で、受け止めたくなくて安易な道を選んでしまった。『不幸の元凶』といういい加減な答えは、取って付けたこじつけでしかない。

愛するが故に、とても辛い未来と立ち向かう自信が無かった。

あれ、俺は喋っているのか？ 涙声を出しながら、イブに包まれて喋っているのか？ 解らない。もういい。どうなっても良いや。もう、イブの笑顔は見れない。最後に、イブが帰る前に言いたい。「イブのこと……、大好きなんだよ……」

視界が、真っ暗だ。だけど、ちよつとだけ、暖かい。

夢斗を優しく抱きしめ、彼女はずつとかすれ声の真意に耳を傾けていた。そして、最後に彼の放った一言を聞いたとき、彼女の目か

ら涙が溢れる。同情か、それとも感動か。少なくとも悲しみ以外の理由の涙だった。

「夢斗……。ワタシも、大好きよ……。だから、もう、こんな事しないで……。お願い……」

彼を強く抱きしめる。

既に夜は終わりを告げ、東からまばゆい朝日が昇っていた。工場の扉の隙間から注ぐ陽光は、また新たな絆に結ばれた二人の姿を照らす。まるで、二人の進むべき道を指し示すかのよう。

二人を照らす一筋の光は、彼らの見いだした希望にすら見えた。

第五章 第十話 本当は…（後書き）

はい、これにて第五章はおしまいです。

「つか心理描写は難しい、はい、難しいです。途中、一人称なのか三人称なのか解らなくなってますし…。」

え、この微妙なできの心理描写についてのご指摘、および「前夜〜イブ〜」に付いてのご意見、ご感想、ご質問など、どしどし募集してます。気軽にメッセージ下さい。―――<

第六章 第一話 新たな光

雀の鳴き声。バイクの駆動音。人々の行き交う足音。朝の住宅街は、ことのほか賑やかだ。

夢斗はそんな日常の喧騒で、閉じきっていた瞼を開けた。そこは、例の廃工場の中だった。

「ん……」

少し重たげな瞼を開け、ゆっくりと身を起こす。工場内には暖かな日光が降り注いでいたが、空気はまだ冷たい。ひんやりとした空気で肺を満たして意識をはっきりさせると、背後から懐かしく優しい匂い、そして暖かく柔らかい声が聞こえた。

「目が覚めた？」

はっとして振り返ると、そこにはイブがいた。体中のそこかしこに傷があり、所々に包帯が巻かれていたが、彼女はパツと見元気そうだった。

夢斗は『おはよう』と、言いかける。何故なら、彼女へ向けた悪意の存在を、はっきりと覚えていたからである。イブから目をそらして逡巡していると、彼女からの働きかけがあった。

背中に彼女の体温を感じ、後ろからきゅっと抱かれる。そして、耳元から優しいささやき。

「おはよう。大事な話があるの……」

恐らく別れ話の類だろう、と悟り、イブの腕をそつと振り払うと、一回大きく背筋を伸ばしてから、イブと向き合った。

しばしの沈黙。少し、朝の日差しが眩しかった。

「ワタシね、もしかしたら、夢斗と別れずに済むかも知れないの」
その言葉に、彼は驚きを隠せなかった。

時間を遡ること数時間。人間界から戻ってきたガ口は、これまで

になく激しくうろたえた。

「なんたること！ まさかアルバ様の身が、これほどまで痛めつけられるとは！」

廃工場から舞い戻ったガ口は、神殿の祭壇で横たわるアルバを見ていた。

アルバは正しく満身創痍。顔から血の気は引き、眼は半開き。彼の下に描かれた複雑な魔法陣が光を放ち、彼を取り囲むように居並んだ国中の高僧達が、険しい顔つきで呪文を唱え続けている。

「大司祭様！ 事態は一刻の猶予も御座いません！ どうか、アルバ様の治療を！」

先程まで呪文を唱えていたと思しき高僧が、ガ口の真横で大仰な仕草とともに慌ただしく急かす。その慌てぶりやアルバを取り囲む状況が、やせた身体を矢よりも早く弾き飛ばした。

「アルバ様！ 今すぐ、お身体の傷を癒しましょうぞ！」

そう言うのと、ありつたけの呪符を放り投げ、誰にも聞き取れないほど早口で呪文を唱える。すると、総動員された呪符はアルバの身体に貼り付き、彼の姿を覆い隠す。その間も、ガ口は呪文を唱え続け、いつしか透き通った光が、彼の身体から滲み出るようにして現れていた。

「セエイ！」

ガ口の一喝。透き通った光はアルバに向けて一直線に向かって行き、彼の身体を包み込む。直後、強烈な閃光が轟く。

「うわっ！」

高僧達は思わず眼を瞑り、腕で光を遮る。

しばらくすると、例の閃光は収まり、辺りは普段の蔽かな雰囲気祭壇に戻った。ただ一つ違うのは、祭壇に寝かされたアルバの傷が、何もなかったかのように癒えていたことだけだった。

「んっ……」

アルバは瞼を開くと、首を動かして辺りを見回す。自分の事を食い入るように見入る高僧達。そして、ここから一番遠い所に、見慣

れた司祭の姿がある。

「何があつた？」

上体を起こしてぼつりと漏らす。すると、辺りから割れんばかりの歓声が聞こえる。拳を天井に向ける者。隣の者と抱き合うもの。出身部族の物だろうか。奇妙奇天烈な舞で喜びを表現する者。やり方は多種多様だったが、その場の全員が喜びと安堵を露わにしている。それは、ガロも例外ではなかった。

「良かった……」

ガロはそう言って、その場に力無く座り込んだ。二度の次元転換と、荒療治が答えたのであろう。憔悴しきつた顔つきで、ぼつつとアルバの顔を眺めていた。

当のアルバと言えば、周りの様子に釈然としないながらも、どこか訝しげな表情を浮かべ、拳をきつく結んでいる。そんな彼の様子を心配したのか、小柄な僧侶が彼に近付いた。

「どうなさいました？ まだ、お身体の調子が悪いのですか？」

しゃがれ声でそう訊かれると、アルバは小柄な僧侶をキッと睨み付ける。

「ひっ！」

小柄な僧侶は素つ頓狂な声を上げ、後ろ向きに仰け反る。その時のアルバの眼光たるや、残虐な闘志に溢れていた。

「あの女……、ぜってえ許さねえ……」

そう言うと、彼は何処かへと走り出した。

「アルバ様……」

その場の高僧達は、一斉にアルバを追う。しかしアルバは彼らを振りきるようにして祭壇を駆け下りた。

その時だった。

「アルバ様。いずこへ……」

アルバの前にガロが立ちはだかった。祭壇での一部始終を見ていた彼は、重い体を強引に引きずっていた。

「どけよ、ジジイ。オレは、あのクソアマをぶち殺しに行くんだ」

「その『クソアマ』とは」

「イブだよ。あのアマがオレをこんなにしやがった。叩きのめしてやりてえ……」

その名を聞き、ガ口の血相が変わる。それと同時に、彼の中で点が線になった。

『知らないわ。彼は行方不明よ』

途端にイブの言葉が脳裏を過ぎる。よくよく考えれば、おかしな事だ。何故、隣国の王子が行方不明だと言うことを知っているのだろうか。それは、何らかの形で関与しているか、一度会っているからである。

ガ口の中に怒りがこみ上げてきた。そして、あるとき葬っておけば良かった、と後悔の念が湧いてくる。

「イブ姫。そなたは、どうやら我々ソドル王国全てを、敵に回したようであるな……」

「何言ってるんだ？」

「フフ、アルバ様、ご安心を。彼女は何をせずとも、いずれ我々の前に現れます。そう遠いことでは御座いません」

「そうか」

「はい」

「……。フツ、楽しみだな」

アルバはガ口の言葉を信じ、彼の脇から祭壇を後にする。

『今のアルバに戦意は無い』と判断したガ口は、それを黙って見送った。恐らく彼は、自分の部屋に戻るであろう。

「あの？ 何が……」

小柄な僧侶がガ口に訊く。

「近いうちに、また新たな戦乱が訪れる。その時は、アリンズ帝国の真の滅亡だ」

ガ口は静かにそう呟き、アルバに倣って神殿を後にする。

詳しい事情を知らない他の僧達は、ぼかんとした眼で二人を追っていた。

第六章 第一話 新たな光（後書き）

さて、この話もやっと四〇話行きました。これもひとえに、読者の皆様のおかげです。回を重ねる事に、着実にラストに向けて歩んでおますので、これからもよろしくおねがい申し上げます。

第六章 第二話 悲哀に満ちた決断（前書き）

一週間以上間が空いてしまいました。しかも、今回の出来きはかなり低いです。誠に申し訳御座いません。m（――）m ^

第六章 第二話 悲哀に満ちた決断

「それは……、一体どういう事なの？」

驚きを隠せず、たどたどしい口調で問いただす。すると、彼女は静かに切り出した。

「ワタシが、人間になると言うこと」

一切の戸惑いもなく、するすると言葉を綴る。

「どういう事！？ イブは……、悪魔……、なんだろ？」

昨夜の凶行の原因である。まだ心の整理が付いていないのか、彼の言葉は途切れ途切れだった。しかし、彼女は顔色一つ変えず、真剣な表情のままだった。

「そう。確かにワタシは悪魔。でもね、それが何とかなりそうなの」

「何とかなるって。根拠は？」

「ここからが重要よ。一度、ワタシと一緒に魔界に行って欲しいの」「魔界！？」

その単語を聞くと、彼の表情が一気に強張った。

イブは夢斗を魔界へと誘っている。そこは紛れもなく、イブの故郷である。しかし、彼にはその意味が分からなかった。何故、自分が行かなければならない、という疑問が、頭の中を駆け巡る。

「ちよっと待ってよ。何で、何で俺なの！？」

彼は浮かんだ疑問をそのまま口に出した。

「理由は単純よ。それはね……」

イブは初めて口籠もる。それも、何故か気恥ずかしそうだった。僅かな沈黙。それを彼女が破る。

「心細いから。あまりに危険な事だから、一人だと不安で……」

イブの返答が、てつきり重大な事由だと決めつけていたばかり、その呆気なさに呆然とした。そのままの、少し真剣な面もちのまま、彼は固まる。

「それだけよ。解ってくれた？」

イブにそう言われて、彼はそこで我に返った。

「ああ、うん。解った。でも、俺で良いの？ あんな事しちゃったし……」

少し俯き、申し訳なさそうに言う。その時、途切れ途切れの記憶の断片が蘇る。イブの恐怖に怯えた顔が、鮮明過ぎるほどに思い出される。

胸が詰まるほど辛い出来事を思い出す夢斗の頬に、イブの手がそっと添えられた。

「あんな事があつたからこそ、夢斗の存在が重要な。解ってくれ。夢斗が必要なの」

イブの気持ちは痛いほど解る。しかし、自分で良いのだろうか。役立たずでは無いのか、と自信の無さから来る疑問が、彼の心の中で渦を巻く。しかし、イブの手の温かさを感じると、不安はいつしか自信に変わっていった。

二人の間に僅かな沈黙が流れると、夢斗は覚悟を決めたのだろう、ゆっくりと頷いた。イブはそんな夢斗を見て安心したのか、安堵とも喜びとも取れる表情を浮かべ、

「ありがとう……」

と彼にしか聞こえないほど、小さく囁いた。

「ところで。イブ、その傷はどうしたの？」

夢斗がイブの右腕に巻かれた包帯を指差してそう指摘すると、彼女は彼の指の指し示す先に目をやる。

「多分だけど、俺じゃないよね……？」

自信のなさからか、若干語勢が弱かった。

「この傷は、夢斗のせいじゃないわ。実は、夢斗の来るすぐ前まで、他の敵と戦っていたの」

イブは自分の傷を見つめ、少し間を置いてから答えた。

「他の敵？」

「そう。前に話したと思うけど、ワタシの国を攻め滅ぼした国、ソドル王国の大司祭と」

「ソドル王国の……、大司祭……」

夢斗は、ソドル王国について知っている。しかし、自分の前に戦っていた相手がいる事は、初めて知った。

「そいつとはどうなったの？ 勝てた？」

「いえ、負けたわ。それも完敗。ワタシの敵う相手じゃなかった……」

俯いて、昨夜の戦闘の事を思い出す。ガ口に全く敵わなかった事を思うと、改めて自分の未熟さや弱さを思い知る。そこからくる理不尽なもどかしさからか、彼女は拳を強く握っていた。

「それで、向こうは消える前に、ワタシにこれを渡したの」

込み上げる不条理を押し殺し、夢斗に例の呪符を見せる。それは、少し縦長なのし袋くらいの大きさで、白地に複雑な呪文や魔法陣が描かれていた。

「これは？」

「『呪符』よ。初めてでよく分からないでしょうけど、とにかく、これで魔界に行けるの」

「それで、魔界に行ったらどうするの？」

「ソドル王国の宗教の総本山。王宮直属の大神殿という所の最新部の祭壇で、『転生の儀式』をするの。そうすれば、ワタシは人間になれる」

「大神殿……。祭壇……。転生の儀式……。そうか、だいたいわかった」

おおよそ初めて耳にする単語を復唱し、ゆっくりと立ち上がった。

「じゃあ、イブが人間になれるように、俺が頑張る」

固く拳を握り、それを自分の胸板の前にもってくる。

こうして潔く決断できたのも、イブを想う心と昨夜の凶行の申し訳なさがあるからである。そして、決断を曲げないよう昨夜の事は口に出さず、今の心構えをそのまま態度で表した。

「夢斗、色々迷惑掛けてゴメンね。本当なら、ワタシだけで大神殿に向かうべきなんだけど」

「気にしなくていいよ。俺はイブの手伝いが出来ればそれでいいんだ」

「うん……」

語尾が濁り、顔に手を当て俯く。

「どうしたの？」

不審に思った夢斗は、イブの顔をのぞき込んだ。

すると、頼みを引き受けてくれた事の嬉しさからか、イブは笑みを浮かべながら涙を流していた。

夢斗に見られている事に気付いたイブは、彼の視線から更に逃れるように首を振り、

「ゴメン。でも、すぐ収まるから……」

そう言った。

夢斗はその言葉を信じ、何気なく彼女を視界から外す。すると、殺風景で無機質な廃工場内の景色が眼前に広がっていた。そんな風景を両断するかの如く、鉄扉の隙間から注ぐ朝日が印象的だった。何気ない気持ちで外に出てみると、あまりも眩しい朝日が目に染みる。

「まぶしっ……」

思わず瞼を閉じ、朝日を遮るように腕をかざす。

直後、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「行くっ」

振り返ると、剥き出しの剣と愛用の刀を持ったイブが立っていた。彼女は眼の下に涙の跡を残していたが、微かな笑みを浮かべていたようにも見える。

「剣は俺が持つよ」

そう言って右手を差し出すと、彼女は快く剣を彼に渡した。柄の感覚はいつもと変わりないものだったが、この時は少し違ったように感じる。そんな感覚に思いを馳せつつ、再び振り返って自宅への帰路に就いた。

人間になるといふイブの決断の裏には、果てしなく悲哀に染まった理由があった。

『祖国は滅んだ』

彼女にとつて家とも言える祖国は、戦争に負けて滅んだのである。イブはその言葉を信じたくなかったが、自分が魔界を後にする直前の戦況を考えると、それは嘘ではない確率の方が高い。

滅亡を受け入れてしまった自分と、それを否定したがる自己の拮抗は、皮肉にも前者に軍配が上がった。

何もかもを失った。家族も、国も、何もかもが消え去ってしまった。そんな彼女にたった一つ残された希望は夢斗しかなかった。そんな彼女が、夢斗を嫌いになれるだろうか。命を奪われかけても彼を信じる思いの裏には、全てを失って荒れ果てた彼女の心があったのだ。

そして何より、『人間になる』という決断も、それに通ずる。このまま悪魔として生き、自分を苦しめた連中と関わりを持つか、それとも悪魔の看板を下ろし、人間として愛する人と結ばれるか。この選択の答えは歴然である。今度は後者が勝った。

この決断が正しさが解るとき。それは、何に怯えることもなく、何に恐れることも無く、ただ単に愛する人と笑い合える瞬間なのかも知れない。

第六章 第二話 悲哀に満ちた決断（後書き）

なんか、このごろ思うように筆が走りません。展開が決まっているのに、それに見合う文章が浮かばないといった感じですよ。申し訳ありませんが、もうしばらくの間、このような不振が続くと思います。なにとぞ、ご了承承願いたします。> m () m <

第六章 第三話 各々の準備

二人がマンションに帰り着いた時、時刻は七時を少し回っていた。帰り着くなり、夢斗は自室に転がっていた鞘を取ると、直ぐさま剣を鞘に収めた。もはや、行き場の無い怒りや耐え難い理不尽は存在しない。暴威に染まった刃は無いのである。

涼やかな金属音が響き、刀身がしっかりと鞘に収まる。もう、昨日みたいな馬鹿な事はしない。次から剣が抜かれるときは、それは彼女を守り、共に戦うときだけだ、と彼は肝に銘じる。

感慨深げに竜の彫刻と眼を合わす。だが、瞳からの呼びかけは無かった。それは恐らく、夢斗の心中のもやや、精神の乱れが無くなつたからであろう。

剣を机の上に置く。少し音がしたが、それ以外は何も起きなかった。精神は平静を保っている。

その時、背後から足音と呼びかけが聞こえた。

「夢斗。学校は？」

振り向くと、そこには着替えを手にしたイブがいた。察するに、これからシャワーでも浴びるのだろう。

しかし、そんな事にはさして気に留めず、彼は指摘された事だけに思いを巡らした。思えば、自分が学校を飛び出してから既に三日は経過している。訳の分からぬまま姿を消し、しばらく家に引きこもっていた自分に対し、学校では様々な紆余曲折が飛び交っているかも知れない。クラスメイトからの連絡も全て無視しているし、園美の反応も気になる。そんな事を思うと、これから支度をする事に気が引けた。

逡巡する夢斗を見ていたイブは、少し視線を逸らして言った。

「一応、学校に人に断っておいた方が良くと思うんだ。少なからず、長引くと思うから」

「長引くって、どれくらい」

「正確には分からないけど、早くて一週間、長くて一ヶ月以上。何しろ、ソドル王国そのものが相手と言っても過言ではないから」

「ちよっと待った。ソドル王国が敵ってことは、少なからず国家レベルの戦いだろ。二人でどうにかなるの？ それに、イブの国は滅んじゃったんだろ。国対国の戦争だったらまだ解るけど、たった二人でどうにかなるの？」

なるはずは無い。こちらの勢力は今は無き国の姫と、未熟な青年だけだ。

しかし、イブには何かしらの考えがあるようだった。

「そうね。でも、ワタシも馬鹿じゃないわ。自分がどこの誰と戦おうとしているかは知ってるし、自分と相手の力の差もわきまえてる。でもね、一つだけ望みがあるの」

「望み？」

「そう。たった一つだけど、その分何よりも強く輝く、たった一つだけの可能性……」

顔を上げ、自信と希望に満ちた表情で夢斗と向き合う。眼光は柔らかなで優しいとさえ感じれるが、決してそれだけの眼ではなかった。

「それは、一体……」

その自信はどこから来るのか。その希望は何が裏付けなのか。そんな疑問を投げかけるようにイブを見るが、彼女はそれを素っ気なく無視した。無視と言うよりは、先送りにした感じだった。

「その事については、後でゆっくり話しましょう。今は、お互いの準備に専念すべきだわ」

そう言って踵を返すと、彼女はバスルームへと向かった。

イブが無策で、回答に詰まった拳げ句の先送りではないことは解った。それを踏まえ、夢斗は部屋のドアを閉め、学校に行く準備を始めた。

放射状にもうけられた穴からは、無数の水泡が放たれ、それがなめらかな肢体に当たって落ちる。もうもうと立ちこめる湯煙の中で、

イブは物思いにふけていた。

「さて、思い通りにいかしら……」

彼女の身体から、昨夜の戦闘の傷は消えていた。元々は悪魔であり、魔力もある。その手の呪文を唱えれば、ある程度の傷ならほとんど一瞬で癒える。その分精神が疲弊し、後で無性にだるくなったりするのだが、幸いそのような事はなかった。

その時、玄関の扉が開き閉まる音がした。夢斗が出かけたのだと判断すると、それがきっかけとなって、渦巻いていた思案の霧がいくらか晴れた。

「考えるのは後ね」

そう言っただバスルームの戸を開ける。バスルームに立ちこめていた蒸気が一気に解き放たれ、洗面所の鏡を白く浸す。

彼女はバスタオルを胴に巻き、胸元で縁と縁を軽く縛ると、しばし曇った鏡に映る自分と向き合う。濡れた髪が首筋や耳に貼り付き、全身が火照って赤らんでいる。細くしまった脚と腕。程良くついたバスト。ウエストのしまり具合はタオルの向こう側だったが、以前見たときの記憶が思い出される。どれも、さして変わってはいなかったが、ただ一つ、眼だけが違って見えた。ここに来てすぐより、少し生気が戻り活き活きとしているようだった。

「心配事はなさそうね」

そう言うなりタオルを床に落とすと、いそいそと着替えを始めた。暫くして、着替えを終えた彼女は、ほのかな湯気をまとってリビングに現れた。

リビングには暖かく柔らかな朝の陽光が降り注ぎ、室内を優しく染める。

一息ついてソファに腰掛けると、これまでの事を思い出した。

これまでの間、実に沢山の出来事が過ぎ去っていった。夢斗と出会い、共に戦い、想いを伝え、そして不釣り合いや行き違いも経験した。そしてまた、彼ともう一山越えようとしている。

彼にはまた、普段は経験しえない様な苦労や迷惑を掛けてしまう

かも知れない。しかし、その事を口に出した時、彼は戸惑いながらも理解し、協力するとさえ言うてくれた。それは彼の優しさか寛大さから来るものかは良く分からないが、それでもありがたかった。また裏切りがあるかも知れないが、その可能性は流石に低いだろう。あれほど深く悲しみ後悔すれば、それを繰り返そうとは思わないのが普通である。

「迷惑、掛けっぱなしだな……」

伏し目がちにそう言った。

もしかしたら、彼は魔界行きを断るかも知れない。それに対し、『しょうがない』と諦める覚悟もあった。その時は自分だけで帰り、転生を済ましてから人間という姿でまた会おうと決断する覚悟もだ。何より、ガ口から呪符をもらった瞬間に、帰ろうという意味は固まっていた。それに夢斗が賛同するかどうかの問題だった。

「本当にゴメンね……」

夢斗に対する申し訳なさから、自然と声が出てしまった。しかし、それを聞いた者はいない。魔界に行く時にそう言おうと、彼女は固く誓った。

「さて、夢斗が帰ってくるまでに準備をしなきゃ」

ソファから勢い良く立ち上がり思い切り伸びをすると、魔界行き
の支度を始めた。

第六章 第四話 言い訳

夢斗の視界には、見慣れた校舎と校門があつた。いつもと変わらぬ朝の光景が広がっている。普段は始業ぎりぎりに飛込む彼にとつて、朝早くの学校というものは新鮮な感じがした。遠くから野球部の掛け声が聞こえる。

自宅から学校に着くまでの間、顔の知つた生徒とは会わなかつた。朝練のある部活動の生徒とは会つたが、部活に所属していない彼には大した問題ではなかつた。仮にクラスメイトと鉢合わせになつたとしても、上手く言いくるめられるだけの理論武装は済んでいる。

「まずは職員室だな」

肺を新鮮な酸素で満たすと、固い決意を背負つて歩き出した。

職員室には何人かの教師が出勤していた。名前くらいなら知つている教師もいた。しかし、目的の教師、自分のクラス担任の国松の姿はなかつた。

やはり早すぎたな、と少しだけ後悔する。時刻は七時半をわずかに回つたばかりで、多くの教師はもつと後になつてから出勤する。

この時間に学校にいるのは、事務職員と朝練の生徒、あとは余程律儀か暇な教師だけである。

職員室のドアのガラスからもう一度室内を見渡すが、やはりいなかった。しばらく教室で時間を潰そうとして踵を返すと、よく見知つた男、担任の国松重幸とばつたり出会した。

「足達。足達じゃないか。どうしたんだ、いきなり飛び出してから連絡もよこさないで。心配したんだぞ」

国松は四〇過ぎの数学教師だつた。中肉中背で髪は丁寧に整えている。生徒から絶大な支持を得ている訳ではないが、さりとて、馬鹿にされている訳でもない。要はこの学校にもいる、標準的な教師である。

目の前の男は当惑している様子だつた。何しろ、ここ数日の間に

様子の激変した生徒と、思いもしなかった場面で鉢合わせたからである。

「先生。その事についてお話があります。良いですか？」

真剣な面持ちで告げる。それを読み取った国松は、しばし無言だったが、

「分かった。少し待っていていなさい」

そう言っつて、職員室へと消えた。

夢斗と国松は、職員室の隣にある進路相談室にいた。八畳程度の室内の壁際の本棚には、大学に関する資料やファイリングされた書類などが並んでいる。そんな本棚に囲まれた部屋の中央には、白い机とパイプ椅子があり、椅子は向かい合わせに置かれていた。夢斗は入り口側の椅子に座り、向かい国松と対面していた。

「それで……」

国松は重々しく口を開く。

「話とは？」

しばし無言で国松を見据え、何かを決めたようにうなずく。

「はい。これまで、無断で休んだ事についてです」

夢斗の話の内容に、あらかたの予測はついていたのだろう。国松は特に驚いた素振りを見せなかった。

「実は、父さんがスペインで事故に遭いました……」

「っ!?!」

目を見開いた所から察するに、国松は相当驚いたようだ。そんな国松を尻目に、夢斗は続けた。

「三日前の事です……。空港からホテルに行く途中のタクシーが、酔っぱらい運転のトラックと接触して……。バランスを崩して橋から落ちたみたいです……」

ときおり言葉に詰まったり、うつむいて目頭を押さえて信憑性を出す。当の国松は夢斗の言葉を信じ込み、続きを待った。

「容態は詳しく分かりませんが、かなり悪いみたいなんです……」。

むこうで手術をしたみたいですが、回復するかどうかはよく分からなくて、それで……」

「分かった。もう、いい」

夢斗の話には続きがあったが、国松はそれを制した。

「それが休みの理由だな」

「はい。それで、もうひとつ言うことがあります」

「何だ」

「父さんの顔を見にスペインに行かなければならないので、しばらくの間、また休みます。いつになるかわかりませんが……。必ず帰ってきます」

「そうか……」

国松はうつ向き、彼の話に聞き入っていた。

「今日の午前中の飛行機で日本を発とうと思っています。いろいろと迷惑を掛けますが、よろしくお願いします……」

最後に声のトーンを下げられるだけ下げ、ゆっくりとした動作で席を立った。

国松はそれを止めようとしなかった。同情だろうか、少し物憂げな視線を送ると、

「みんなには、先生から伝えておこう」

と言い席を立った。

内心はらはらしたが、なんとか国松を信じ込ませ、学校側への言い訳は立った。

夢斗の父親の事故は勿論嘘である。最低一週間は魔界に行かなければならなくなったため、学校に偽りの休学報告をしたという訳だ。その際、夢斗の父親の職業と、彼の演技がものを言った。少し大袈裟な気もしたが、結果的には良い方向に傾いたようだ。

「何とか上手くいったな」

校門を出てからしばらく歩いた所で振り返り、学校の方向に目をやる。特に後ろめたさは感じなかったが、それ以前に帰ってきたと

きの事が気懸がかりにった。

「長引くと大変だな……」

テストや単位についての不安が余切った。遅刻は多くないが、成績が芳しくない。帰りが遅くなれば、進級や退学も絡んだ問題が浮上してくる。それに、欠席日数が多いと、無条件で進級できなくなるのだ。

（進級できなくなるのは勘弁だな。でも退学も嫌だなあ）

心の中でぶつぶつぼやきながら、彼は家路を急いだ。

第六章 第五話 剣の謎

夢斗は、今日になってから二度目の帰宅を遂げた。

「ただいま」

玄関のドアを抜けリビングへ。すると、見慣れた同居人がそこにいた。

「おかえり。早かったね」

イブは床に正座し、刀の手入れをしていたようだ。彼女の正面には包丁用の砥石があり、右側には水を張った洗面器が置かれていた。

「ああ、しばらく学校に行けないって、言いに行っただけだから」

「そうなんだ」

イブはそう言うと、休めていた手を再び動かした。手元では、柄から外され刀身のみになった刀が、石の上で静かにスライドしている。刀身の峰の方に両手の親指以外の指を沿え、角度を巧みに調節しながら前へ後ろへ。その度に、規則的なリズムで涼やかな音が響く。

ひとしきり済んだ所で、刀身を石から離し電灯の光にかざす。丹念に研ぎ澄まされた刀身は、新たな命を宿されたかのように輝いている。刀そのものの反射と、刀身を伝う水滴の反射とで、より鮮やかに、より清らかに煌めきを放つ。それは、命を奪い血に染まる凶器ではなく、限りなく洗練された芸術品にさえ見えた。

「終わったの？」

制服の上着を脱ぎ、椅子の背もたれに掛けながら訊く。

「ええ、だいたいはね……」

真っ直ぐに刀身を睨み付け、夢斗に背を向けたまま答えた。

「そうだ。俺のもやってくれる？」

ふと、自分の剣の事を思い出した。来るイブ転生の為の魔界行きに向け、自分も準備をする必要があると判断したからである。

しかし、イブの返答は意外なものであった。

「その必要はないわ」

背を向けたまま、毅然とした語勢で答える。

何か悪い事を言ってしまったと思った夢斗は、自然と引け腰になり、申し訳なさそうに聞き返す。

「なんか、悪い事言った？」

「えっ!？」

急に弱まった声を出された事に、はっとした様子で振り返る。

互いにきよとんとした表情で見つめ合い、しばし気まずい空気が辺りを支配する。

ややあつて。

「夢斗の剣には元から強い魔力が込められていて、手入れをする必要はないの。せいぜいが、薄れた魔力を補充するくらいなんだけど、それは『聖域』と呼ばれる場所以外では出来ないの」

取り乱した様子ではないが、少し萎縮した様な口調だった。夢斗に変な気負いをさせてしまった負い目からであろう。

「でも、剣の魔力が薄れた様子はないし、まだ大丈夫だと思う」

「そうなんだ。それで、その『聖域』ってのはどこにあるの？」

「国内の数カ所に点在していて、各所にはレベルの高い神官や魔術士がいて守っているの。もし、それがまだ続いているならば、ひとつならあてがあるわ」

弁解のつもりが少々踏み込んだ部分まで話してしまった、と後悔したが、特に問題はなかった。聖域の事は話さなければならぬ事であったし、魔界に行った時の拠点にするつもりである。つまり、話す話さないではなく、早いか遅いかの問題だったのである。

イブがあらかた話し終えたところで、夢斗は彼女の話の内容を整理していた。

わずかな黙考。その後、彼は小さくうなずく。

「うん、わかったよ。要は、剣の事はしばらく心配ナシって事だね？」

「そうよ。魔界に行くまでは特に気にしなくて良いわ」

峰に二つ折りにした白布をあて、切っ先に向けて余分な水を拭いとる。すると、刀本来の輝きを取り戻し、一点の曇りもない澄み切った光沢を放つ。

彼女は何か思い出したように、

「あの剣には魔力が込められているから、普通の剣より切味が良いの。もし、あれが普通の剣だったら、夢斗はもうやられているわ」

負い目から開き直り、話は少しシビアな内容になる。

夢斗はいきなりの告白に驚き目を見開くが、彼女は構う事なく続けた。

「初めて敵を斬ったとき、切味に比べて手応えが無かったですよ。それが魔力の効果よ」

「そ、そう……」

「魔力が込められていていないのでは、切味とか扱いやすさが格段に違うの。持ってみて」

イブは手入れが済み、刀身を柄に納めた刀を差し出す。夢斗は躊躇いなく刀を取るが、

「うっ、重い……？」

想像していた重量よりも重く、それに呆気を取られ無言になる。

毎度毎度、イブはこんなに重い物を軽々と振り回していたのかと思つと、余計に自分の弱さが浮彫りになる。次第に視線は床を向き、顔付きは沈んで行く一方だった。

「はあ……」

深く重いため息。

「どうしたの？」

「いや、あのさ、俺ってイブに比べると、全然小さい人間だなあつて、思つてさ」

彼は刀を返した。

「イブは凄いよ。戦争に巻き込まれてこっちに来たのに、そんな事を気にさせないくらい元気だしさ。刀の扱いだとか、戦い方だとか、

魔法だとか、俺とは比べ物にならないじゃん。それでちょっとね」

夢斗の本心だった。彼は自分以上の力を秘めたイブに、最初から引け目を感じていた。

「俺も頑張る……」

どこか遠い目で呟く。

刀を鞘に収める最中だったイブはそれを聞き逃したが、彼の両拳が決意の元、固く握られたのを見て、詮索をやめた。

「でさ、いつ出発？」

先ほどの沈んだ表情とはうってかわって、明るい表情で訊く。それはまるで、旅行の日取りを知りたがる子供のようだった。

イブは彼の豹変ぶりに数瞬当惑したが、すぐに気を取り直し彼の顔を覗き込む。

「な、何？」

いきなり見つめられた事に困惑する。その後、彼女は微笑んで、

「何でもない」

そう言って視線を逸らした。

「早い方が良いと思うの。できれば、明日までには発ちたいかな」

「わかった。じゃあ、俺は準備してくる。着替えとか」

背もたれの上着と鞆を取り、自室へと向かった。

夢斗が自宅に着いた頃。学校では夢斗が休学するという事実が、担任の国松から他の生徒に告げられた。

「　　」と言っただけで、足達はしばらくの間学校を休むそうだ」

国松が話している間、教室内は整然と静まり返っていた。

「先生」

教室の静寂を破り挙手したのは、夢斗の友人の野島だった。

「夢斗は本当に帰ってくるんですか？」

夢斗から告げられた通りに伝えた国松だったが、本当にか核心を衝かれる質問をされると自信がなくなる。しかし、たかだか一週間そこいらの物であろう。正当な理由の上での休学であるし、事態

は一刻を争う。国際電話か何かで連絡をくれるか、後で事実確認さえできれば特に問題はない。

回答に戸惑う国松だったが、要は法事の様なものである。違うのは、行き先が海外なのと、保護者であるという事だけだ。

「大丈夫。確かに足達はスペインに行くが、法事みたいなものだ。足達は帰ってくる」

「わかりました」

「恐らく、足達はもう空港に向かっているだろう。何か伝えたい事があつたら、今すぐの方が良いだろう。しばらく足達とは連絡が取れなくなるからな」

「え？ 何ですか？」

例によつて、というか、クラスに必ず一人はいる理解力の乏しい生徒が素頓狂な声を出した。

「だからなあ、関島。飛行機と海外じゃ、携帯が使えないだろう」
半ば呆れた様子で答えた。なんとなく、国松の普段の苦勞がうかがえる。

関島の一言で、教室中が湧く。そんな喧騒の中、ただ一人真相を知りうる人物は、ひたすらに腑に落ちない様子だった。

「へえー、足達くんのお父さん、スペインで事故っちゃったんだ。

あれ、園美？ どうしたの？」

教室の隅の席の彼女は、真実を叫びたい衝動に駆られていた。

「ウソよ……」

「えっ？ そういえばさ、足達くと別れたって聞いたけど、もしかして、これが原因？」

隣の女子が問いかけるが、園美は答えなかった。

（また、あのコね……）

怒りにも似たものが募る。どうやら、夢斗の休学が偽りの物で、それが何を隠すための嘘かを、大体ではあるが見破った様子である。そして何より、自分よりイブを選んだ事が氣にくわなかった。

（ぶざけないで）

次の瞬間、固く握られた拳が机に降り下ろされ、周囲の生徒が不安げな視線を送ったが、当の本人はまったく歯牙にもかけなかった。

第六章 第六話 夕暮れ時の晚餐

夕刻。沈みかけた太陽で朱色に染まる町。彼の部屋も、今の町によく似た色に染まっていた。

「準備よし」

ボストンバッグの中には、数日分の着替え、洗面具、包帯や消毒液などのメディカルキット、日持ちする食品などが詰められていた。イブとの協議の結果、出発は明日の早朝に決まった。これから早めの夕食の後、明日に備えて寝る事になっている。

「さて、そろそろ鍋の方は完成かな」

ドアを開けて廊下へ出る。その瞬間、何かを煮詰める匂いが漂い、鼻孔をくすぐる。

「うん、こんな感じだな」

コンロにかけられた鍋のふたを開ける。立ち込める湯気と香りの中、だし汁を吸って褐色に染まった大根と、ぶつ切りの鶏肉が煮詰まっていた。

鼻と目で確認した後、今度は舌で確認する。適当な大根を箸でつまみ、それを口へ。歯を突き立てると、大根の中でくすぐっていただし汁が、力強く吹き出し口腔を満たす。醤油とみりんの塩梅も丁度良い。

「ん……。よし、良い感じだ」

小さくガツツポーズし、次に鶏肉に手を出す。これもまた、適度にだし汁吸いつつ、肉本来の持つうま味を忘れてはいなかった。両者が丁度良く混じり合っている。

「旨い。よし」

コンロのつまりをひねり、火を止める。大きめのお玉で中身をすくい、左手に持っている底の深い皿に盛り付ける。ある程度すくったところで、鍋に残るだし汁ごと注ぎ込む。

そのおり、

「いい匂いね。できたの？」

先ほどまでシャワーを浴びていたイブが姿を見せた。

キッチンからダイニングテーブルに皿を運び、更にもうひとつつまみながら答える。

「うん。出来たよ」

テーブルの上には先ほどの煮物と山盛りの春雨サラダ、ご飯と三つ葉の澄まし汁が並んでいた。

ここまで豪華な食事は、もうどれだけご無沙汰だろうか。バイトを始めてからは、バイト先で出るまかないで夕飯を済ましていたし、元来、親の帰りが遅かったり帰って来なかったりの生活のため、ほとんどコンビニの物であった。

「さて、食べようか」

「そうね。いただきます」

二人は向かい会って席に着き、晚餐を前にして一礼した。

箸で料理をつつき、他愛ない話題で談笑する。これまで色々な事があったとか、これからもよろしくだとか、そういった内容だった。あらかた食事が終わり、卓上の皿に隙間が目立ち始めた頃、イブが重々しく切り出した。

「それで、準備は出来た？」

既に自分の食事は終わり、背もたれに身を預けていた夢斗は、話の内容が魔界行きに関わっていることを感じ取ると、直ぐさま姿勢を正した。

「ああ、あらかた終わったよ」

「そう。なら良いの」

お椀の中の澄まし汁を飲み干す。しばらくして、適度な満腹感を感じると、お椀と茶碗を重ねキッチンへと運んだ。

「イブ。俺が片付けるからいいよ。イブは、早く寝た方がいいって彼女の横に立ち、スポンジを横からつかみ取る。

「わかった。じゃあ、後はお願いな」

「任せて。ちょっと早いけど、おやすみ」

「うん、おやすみ」

イブはそう言うなり踵を返し、自分が寝るための部屋へと向かった。

「明日からは、こんなのかな日常は……」

彼女は静かに呟き、覚悟を決めていた。ここで平穏と別れを告げ、明日から戦乱と再会するのだと悟る。どこか思い詰めた顔つきだった。

そんな事実を微塵にも知らなかった夢斗は、鼻歌交じりに洗い物を済ませていった。

放課後。西日の注ぐ街。そこに、一人の少女が歩いていた。

何かを思い詰め、覚悟を決めた様な顔つき。足取りに迷いはなく、ただ一直線にある男の家に向いていた。

（これ以上、振り回されたくない）

園美の瞳には殺意がみなぎっていると云っても過言では無かった。それほどまでに強く、怒りに染まった瞳。その怒りの矛先は、他の誰でもない夢斗であった。

許せなかったのは、イブとかいう女と付き合っているということではない。いきなり訳の分からない事を暴露し、姿を消した後は『別れよう』のメール一通だけ。こんな一方的な別れ方に腹が立ったのだ。メールが来たときから怒り心頭で、その返事すらする気が無かったが、それでも学校では隠していた。しかし、今日の休学報告は一体なんだ？ 一つの相談もしないで、勝手に休学するなど合って、事実を確かめなかった。目の前で解るように説明してもらい、そこで改めて二人の今後について話して欲しい。それだけだ。（ちゃんと、話してくれればいいの）

沸々と湧き上がる怒りは、事実を知りたいと思う気持ちの成れの果てであろう。それだけ、夢斗を想う気持ちが強いのである。

人々の行き交うただ中を一人突き進み、いつしか夕刻の街に消えていった。

第六章 第七話 哭

二人の晚餐は終わった。既にテーブルの上に食器はなく、その代わりにシンクの中が食器で満たされている。

日は沈み、世界はうつすらと闇に染まる。そんな外の世界とは裏腹の室内には、白色灯が煌々と灯っていた。

イブと夢斗はリビングでくつろいでいた。明日に備えて早めに寝るべきなのだが、ただ何となくまだ起きている。脚を広げてソファの背もたれに肘をかけ、背中を反らし天井を仰ぐ夢斗。イブといえば、その隣で物静かに座っていた。二人の間に会話は無かった。互いに険悪なムード、という訳ではなかったが、互いが牽制しあうように押し黙っていた。

こんな状況になつてからどれだけの時間が経過してからだろうか、この雰囲気を打破するかの如く、イブが会話の先端を切った。

「夢斗。明日から魔界に行くけど、気分はどう？」

単に意気込みを聞きたいが故の質問。

夢斗は天井を仰いだまま一考し、

「なんだろうな。たのしみ、な訳はないけど、どことなく緊張してる……。あと、やっぱり不安だ」

右手の甲を額にあて、瞑目した。

やはり緊張と不安が先行している。それも当たり前だろう。初めてで、なおかつ物騒で得体の知れない土地に行くのだ。緊張しない訳がない。

「そっか、そうだよな」

「イブはどうなの？ 里帰りでもあるだろ」

右手を額から離し、ぼんやりとした眼差しで天井を見上げ、聞き返す。

「確かに里帰りだけど、複雑ね。滅んだからか、それとも人間に転生するからかどうかは解らないけど、ほっとしないの」

「そうなんだ……」

イブの返答の重々しさに、再び沈黙が訪れる。
ややあつて。

「不思議なものね。今日の朝には希望で胸がいっぱいだったのに、今では不安が増えているの。ほっとしないのは、きっと不安のせい

。本当は、滅んだ国を見るのが辛いのに」

次の瞬間。イブは夢斗の腕に縋り付いた。

滅亡が脳裏に過ぎってから押さえていた感情がこみ上げてくる。

厄介な事に、止まらない。彼の腕に縋り付かせたのも、多分押さえてきた感情のせいだ。

「怖い。荒れた土地に、みんなの亡きがらや、ボロボロになった町並みがあると思うと、本当に……。もしかしたら、人間になるのも無理かも知れない。それに、夢斗にも危害が及ぶかも知れないの。本当に、怖いのに」

彼女の本心だった。元来、静かな感情の奥に、限りなく深い愛を持っている彼女である。愛してきた物の無惨な様や、愛する者の傷つく姿は、本当に辛い。そんな最悪の光景を思い描くと、自分の身を引き裂かれた様な感覚に苛まれる。すがりたくて、しがみついたくてしょうがなかった。

「イブ……」

「怖いよ。めちゃくちゃになつてる世界を見るのが」

自然と溢れてくる涙。どこからともなくこぼれる弱音。隠しきれない頼りなくて情けない自分。どれも止める術が無かった。今出来ることは、ただ感情に流されるだけである。

大事な旅立ちの前に、こんなにも情けない姿を晒してしまった。

ああ、これまでは。ずっと凜とした姿を見せていたのに。こんなでは軽蔑される。信用も、信頼もして貰えない。築き上げてきた物が、音を立てて崩れ去っていく気がする。でも、この感情は抑えられない。

醜態を晒し、自分への嫌悪感に打ちひしがれるも、無様な姿でい

るしかないイブ。そんな彼女への夢斗の反応は、彼女の一番予想し得ない意外なものだった。

「なんて言ってるのか解らないけど、辛かったね、イブ」

暖かくて優しさに満ちた腕の体温。それがイブの背中を覆った。そして、しがみついていた腕も、同じように背中へと回される。

「俺はさ、イブみたいに強くないけど、でも、イブの気持ちは解るよ。だからさ、もう何も言わなくていいから、気の済むまでこうしていようか？」

暖かい。それも、これまで経験しなかったくらいに。どこまでも優しく暖かくて、それでいて頼りがいがある。もう、ダメだ。

これ以上は

イブの中で、何か張りつめていた物が一気に弾け飛び、音を立てて崩壊し、解き放たれた。

「っ！」

溜めていたもの、我慢していた事、何もかもが解放され、部屋には乙女の哭する声が響き渡った。

しばらくして、乙女の泣き叫ぶ声は聞こえなくなった。その代わりに、彼女の両目の下にはくつきりと涙の跡があった。

泣くだけ泣き気分がすっきりしたイブは、夢斗に連れ立たれてリビングを後にし、部屋で休んでいる。

内心、少し良かったと思っていた。また新たな彼女の一面をかいま見れたからだ。イブは国や国民を想う気持ちは強すぎる。その反応が先の大泣きであった。それに、大声で泣くのは、安全な所でやられた方が断然良い。これが魔界に行った後だったり、敵と戦っている最中の事であったりしたら。その事については考えるも恐ろしかった。

「さて、俺も寝ようかな……」

夢斗の部屋の時計は、六時を少し回っていた。

明日からは、こんな風に寝られなくなるかも知れない。それに、

寝ることすらままならなくなるだろう。安らかな眠りとは、今日でしばらくお別れだ。思いつきり寝て、その分明日に備えよう。

そう思っ、部屋の電気のスイッチに手を伸ばした。その瞬間。

「？」

机の上の携帯が鳴った。

不可解だった。何故なら、自分の知り合いからの励ましのメールは、午前中に来るだけ来た。今になって新たに届くのは、どう考えても不自然だった。

「誰だ？」

携帯を手に取り、受信したメールの確認をする。この時は、メールの送り主が誰だか解っていなかった。

「……っ！？」

送り主の名が、液晶に浮かぶ。『小出園美』。忘れかけていた名前だった。学校に行かなくなった前日以来。

見ないでおこうと思ったが、いつもの習慣からか、いつの間にか内容に眼を走らせている。

『いるんですよ。今すぐ家から出てきて』

文面はそれだけで、絵文字や顔文字の類は見られなかった。必要事項のみが綴られた、一切の無駄の無い文面。それが、夢斗を逆に恐れさせた。

まさか、こんな問題が残っていたなんて。

応じるべきか否か迷ったが、応じることにした。自分が部屋にいることを知っていると言うことは、向こうは少なからずこちらを監視できる場所にいるだろう。そうすると、こちらはいないと言い張れない。部屋の電気は煌々と灯っていたし、つい数分前まで、イブの鳴き声が漏れていたのだ。それに他の生徒へ表向きの言い訳では、自分は既に日本を発っている。

携帯を元の位置に戻すと、彼は覚悟を決めて玄関へと向かった。

第六章 第八話 紫と茶（前書き）

久々の更新です。恐らく、一ヶ月ぶりくらいですね。たいへん長らくお待たせしまして、申し訳御座いません。――――あと、八話で第六章は終わりになります。それを踏まえて、皆様お楽しみ下さい。

第六章 第八話 紫と茶

マンションのエントランスホールに、園美がいた。制服姿であることから見て、まだ家に帰り着いていないのだろう。怒りや疑いの籠もった目は、真実を求めているようにも見えた。

「また、あのコ？」

目と目があつた瞬間、園美がそう切り出した。

「ああ」

夢斗は短く答える。この時、彼にはある懸念があつた。ここで真実を知つた園美は、学校でそれを暴露するのではないか。そんな心配が頭を過ぎるたび、言い知れない不安感を覚える。それ故、短く答える事しか出来なかつた。

「そうなんだ。何をしに行くの？ 学校休まないと出来ないこと？」

園美は彼女自身の持つ疑問だけをぶつけているのだろうが、その一つ一つが確信を突いていた。問いに対しどう答えて良いか解らず、目を泳がして視線を逸らす。

「答えられないんだ。それだけ大事な事なんだね」

「ああ。学校を休むのも、それだ」

「そんなの解つてるわよ……」

「もう、これで気が済んだ？」

いつしか取り囲んでいた気まずい空気に耐えきれず、早く解決したいの一心で、夢斗はそう言った。しかし、それは逆効果だった。

「『気が済んだ』……。ねえ、マジで言ってるの？」

園美の語勢が一気に荒くなる。どこか喧嘩腰だ。

「いきなり信じられないような事言つて、学校休んで。それでメールの一通だけで。それで、今度はサボリ？ それで『気が済んだ』だなんて、マジ信じられない。これで良いワケないじゃん」

「園美……？」

「黙つて。アタシの名前を呼ばないで。アンタ、どうしようもない

ね。自分勝手過ぎ。ウザい。他の人が信じてても、アタシは信じないからね」

「……………」

一気にまくし立てられ、夢斗は口籠る。それは、園美の意見の正しさと、彼の中にある罪悪感を象徴するものだった。

「そうだな……………」

長い時が流れたように思えた。本当は、たかだか数秒の沈黙だったにも関わらず、今の夢斗はかなり長く感じた。そうした長い時間の中で絞り出せたのが、この短い一言だけだった。もはや、反論の余地はない。相手の言葉が真実なら、肯定する以外の選択肢は無かった。

「ふざけないで!」

慣れない怒りの感情を抑えられず、園美は右手で夢斗の頬をひっぱたいた。

「うつ……………」

避ける事はできた。しかし、夢斗はそれを甘んじて受け止めた。左頬に鋭い痛みが走る。

「なんでそう、自分勝手ばっかなの? アタシとか、みんなの事も考えなさいよ!」

夢斗は黙ったままだった。

「アタシが怒ってるのは、振られた事じゃなくて、アンタの自分勝手さだよ。分かってる?」

「ああ。分かってるよ」

「嘘。分かってるはずない。分かってたら、まず最初に謝ったりするでしょ?」

園美はそれだけ怒鳴ると、そこからは全く無言になる。夢斗の答えを待っているとも、新たにまくしたてる準備をしているようにも見えた。

気が付けば、園美の息は上がっていた。全力疾走の直後の様に肩で息をしている。

「アタシとかみんなを振り回してさ、それでアンタは自己満？ もうイヤ。本当に、サヨナラ」

園美の平手が、再び夢斗の頬を襲った。痛みが二重になって伝わる。二度目の平手を打ち終わると、そのまま踵を返し彼女は去っていった。

待つて、と叫べない自分がいた。そんな自分は、彼女の背中をじつと見詰めている。自動ドアをくぐり彼女がエントランスホールからいなくなると、ガラスの自動ドアに自分の姿が映る。暗い鏡に映った自分は、とても小さく情けない様にみえた。

『自己満』

園美からの一言が、痛み以上に響いていた。

自分がこれからやろうとしていることは、単なる自己満足でしかないのだろうか。

先生も、クラスのみんなも、園美も騙し、それで良いのだろうか。園美が自分を打ったのは、そんな自分の目を覚ます為ではないのだろうか。

本当に、これで良いのだろうか。

数々の自問が発するが、決して答えは出なかった。

「もう……。イヤ……」

マンションを後にしてから、早足で歩いていた。しかし、嘆くように独り言を呟いた瞬間に、立ち止まってうつむく。

園美は夢斗を呼び出したまでは良かったが、彼の顔を見た途端、本来の目的を忘れてしまった。本当は、これ以上振り回さないで本当の事を言っつて、と訴えたかったのだが、溢れる感情を抑えることが出来なかった。散々怒鳴った拳げ句、二度も引っぱたいてしまった。

先程の『イヤ』は、自分の幼さに対する嫌悪の表れだったのかも知れない。しかし、その真偽の程は、当人である園美にも解らなかった。

「なんでこう……。自分でも解ってるのに……」

複雑に混同してゆく、何かへの嫌悪。渦を巻き、捻れて行き、本来の姿を失いつつある。青と赤が混ざって紫になるような単純な物ではなく、紫と茶が混ざるような混沌。

夢斗も自分勝手ではあるが、自分も自分勝手だという事に気付いた。夢斗には夢斗なりの事情があるし、彼なりに自分へのけじめも付けたのだ。なのに、それを受け入れられず、あまつさえ感情を抑えられなかった。彼女は今、本当に後悔していた。

「ゴメン……。ね……」

涙が頬を伝う。これまで何度も伝った涙だったが、園美には初めての感触だった。

この涙は、紫と茶を洗い落とせるのだろうか。それとも紫と茶を含んで、園美の心から出ていこうとする自己防衛なのだろうか。

第六章 第八話 紫と茶（後書き）

さてさて、これで六章は終わるのですが、何やら重々しいですね。イブはすつきりしたのに、夢斗は何やら重い物を抱えていますし。あと、これは作者の個人的な感想なのですが、みんな泣きまくってると思います。まあ、何はともあれ、次回からはいよいよ魔界行きです。しばらくご無沙汰だった戦闘シーンも、次章からばんばん盛り込んでいきます。ついでに新キャラもちよろちよろつと（笑）。それでは皆様、これからも宜しくお願いします。> | | | <

第七章 第一話 魔界。そして、新たな戦いへと

「準備はいい？」

初めて会ったときと同じ服装の、白い和服姿でイブが訊く。

園美と分かれてから、夢斗はしばらくエントランスホールで立ち尽くしていた。それから、何がきっかけで部屋に戻ったかは覚えていない。気が付いたとき、彼はベッドの中にいたのだ。

「ああ。いつでも行けるよ」

そこは例の廃工場だった。いつぞや、老齢の大司祭との一戦があり、二人の思いの丈がぶつかり合い、互いを理解し合った場所である。

夢斗は剣とポストンバグを両手に一つずつ持ち、イブは刀を腰に差し呪符を右手で掲げていた。

「じゃあ、始めるよ」

彼女はそう言って、呪符を放った。すぐさま右の掌を突き出すと、呪符はその動きに呼応したかの様に宙に浮く。

夢斗は呪符の動きを目で追っていた。空中をふわふわと漂う五枚の符は、禍々しい反面どこか可愛くも見える。

「行くう」

彼女は快活な笑みを浮かべながらそう言った直後、細い腕が背中に回ってくる。そして、そのままきつく抱き寄せられた。触れた部分から、体温が伝わってくる。

きっと、不安があるのだろう。いくら里帰りと言っても、故郷は戦争で跡形もなく破壊されているのである。それに、彼女が先導する次元転換は初めてである。

「うん」

そんな彼女の憂慮を察し、相手の眼を見て強くうなずく。数秒間見つめ合うと、互いに前を向いた。

イブは眼を閉じる。腕に入る力が一層強まった。それとほぼ同時

に、ゆつくりと呪文を唱え始めた。

「ナダン……アフテン……カントングジ……」

彼女がそう唱えると、呪符がそれに反応し、二人を取り囲む様に周遊し始める。

腕に更に力が加わり、イブは続きを唱える。

「ネカクイ……クマウ」

呪符は周遊速度をみるみる上げ、強い光を発し始めた。

「デトコテツデマ……レソラタシイ……パツシマ」

呪符が碎ける。いや、無数の光の集まりになったと言うべきである。周遊時の速度を保ちつつ、幾つもの光の帯が二人を包む。内側は、真つ白な光が形作る空間となった。

「……。あとは、念じるだけね」

イブは眼を開けて、そうこぼした。腕の力は弱まっていたが、まだ夢斗の背中に回されたままであった。

「念じる？」

「そう、念じるの。ワタシが魔界の事を頭の中で思い浮かべるから、夢斗は楽にしてて」

「うん。わかった」

そんなやりとりの後、彼女は再び眼を閉じた。口を小さく動かし、何かをつぶやいてもいる。

しかしながら、本当は今のイブの仕草など、夢斗にはどうでもいい事であった。一番の関心事は、これからどうなるという事である。それも魔界に着いてからどうこうではなく、このまま無事でいられるか、という不安だ。

夢斗がこれから先の事について、あれこれと考えているおり、脇からイブの声が響く。

「行くよ！」

次の瞬間、彼の視界は光そのもので埋め尽くされた。それに加え、途切れることのない振動と轟音が襲う。何度か飛行機の離陸を経験したことのある夢斗だったが、今回のものはそんなレベルではな

った。直下型地震か巨大隕石の落下のような、凄まじく桁違いなものだった。

「……………」

声を出すことも、指一つ動かすことさえままならない。数秒前の光の津波によつて閉じたまぶたも、開けることが出来なかった。ただ、背中と腰にかけて、何かがあたっていることだけは分かった。

(イブ……………)

心の中で彼女の名前を呼ぶ。度を越した衝撃の中で感じるイブの腕だけが、夢斗の頼みの綱であり、イブの存在の証明でもあった。時間にして数十秒だろうか。光も振動も轟音も、全てが消えた。外部からの強烈な干渉がはたりと消え失せたのだ。ただ、相変わらず、彼女の腕の感覚だけははっきりと残っている。

夢斗は恐る恐る、こわばったまぶたを開けてみた。するとそこには、見渡す限りの平原が広がっている。地上には浅緑、そして、天高く澄んだ青空。おおよそ夢斗の抱く魔界のイメージとはかけ離れていた。

「ここが……………。魔界？」

夢斗はぼつりとこぼす。

魔界と聞き、彼はてつきり地獄のような場所を想像していた。空は赤黒く、世界の果てまで荒野が広がり、あちらこちらに鬼や犬の類が群れている。そんなとてつもなく殺伐とした光景を、夢斗は思い描いていたのだ。

しかし、実際は違った。のどかで平穏。下手をすれば、羊の群が目の前を横切つてもおかしくなさそうな光景。戦争や魔獣の存在を疑いたくなるような世界だった。

「そう。ここが、魔界よ……………」

イブはゆつくりと噛みしめる様にして答えた。帰郷したことによる懐かしさから、それきり何も喋らなくなる。

夢斗は深呼吸を試みた。鼻で空気を取り込み、肺胞をゆつくりと膨らませる。問題なし。魔物の血が発する異臭や、予想していた

息苦しさなどは無く、いつも吸っている空気と何ら変わりなかった。むしろ、都会の空気より澄んでいるようにさえ感じる。

「本当に、ここは魔界なのか？」

にわかには信じることが出来ない。辺りをぐるりと見回すと、見渡す限りの広々とした草原である。空気も全くと言って良いほど、問題なかった。

戸惑いを隠せずにいる夢斗の表情を察してか、イブが口を開く。

「信じられないかも知れないけれど、ここは魔界なの」

「本当に？」

疑念はぬぐい去れないままだ。

「本当よ。……！」

その言葉の直後、彼女の目つきが変わった。柔和で優しい目つきが一転、鋭いものになる。

「どうしたの？」

夢斗がそう言うのとほぼ同時に、彼女は両足を肩幅より広めに取り、腰の刀の柄を握る。

次の瞬間、彼女は振り返り、目にも留まらぬ速さで抜刀。

「伏せて！」

紫電一閃。

イブに促される様にして振り返った夢斗には、状況が良く分からなかった。しかし、一つだけ分かった事がある。眼前で痙攣する生き物の肉塊と、舞い踊る鮮血。鼻を刺す例の臭気が、事実を彼の前に突きつけた。

「わかった？」

まだいるであろう残存の有無を知ってか、イブは臨戦態勢のまま言う。

「ここは、魔界」

イブの言葉と、夢斗の中の結論は一致していたのだ。

夢斗は半ば反射的に、研を鞘から抜き放つ。龍の彫刻の眼が、赤々とした光を発した。

第七章 第一話 魔界。そして、新たな戦いへと（後書き）

こんにちは、伊之口遅筆です。

これだけの文面を書くのに、一ヶ月弱掛かりました。

はい、ヘタレです。すみませんでした。

> (| |) <

第七章 第二話 美しさの対比

夢斗とイブの視線の先には、黒色の体毛をまとった獣がいた。短くもたくましい四肢と太い首が特徴的で、熊に良く似た体型である。それらはどれも牙を剥き出して、全身から殺気をみなぎらせている。夢斗はイブが抜刀したのを見、直ぐさま自分の剣を鞘から抜き放った。

その時、背後で何かが動いた。物音に驚き振り返ると、先程イブに斬りつけられた熊が、残る四肢を駆使して立ち上がるうとしていた。イブの一撃は、熊の右前脚を切断するに留まったようである。

「生きてやがる」

小さな悪態をついて、イブの方を見る。彼女にその事実を伝えようとしての事だった。

しかし、イブは対峙する残りの熊との戦闘に移っていた。右へ左へと素早く立ち回りながら、確実な一撃を決めるべく刀を振るう。その度に血飛沫が踊り、獣の放つ苦痛に満ちた咆哮が響き渡った。

一対四の戦闘を繰り広げる彼女に、これ以上敵を回すべきでは無い。今の自分にできる事といえば、彼女への負担を出来る限り軽減することである。

瞬時にそう判断した夢斗は、ふらふらと立ち上がる敵に狙いを定める。敵の眼光は未だ鋭く、かてて加えて未知なる脅威に少なからずたじろぐ。しかし、怯える自分を強引に奮い立たせ、剣の柄を強く握りしめた。

夢斗が覚悟を決めたその時である。深手を負った熊が全身の力を振り絞り、後脚だけで立ち上がったのだ。地上三メートルはあるうかと思われる、熊の巨体がそびえ立つ。苦痛に耐える為のものである。低く重たい咆哮が、周囲一帯の気を振るわせる。咆哮と同時に無事な左前脚を振り上げると、鬼気籠もる眼差しを夢斗を睨んだ。

「ヤバイ！」

夢斗が身の危険を察知するも束の間、熊の手は彼目がけて振り下ろされた。鋭い爪が、真上から襲ってくる。避ける術はない。いや、そんな時間を与えないほどの高速で、彼を捉えたのだ。

死、運が良くも重傷。魔界に来てから、まだ五分と待たずして命が潰えるか、あるいは限りなくそれに近付くのか。

「夢斗っ！」

夢斗が一瞬の思慮にふけっている最中、一陣の風が吹き抜けた。

それとほぼ同じくして聞き慣れた声。刹那、左肩に感じる一瞬の圧迫感。死と隣り合っていた夢斗が見た物は走馬燈ではなく、刀を構えて自らの頭上に躍り出るイブの姿であった。いきなり現れた彼女に、熊と夢斗は驚きを隠せずにいる。しかし、当の本人は両者に逡巡も憂慮も許さず、その代わりに熊には更なる苦痛を、夢斗には惨劇を見せつけた。鋭い電光の後に、鮮血が舞い踊る。

熊は胴体を斜めに深く斬りつけられた。その線上にある心臓は、半ば両断に近い形で斬られ、背中側に面する心筋のみが辛うじて繋がっている、という状態であった。噴水の様に血飛沫が舞い、断末魔の叫びが虚しく轟く。それを最後に熊は事切れる。えび反りの体勢で地面に倒れ、それきり動かなくなつた。

「終わり……」

彼女は静かにそう言って、刀の血を払い鞘に収める。緊張から解き放たれたのか、イブの肩から力が抜けたのが見てとれた。

「怪我はない？」

そう言って振り返る。此度もまた、彼女は鮮血にまみれている。

「ああ……。大丈夫……」

途切れ途切れに答える。イブは夢斗が無傷であることを知り、また一つ表情を緩めた。次第に緊張から解き放たれて行く様が、手に取るようによくわかる。少しずつ表情が柔和になり、自然な笑みが徐々に顔を覗かせていった。

「そう、よかつた」

まるで女神すら敵わないであろう笑顔を浮かべ、彼女はゆつくりと夢斗に歩み寄る。全身に飛び散った鮮血が、彼女の笑顔を引き立たせる対比のようであった。

二人が魔界に到着した、丁度その時の事である。二人の場所から途方もなく離れた神殿の祭壇に、瘦身の老司祭がいた。彼の眼前には、二人の姿をぼんやりと映し出す鏡が浮いていた。

「ふむ。さすがはイブ姫。この程度ではまだ緩いか」

右手を顎にあて、自分だけにしか聞こえない声でそう言った。

神殿内は薄暗く、祭壇に設置された幾つかの松明と、鏡から映し出される幽鬼だけが唯一の光源であった。

「まさか……、これほど早いとは……」

彼の背後にた数人の僧侶が、驚嘆の声を上げた。彼らは、自らが遣わした刺客に、もう少しましな働きを期待していたのだろう。それを証拠付けるかのように、祭壇の中央部には空になった巨大で堅固な檻が横たわり、それを松明の炎が照らしている。

「手荒い歓迎を、許したまえ。しかし、かの青年は一体？」

イブの隣にいる青年　夢斗の存在に疑いを隠せない。

その時、若々しいが横柄な声が辺りに木霊した。

「クソアマのカレシだよ。名前は、あいつが『ムト』とか呼んでたな。弱い割には、何かと目障りな人間だよ」

祭壇に設置された、壺状の祭器に腰掛けていた男がそう言った。

男の脇には松明があつたが、神殿全体が暗いせいかわ顔がはっきりしない。それでも、老司祭やその部下と比べると、遙かに若い印象がある。

「ほう、人間か。なるほど……」

老司祭は鏡の中の夢斗を凝視する。彼の知る限り、魔界に人間が来たという話は聞いたことがない。おそらくは物珍しさからだろう。彼の視線には、相手をたしなめる様な、品定めをしているように見えなかった。『人間風情が、何をしに来た』という侮蔑の念が籠

もっている。

「人間だと……」

「あり得ぬ。何故、人間が？」

「我々に対する挑戦か？ ふざけおつて」

部下の僧侶達が口々に悪罵を放つ。また、それと同時に、鎖と鎖が触れ合う様な音もする。老司祭はそれらを制するかの様に、左手をすつと横に出すと、掌を僧侶らに向けた。

「かの者達のやることは目に見えておる。ですから、焦らずとも大丈夫ですぞ、アルバ様」

有無を言わさぬ様な凜とした口調で、老司祭はそう言う。

その言葉の直後の事、男が動いた。松明にその顔が照らされ、全体像が映し出される。長身で筋肉質、そして色白の男だったが、全身から黒々と淀んだ殺気を漂わせていた。手には、金属製の三節棍が握られている。

「そうだな。けどよ、焦らなくてもいいって知ってても、どうしても我慢できそうにねえな」

アルバと呼ばれた男は老司祭の隣まで来た。鏡の中の二人を交互に見回し、両者を鋭い眼光で睨み付ける。

「では、アルバ様のご無念。私が晴らしてしんぜましょう」

老司祭はそう言うって左手を眼前に持つていくと、掻き消すようにその場から消す。

次の瞬間、イブと夢斗を映す鏡の視点が変わり、その片隅に瘦身の老人が姿を現した。

「やれやれ、喧嘩好きなじいさんだな」

アルバは皮肉たつぷりに、そして一抹の期待を込めてそう言い放つと、黙って鏡を覗き込んだ。

「何故、アナタが！？」

イブは明らかに取り乱していた。瞬時に抜いた刀を持つ手が、小刻みに振るえている。

「手荒い歓迎を許したまえ。本来なら、こして私が直々に赴くべきであつたな」

老司祭。ヒュエル・ガロは、ローブの袖口から何枚かの呪符を取り出した。

第七章 第二話 美しさの対比（後書き）

どうも皆さんこんにちは。遅筆野郎伊之口です。

本当はですね、今後の流れとかはちゃんと考えてあるんです。ただ、時間が、時間だけが足りません。あゝあゝ、精神と時の部屋欲しいなあゝ

とまあ、下らない愚痴はこの辺に致しまして、今後の展開に乞うご期待！

（なるべく早くします。ハイ、すみませんでした）

第七章 第三話 弱者への無情

夢斗とイブ。二人は突如空間から浮き上がるようにして現れたガロと対峙していた。ガロはローブの裾から取り出した呪符を扇状に持ち、鋭い眼光でイブを睨み付けている。一方、イブと言えばガロに対して殺意を露わにしていたが、同時に取り乱していた。姿勢が妙に勇腰であり、刀を持つ手が震えている。

「夢斗……」

彼女は俯き加減になり、小さく言った。

「アイツは危険。身を伏せていて。茂みの中なら、ある程度は安全よ」

辺り一面に茂る草は、彼の膝丈よりわずかに高いくらいであった。地面に這いつくばれば、身を隠せなくもない。

「だけど、イブはそれで良いの。オレだけ逃げて」

夢斗が自分の身だけが安全になる事に疑問を感じ、その事についてイブに訊く。

イブは直ぐさま返答する。

「アイツは、前に戦ったアルバと同じくらい強い。場合によっては、また本当の姿にならないと……」

彼女の眼には力がこもっていた。吸い込まれそうな程、深く鮮やかな真紅に瞳の色が変わる。気のせいか、皮膚の色も赤みを帯びている様な気がした。

そのおり、十数メートル離れた地点にて静かに佇んでいたガロが動いた。

「では、参ろう」

言つや否や、彼は走り出した。信じ難きはその速度である。老人とは思えない程の高速でイブに肉迫。直後、呪符を持ったまま右手を振るう。

「くっ……」

イブは瞬時に刀で防御する。ガロの手にする呪符は、どうやら鋭い刃物になっていようだった。しかし、夢斗にはそのからくりが解らず、かてて加えて、ガロの異常なまでの速さに驚きを隠せずにいた。

「ふむ、冴えておるな」

右手を振り抜くと、直ぐさま後方に進路を変えて二人と距離を取る。

「では、これではどうかな」

ガロの目つきと口調は、最初とは明らかに違っていた。目つきはまるで鷹の様に鋭く、その言葉には明確な闘志が込められている。刹那、彼は手にした呪符を全て宙に放つ。呪符は空中で回転しながらイブに迫る。鋭利な五つの刃が舞う。

「もっ……」

イブはしっかりと刀を構える。呪符が彼女に襲いかかるまでは、放たれてからほとんど一瞬であった。残像が見えそうな程の速さで、刀を振った。幾つもの細長い鋭敏な光の帯が揺れる。直後、放たれた呪符は例外なく真つ二つになり、風に流れ、舞う。

「これでどう……」

真紅の双眸がガロを刺す。

「なかなかであるな」

ガロは非常に冷静に言った。

「だが、まだ甘い」

その言葉が綴られている最中、新たな呪符が彼の手中に滑り込む。しかも、今度は相当な枚数だった。彼は呪符を目線の高さまで掲げると、まるでその枚数を見せつけるかの様に広げる。一部が欠けた円状に呪符を持ち、ゆっくりと手を下げてゆく。

「これでは、どうかな」

ガロの眼だけが呪符の上に見えた。皺の中で灰色の眼光が踊る。

直後、彼は呪符を手放した。しかし、それはイブに向かって飛来せず、彼の目の前で浮遊する。一枚一枚が放射状に規則正しく並び、

彼の背丈ほどの直径を持つ円形に展開した。呪符の作り出した円の奥に、ガ口の姿が見える。ただ、ガ口の姿を正面で捉えていたのは、茂みで身をかがめていた夢斗であった。

「止めて！」

ガ口の魂胆を見抜いたイブは、彼を静止すべく声を張り上げる。しかし、その程度で動じるガ口ではなかった。

「大事な者を失うとは、誰にとっても辛いもの。イブ姫には更なる苦痛を」

ガ口はそう言って両腕を水平に広げ、右腕は下弦の弧を描き、左腕は上限の弧を描く。同時に動き出した二つの腕は、彼の正面で交差して止まる。左腕の上に右腕があり、両方の掌は夢斗に向けられていた。

「さらばだ。人間の青年よ」

全ての呪符が火の玉に変わった。ガ口、呪符だった火の玉、その一直線上にあるものは、呆気にとられて動けずにいる夢斗だった。「止めてエー！」

イブのヒステリックな叫び声が木霊する。その言葉を後か前かは定かではないが、ガ口は交差させていた両腕を各々三六〇度回す。直後、火の玉が火力を増幅させ、一つの火の輪となった。火の輪が、ガ口の腕の動きに呼応するかの如く回り始める。直後、火の輪がいきなり爆ぜ、巨大な炎の渦となった。それは周囲の草を焼き尽くしながら夢斗に迫る。視界一杯に火炎が広がり、凄まじい熱線が伝わってきた。

「
イブの叫喚が響き渡る。その時の彼女の視界に移るものは、巨大な火炎の渦と、それに飲み込まれる夢斗の姿だった。しばらくして、彼女の頬を熱風が撫でつける。

火炎が消える。呪符の魔力が切れたのだろう。

平穏が相応しい形容の草原には、数体の熊の亡骸と、一筋の草の焼け跡。力無く立ち尽くすイブと、非常に落ち着いた表情のガ口だ

けがいた。

「どうかね」

ガロはイブの方を向く。

直後、イブのいた所に巨大な光が生まれる。

「貴様だけは……、必ず殺す」

爆発的な光の後、真紅の肌と翼を纏ったイブが、込められるだけ全ての殺意を込めてそう言った。双眸から溢れる雫。これ以上、イブを駆り立てるものはないだろう。彼女はこの時、怒りは悲しみをごまかす為の物だと知った。

「殺せるかな？」

いつぞや工場での挑発めいた口調だった。それがさらにイブの怒りを増幅させる。

「無理だろうな」

ガロは両手に呪符を持った。あくまで冷静を保っている。

「それでもと言うのなら、構わんよ」

直後イブは姿を消し、ガロの周りでは無数の紫電が跳ね回った。

第七章 第三話 弱者への無情（後書き）

ひゃっほう！ 今度は一ヶ月も待たせませんでしたよ。

つか、これはヤバい！ ガ口は鬼畜だし、イブはマジでブチキれるし、夢斗は燃されちゃったし……。フフ、五〇話という節目に相應しいハードな内容ですな。

読者の皆様、どうぞご安心を。寝不足から「行ってまえや！」とかいう狂った精神でむちゃくちゃな展開にしてみましたのはありません。ここでストーリーをぶち壊しにはしません。ましてや、自分を追い込んでこれから先がとんでもなく遅れる、なんて事もありません。これから先はですね、ぶっちゃけ私の好きな様にやらせて頂きます。どうかご了承下さい。

では、また。

第七章 第四話 奢り

澄んだ青空。地平線まで見通せる、緑一色の草原。それら全てが高速で流れ、今や景色として捉える事は出来ない程であった。

止まる事なく湧き出る怒り。抑えられそうにない本能の爆発。肉体と精神の隅々まで行き渡った殺意。

彼女の中では、夢斗を焼き払われた事による壮絶な悲しみと、それをごまかす為に作られた憎悪が複雑に絡み合い、殺意となって暴れていた。

「デエイ！」

両手で刀をしっかりと握ると、もはや獣との区別がつかない程の甲走った声とともに振り抜く。

ガ口はそれを呪符で防いだ。自身は全く動いていない。

「暴威、か……」

刀を防いだ呪符を爆発させ、静かにそう言った。

爆風がイブの頬を撫でる。至近距離の爆発であったのに、暖かい風が通り過ぎた様にしか感じなかったのである。

呪符一枚の爆発でひるむ事など、今の彼女にはありえない事だった。

爆風によって生まれた炎を掻き切るようにして、次の一刀が振られる。

「憤怒……」

刀身がガ口の体に触れる直前。どこからともなく、新たな呪符が飛来し彼の身をかばった。今度は爆発せずに、その場に止まってイブの刀を受け続ける。

「悲哀……。どれがどう動こうとも、私には勝てんよ」

私には勝てんよ、の部分が強調されていた。

「殺す。何が何でも、貴様だけは！」

濃く、深く、そして美しい二つの瞳がガ口を睨む。普通なら、そ

れの持つ強烈な殺気で命を落としかねないだろう。だが、老齡な司祭は顔色ひとつ変えず、

「やってごらんよ。さあ」

半ば嘲るように言った。

「ふざけるな！ 貴様に、ワタシの悲しみが解るものか！」

大声一喝。

再びイブの姿が消える。直後、またもやガ口の周囲で踊る紫電。

彼女は電光と化し、視認する事さえままならない速度で切り回す。

だが、ガ口には通じなかった。絶え間なく、そして無数に飛び交う斬撃の中で、彼は無傷なのである。どうやら、呪符によるものだろう。辛うじてだが、紫電より早く動く何かの姿が見て取れる。

しばらくして、イブが姿を表した。相当疲労が溜っているようである。呼吸は荒く、肩で息をし、顔中から滝のよう汗が吹き出す。

「その程度の力とは。全く、奢るのもいい加減にしたまえ」

まるで、子供に説教をする様な口調である。彼女の事を見ずに、視線を真っ直ぐどこかに向けたまま、淡々と叱す。

「そなたは自らの力量もわきまえず、すぐに怒りに身を任せて暴れる。知るべきだ。そなたの力では誰も救えない。そなたの望みは叶わない。そなたは弱い」

刀を地面に突き刺してすぎるイブは、ガ口の言葉が痛かった。

全て事実だ。何もかもを見透かされ言い当てられ、尚且つ受け入れる事しか出来ない自分がいる。

巨石がのしかかり、杭が心臓に食い込む様だった。疲労とその両方が作用し、全く動けない。

「そなたは元来、姫君である。姫君なら姫君らしく、深窓の花として生きるのがふさわしかろう。世の広さなぞ知らずとも良い。そなたの最大の欠点はそこにあるのだ」

否定できない。悔しいが全て事実だった。

彼女は過去の自分を思い出してみる。

まだ幼い時、衛兵の隙を見ては城を抜け出した。剣術を学びたい

と志願したのも自分からだ。他国の姫は、そんな事なししないと執事や侍女に諭された。それを振り切ってまで剣術を学んだりした。

それは、間違いなのか。いや。少なくとも、彼女の中では正解だった。何より、一人でもある程度は大丈夫と判断されるようになったし、その判断が夢斗との出会いのきっかけにもなったからだ。無論、夢斗との出会いは間違いではない。夢斗とのやり取りや生活で何度もわだかまりや行き違いが生まれたが、それを乗り越えて信頼出来る間柄にまで成長した。わずかな間に何度も自問し、『正しい』と結論付けた。

しかし、今やその結論は、過酷極まる現実に触れた事により激しく揺らいでいる。

夢斗と会えたが、死なせてしまった。巻き込んだ拳げ句、最悪の運命を辿らせてしまった。奢りによって調子づき、こうして辛い現実と対面している。

「間違い……、だったの……？」

「間違いだ」

「そんなの……」

認めない。認めたくない。認められるはずがない。

絶望的な現実と希望の見地から生み出される理想。両者の狭間で、彼女は揺れていた。

「辛いかな？」

これまでの展開から大きく外れた脈絡の無い問い。イブがそれに戸惑い回答に詰まる最中、ガロが有無を言わさぬ口調で告げる。

「辛いのなら、私がここで葬ってしんぜよう」

突如、周囲の草を切り裂き、イブに近付く何か。それが彼があらかじめ仕込んで置いた呪符であることに、彼女はすぐに気付いた。だが、呪符の速度は想像だにしない程早く、何より彼女の疲労が判断と跳躍を鈍らしている。

呪符が空を裂いて迫る。空中に躍り出た呪符は、彼女の口を覆うかのように貼り付いた。

(！)

一枚目が口に貼り付いた直後、足を強烈な圧迫感が襲う。

彼女の足の甲には逆U字型に曲がった呪符が枷となり、両端を地面に食い込ませていた。両足に一枚ずつ、だが、一枚分とは思えない強烈な圧力。

声が出せない。足も動かせない。自由が利かない。気付けば刀を保持している方の腕に、呪符が深く食い込んでいた。

イブは痛みによって腕の状態を知る。しかし、もう遅かった。呪符で縛られた彼女を目の当たりにし、ガ口は新たな一手を刻んでいたのだった。何枚かの呪符が錘の様に丸まって、彼女の心臓を真っ直ぐに狙い澄ます。

「さらばだ、真紅の姫君よ」

錘が左胸に向けて飛んでくる。残像が見えるほどの速度で迫り、距離は刻々と縮まる。

(嘘よ！)

こんな所で死ぬなんて、嘘としか思えない。

蘇る今日この瞬間までの記憶。死を悟った時に見える走馬燈。時間がやけに遅く感じる。

目の前には呪符の錘と、ガ口と

何かが彼女の頬を撫でた。風だ。何の？ 自然と吹きすさぶ風ではない。もっと、何かが動いて吹くような。

(え……！？)

信じがたいことであった。錘の真横を何かが貫いたのだった。比喩ではない。真横から一撃で。

(誰？ 何？)

突如現れたそれ。その外観を捉えるのに、彼女はずいぶんと時間を要した。

筋骨隆々。がっしりとした長身。褐色のたてがみ。側頭部から生える二本の猛り狂う角。隻眼。重厚な大槍。人型の牛がいたらこんな感じだろう。灰を基調とした胴衣に身を包んだそれを、彼女は良

く知っていた。

錘は大槍の突撃により力を失い、ぱらぱらと宙を舞う。もはやそれに魔力の類は無く、それこそ符本来の姿に戻った様だった。

「何奴……」

ガロは明らかに驚いてはいたが、身じろぎひとつしなかった。灰色の瞳で、真っ直ぐにそれを見据える。

「オズ……？」

いつの間にか呪符ははがれ、彼女はそう呟くことが出来た。

「姫、お久しぶりです」

それ オズワルド・バンフはそう言って微笑むと、大槍を握りしめガロに向かって行った。

第七章 第五話 武人オズワルド

イブを背にしたオズワルドは、大槍を構えてガ口と対峙する。

「そなたは……。アリンズ帝国の生き残りか？」

「はい」

険しい目つきでガ口を睨んだまま、緊張を解くことなく答えた。

「ふむ、その容姿、その眼差し。かの大將軍、アーノルド・バンフを思い出させる。いやはや、彼の者は強かった」

ガ口もまた、一切緊張を解かずになんと言った。

「父上を知っておられるのですか」

目の前で対峙する相手が、自分の父親の事を知っていることに驚く。言葉は思わず口から飛び出した。

（まさか、父上を知っているとは）

「左様。四〇年前まで、我らの名を知らない者は居なかった。かつては彼の者と共に、鎬を削ったものだ」

「……。貴方はもしや、ヒュエル・ガ口？」

オズワルドは、幼き日に生前のアーノルドからガ口の事をよく聞かされていた。ソドルのヒュエル・ガ口という男は強い。戦場で相見える事があれば抜かるな、と。

今は亡き父の言葉を述懐し、改めてガ口と向き合った。

「左様……。そなたが懐かしき戦友の子息だとは思わなんだ」

両者の間を支配する緊張が最高潮を迎える。視線と視線、闘志と闘志、殺意と殺意がぶつかり合う。徹底的に己の武を追求した者のみぞ知る領域であった。

「では、参ろう」

おもむろにそう言って、ガ口は姿を消す。次の瞬間、オズワルドもまたおもむろに槍を突きだした。理由は明確だ。姿を消したように見えたあの姿を捉えたからである。

高速で突き出された槍の穂先は、呪符がしっかりと受け止め無力

化された。オズワルドは直ぐさま槍を引き、今度は大振りで薙ぎ払う。槍の軌道上に生えていた草が均一に刈られた。

だが、刈った草むらの中にガロは居なかった。直後、空中から降り注ぐ火の雨。垂直に跳躍したガロが、オズワルドの真上から呪符を放ったのだ。

自身の身体に火球が触れる直前、オズワルドは槍を掲げ地面とは水平に旋回させる。旋回する槍によって放射状に発生した風が、周囲にの草を撫でつける。火球は槍に触れて四散し、火の粉を散らしながら燃え尽きた。

火球が燃え尽きると同時に、ガロは次の一手を打つ。片手に五枚ずつ呪符を持つと、それらを全て刃に変えて上空から襲いかかる。それこそ、獲物を仕留める隼の如く。

火球を防いだ事により一瞬の満足感に浸っていたオズワルドは、僅かに判断に曇りが出た。とっさに槍を頭上で横向きに構える。

直後、火花と金属音。オズワルドの槍と、ガロの呪符とが噛み合う。

(これは……!?)

「ふむ……」

互いの得物越しに睨み合う二人。一分の隙も一瞬の油断も許されない世界が、ここでは繰り広げられていた。

「流石は彼の者の子息。一筋縄では行かぬ事は解っていたが、まさかこれほどとは」

ガロはそう言って跳躍し、オズワルドと距離を取る。

「貴方の武もなかなかでおられる。全力で参りますぞ」

オズワルドが更に強く槍を握りしめる。全身を躍動させての全力疾走。ガロとの距離は見る見るうちに縮まって行く。

正に闘牛の如き突進。殆ど一瞬で両者の距離はゼロになった。それとほぼ同時に、オズワルドが槍を引く。穂先の先端は真つ直ぐガロに向けられていた。

「覚悟！」

音速を越えんばかりの突き。空を裂く音が、突き出た槍の像よりも僅かに遅れて響き渡った。

ガ口は瞬時に呪符を展開させ、自身の右手をかざして盾を作った。盾が完成した直後に穂先が激突し、大きな衝撃が生じる。

槍は盾を瞬時に貫通はせず、盾を少しずつ削るように食い込んで行く。その光景は正に、『矛盾』の一説を彷彿とさせた。余談だが、盾と矛との闘争は、得てして矛に分があるのが定石である。それを裏付けるかの様に、穂先が呪符を一枚一枚押しつけるようにして、じわじわと前に進んで行く。

「ほう……」

ガ口はこめかみに一筋の汗を浮かべ、呪符に意識を集中する。この時、彼の顔から初めて余裕が消えた。

「このままでは、まずいな……」

呪符への集中を切らず、ゆっくりと次の一手への布石を進める。

新たな呪符を出そうと、空いた左手を裾の中に引き込む。

事の進展はその瞬間だった。槍が盾を貫いた。盾を貫いた穂先は、抑圧されていた力を一気に解き放ち、弾けるようにガ口の左胸へと突き進む。それは誰にも止めようのない一撃。貫かれた盾は、先刻の錘よろしく、呪符本来の姿となってあたりで舞う。

「不覚！」

ガ口は双眸を大きく見開いてオズワールドを凝視する。その時には既に、オズワールドの槍がガ口の胴体すらも貫いていたのだった。

「むう……………」

ガ口の腹側から入った槍は、真っ直ぐに彼の身体を貫いて、背中側の空間へと顔を出す。それと時同じくして、大量の鮮血が舞い踊る。その多くは傷口からのもので、周囲の草をとどころを赤く染めた。

「見事……………」

ガ口はそう言って、槍で貫かれたまま地面に崩れ落ちる。地面に片膝をついたとき、大きく咳き込んで吐血。彼の足下には、赤々と

した液体が浅い水たまりを形成していた。

血の水たまりに横たわるガ口。彼の痩せた身体は、倒れた拍子に完全にロープの中へと収まった。漆黒のロープが鮮血の中に浮かんでいる。

「オズ！」

傍らで戦況を見守っていたイブがオズワルドに駆け寄る。消耗しているのは確かだったが、走る姿には微塵の疲れも感じさせなかった。

オズワルドは槍に付着した血液を払い、穂先を下にして草むらに伏したガ口を見詰める。その表情はどこか不満げで、更に憤りも匂わせていた。どう見ても、今の戦いに悔いがあった様にはしか見えな。一言で言えば、浮かない表情だった。

「倒したの？」

石突きを地面に付け、その場で慥然と立ち尽くすオズワルドにそう訊く。

「いえ……」

明らかに戸惑いを隠せない事が見て取れる口調で短く答える。

「どうして？」

彼女には状況が解らなかった。

彼はガ口を確実に仕留めたはずでは無いのか。現に、ガ口が倒れる光景も見たというのに。

自身の中で何度も熟慮してみるが、それでもどこか不満げなオズワルドの真相が掴めずにいた。そんな彼女に、オズワルドが告げる。「やられました。あれは罠です。本当の姿ではありません」

オズワルドはそう言って、地面に横たわるガ口を指差した。

「……」

ガ口の死体は微動だにしなかった。イブは不審に思い、警戒心を解くことなくその死体を凝視する。

しばし、その場が沈黙に包まれた。なかなか真意を解せないイブに業を煮やしたのか、それとも単なる親切心からかは不明だが、オ

ズワルドはローブを穂先に引っかけると、そのままゆっくりとずらす。ローブの中身が露わとなった。

「！これは!?!」

「やられました。おかしいとは思っていましたが、一合目を打ち合った瞬間です」

そこには痩せた老人の死体は無かった。変わりに大量の呪符と、酷いくらいに粗末な造りの木偶人形がそこにはあった。ローブに包まれた木偶人形。それには幾重にも呪符が貼り付けられてはいたが、それ以外には一切の装飾も工夫も無かった。むしろ、木偶人形と言うよりは木ぎれの集まりと言った方が相応しいだろう。安い木ぎれに申し訳程度に針金の間接を付けただけの粗末極まりない物だった。オズワルドは、ガロが本当の姿で無いことを知っていたのだ。武器と武器が直接接触れ合った瞬間であろう。武人同士にか解らないような、微細な息遣いや熱といったものが伝わらなかったのだろう。彼は、それを一瞬で感じ取ったのである。

気が付けば、二人が血だと思っていた物は消えていた。これも呪符に込められた魔力により作り出されたものだったのである。

「……。ワタシは……。こんな木偶人形に……。夢斗をツ……」

その場に崩れ落ちたイブは、深い哀しみに暮れる。

こんな子供騙しによって夢斗を葬られ、あまつさえ自らの死さえも感じてしまったのか。そう思うと、計り知れない脱力感と無力感に苛まれた。

「……………」

オズワルドは哀しみに暮れるイブの姿を、ただただ見守る事しか出来なかった。

第七章 第六話 隠れ家（前書き）

以前は大変なご迷惑をおかけしました。本日より執筆活動を再開しますので、どうかよろしくお願ひします。

第七章 第六話 隠れ家

「イブ様……」

「？」

「お怪我をされている様ですが、大丈夫ですか？」

イブの右腕には、先程ガ口と戦った時に負ったものと思われる傷があった。呪符が深く食い込んだせいで、今も尚止めどなく鮮血が溢れ、彼女の衣服を赤々と染め上げている。

イブはオズワルドに諭され、始めて自身の怪我に気付いたようである。一旦傷口に視線を向け手をあてると、直ぐに焼け跡を見詰める。

「この程度の傷……、彼の痛みには比べれば……」

相当な苦痛であるはずなのに、イブは表情を一切変えなかった。

それだけ夢斗を殺されたショックは大きく、彼女に痛みを痛みと感じさせる余裕を与えなかったのである。

ガ口が去ってからどれだけ経ってからだろうか。オズワルドが重々しく口を開いた。

「我々の隠れ家にご案内します」

「隠れ家？」

オズワルドの言葉を復唱する形で、イブは応える。

「そうです。イブ様が旅立たれてからは、我々はそこに身を潜めておりました。例の魔導師の家の近くです」

「わかったわ……」

イブは草原の焼き払われた部分を名残惜しげに見詰めてから、オズワルドに付き従われる用にしてその場を後にした。

薄暗い神殿。深淵に葬られた祭壇。闇をばかすようにして、ガ口が姿を現す。その表情には若干の疲労感が伺えた。息をわずかに弾ませ、俯き加減でつかつかと歩く。

彼が戻って来るなり、辺りに散らばっていた僧侶達が動いた。彼の得物である狼下棒を預かる者、彼の汗を拭く者。やることは様々である。

「ようジジイ。アンタ本当のワルだな。まさか人間を焼き殺すとはよ。嫉妬か？ いい年して情けねえな」

ガロが帰り着くなり、アルバが根も葉もない罵り文句を吐き出す。アルバはガロが戦っている光景を、ガロの部下である僧侶達と共に祭壇ですつと眺めていたのである。

「後味ワルくねえか？ どうよ？」

「良いとは言えません……」

ガロはアルバの隣まで来ると、振り返って祭壇を仰ぐ。

祭壇の幽鬼は、泣き伏すイブとそれをかばうオズワルドの姿をしてゆらめいていた。

草原の真ん中に一本の道が見えた。そこを彼に付き従って歩くと、そうやらどこかで見たことのある道であった。そのうち道の両脇に森が広がり、白昼といえども鬱蒼とした暗がりにも包まれる。

（確か、その時ワタシはとても急いでいた。その時、オズは怪我を負ったような）

「もうすぐです。もうすぐ隠れ家に到着します」

オズワルドが言った。その声にはイブを気遣うような優しさと同じ時に、励まして勇気づけるような勇ましさがあった。

「……」

イブは答えなかった。答えられなかったのである。

最愛の人間、夢斗を目の前で失った哀しみと、それ阻止する事が出来なかった己への無力感。その二つに打ちひしがれ、彼女は閉口の一本道をたどっていた。そう、丁度二人が歩いている暗がりの中の道の様に。

程なくして、二人は例の魔導師の家に到着した。閑散とした郊外にひっそりとたたずむ一軒家である。だが、首都が陥落し敵軍に侵

攻された今となつては、廃屋と呼ぶに相応しい有様だった。部分的に焼け落ちていたり壁に大穴が空いていたり、とても人が隠れ棲めるような建物ではない。

「……。ここに棲めるの？」

「いえ、ご心配なく。とりあえず中へ」

オズワルドは辛うじて立て掛けてある大きめの板切れ　おそらくは扉であった物を持ってそれを端に寄せると、つかつかと大股で屋内へと突き進む。イブも彼に従う形で中に入る。

屋内の様相も外観と対して変わらない状態であった。屋根はほとんどが焼け落ち、そこから青空を拝めることができる。

「……」

生活感など微塵にも感じられない光景に、イブは声を失った。

「首都が陥落してから敵軍は市街地から郊外に至る、それこそ国土の隅々まで瞬く間に侵攻し、特に魔導師の家や兵営といった後の脅威になりうる全ての建物は、徹底的に破壊されました。この家は郊外の、それも相当見つけづらい所にありますので奇跡的に残りましたが、他はもう跡形もないでしょう」

「そうなの……」

「はい。イブ様、そろそろです」

「そろそろ？」

「はい。彼にはもう見えています」

イブにはオズワルドの言葉が不思議でしようがなかったが、その疑念はすぐに解けることとなる。二人を白い光が包み、辺りの景色が次第にぼやけて行く。段々と静寂が存在を主張する。

「これは……!？」

イブには既に解っていた。これは次元転換の一種である事を。

事の真実を察知していた彼女が目を開けると、そこは見慣れない場所だった。

どこかの洞窟内であることは解った。湿っぽく冷たい空気と、こ

つごつとした岩肌が辺りを囲う空間。洞窟内は明るく、所々にまばゆい光源が設置されていた。それほど居心地の悪い場所では無さそうだ。

「ここが本当の隠れ家なのね」

周囲の状況を把握し、それが正解であることをオズワルドに確認する。

「はい。例の魔導師が前々から準備していた様です」

オズワルドは淡々と事実を語った。

そのおり。

「イブ。待ってたよ」

彼女の耳が聞き慣れた声を感じ取る。

「え？」

イブが慌てて声のする方向を向く。

そこにはガロに殺されたはずの夢斗が立っていた。

「なんで？」

「ようこそ姫様。歓迎いたします」

戸惑うイブをなだめるかの様に、夢斗の後ろから誰かの声があった。

「お久しぶりですな。ご無事そうだなにより」

声の主は例の魔導師だった。

第七章 第七話 衆寡敵せず

冷え冷えとした空気の洞窟に、四つの人影がある。

「アナタは、あの時の魔導師ね」

「そうです。まずはお怪我の治療を始めます」

そう言って、魔導師は両手をイブの傷口にかざした。すると、魔導師の手から乳白色のオーラが放出され、彼女の右腕を包み込む。

「終わりました。傷は塞ぎ組織の一部も補修しました。あとは姫様の持つ魔力で充分です」

治療が終わり魔導師が手を引つ込める。イブの傷はある程度回復した様で、彼女の顔色も少しはましになっていた。

「ありがとう」

「いえいえ」

魔導師が一体何者なのかは、外見からでは全く予測し得ない格好である。全身はすすけた黒のローブで覆い隠され、頭部を包むフードは、その中に控える主の顔を完璧に秘匿している。時折目と思しき二つの光が覗く程度だ。声色や口調からは、魔導師が若いのか年老いているのか、男なのか女なのかさえ不明である。唯一わかり得る事は、背丈が夢斗と同じが少し高いかということだけである。

「彼と剣は私がここまで飛ばしました。ご心配なく、彼も剣も無傷です。それから、剣は魔力を充填するため私の部屋にあります」

と、魔導師は夢斗に視線を向ける。

「そうだったのね。一時は本当にやられたのかとばかり……」

イブは安堵の色をちらつかせ、自分の足下に目を落した。

飛ばした、という事は先程の様な瞬間移動を瞬時に行ったのである。しかし、次元転換や瞬間移動の様な魔術は、事前にはっきりとした準備が必要で、かてて加えて術者の強力な魔力と練度も不可欠である。その高度さは、魔界の姫たるイブであっても気安く出来る事ではなく、ましてや瞬時にそれも遠く離れた場所から行うなど、

彼女にとってしてみれば不可能に等しいのである。

「びつくりしたよ。炎が迫ってきたと思ったら、目の前が真っ白になって、次にはここにいたんだ。俺は本当に大丈夫だよ」

魔導師の言葉を補う様にして、夢斗が口を開く。声からは生気が感じ取れ、どこも負傷している様子はない。

彼の言葉からも、あの一瞬で次元転換が行われた事が窺い知れた。「お二人がこちらに来られてからの事は、全てここで見ておりました。もちろん、彼が殺されかけた事も、姫様にご乱心なされた事も」
「あれは……。その……。夢斗が殺されたとばかりだったから……」
「ええ、心得ております。ご心配なさらずとも、これは他言無用に致します」

「他言無用？ 他に誰か生き残りがいるの？」

魔導師の言葉が妙に引っかけり、イブはすぐさま問いただす。わずかながらに声が弾んでいたが、本人はそれに気づくこともなかった。

「はい。ほんのわずかではありますが。私どもと同じ魔導師や負傷した兵士などが、まだどこかにいるはずですよ。必要ならばここに呼び寄せる事も出来ます」

「母っ……。王族や貴族の生き残りはいるの？」

母上、と言いかけて慌てて言葉を言い換える。国はすでに滅んではいたが、彼女にはまだ一国の姫としての誇りと威厳を保ち、私情を見せずに凜としている必要があった。

「残念ながら……。王族や貴族はもうおりませぬ……。首都が陥落してまもなく、王族と貴族は全員拘束され処刑されました……」

言いよどみながら、魔導師は事実を告げる。しかし、それは感情の所為ではなく、むしろイブの顔色の陰影を伺いながら話しているくらいがあった。

「……。そう。わかったわ……」

そう答えてうつむきながら、彼女の顔は深い悲しみと激しい怒りが同居した様な表情を見せる。寂しく伏せた眼には悲愴の一色だっ

だが、拳は堅く握られており、それは苛烈な決意の宿った瞬間でもあった。

あの廃工場でガロに告げられた事実。まだそれを事実として受け止めることが出来ず、もしかしたら、ごく少数ながら生き残りがいると信じていた。しかし、絶大な信頼を置いている味方の口からも同じ言葉を聞き、心の中のわずかな希望は跡形もなくうち崩されたのである。

「イブ……?」

「ごめんね。ちょっとだけ……」

そう言って夢斗にもたれかかる。彼は沈痛な感情に飲み込まれたイブを、優しく受け止めて抱きしめる。

「拙者とイブ様以外の戦力は?」

オズワルドは場の空気を察し、魔導師に歩み寄って小声で訊いた。「今すぐ戦える者は一〇〇人もおりません。あと一週間待って頂ければ、もう二〇〇名は戦える状態になるそうです」

「支援は? 戦力になりえる魔導師は貴方だけですか?」

「何名か私の後身の者がいます。しかし、いかんせん戦闘経験に乏しく、おそらく足手纏いになるのが関の山かと」

「……」

あまりに乏しい戦力に、オズワルドは絶句した。二〇〇名にも及ばない戦力では、ガロ率いる敵国の軍には遠く及ばない。戦ったところで、圧倒的な兵力差の前に蹂躪される事は、火を見るより明らかである。しかし、すでに滅んだ国の残存勢力とはそんな物だった。「敵は? 敵の戦力ってどのくらいあるの?」

自分の胸の中で忍び泣くイブの背を撫でつつ、今度は夢斗が魔導師に訊いた。

「断言は出来ませんが、我が国を襲った時の戦力は兵士七〇〇〇〇〇、魔獣一五〇〇〇頭です。また二〇〇〇〇の魔導師が後ろに控えています」

「うそ……。滅茶苦茶じゃん、そんなの……」

多勢に無勢、という次元ではない。ここまで開きがあると言つことは、もはや抵抗しても意味がない。それは、戦争に関する知識の無い夢斗にとつても、容易に解り得たのである。

「……。もし復讐や反撃をお考えなのでしたら、それは無駄です。我々魔導師達も、これ以上隠れ住まうのは止めて、素直に降伏しよう、という結論に至りかけています」

まだ闘おうとするオズワルドの心中を察し、魔導師は口を開いた。「降伏……」

敵の前で武器を置くという道の名を聞き、オズワルドが拳をわなわなと震わせる。

「オズワルド殿はお父上やご兄弟を殺され、ソドルへの怒りがある事も分かりますが、もう無駄以外の何物でもございません。それとも、まだ『武人の誇り』の旗を掲げて、圧倒的な力の前での犬死にを望まれますか？」

「こうなってしまうては、戦わずに生きることが武人の恥。死を覚悟し戦い、その中で散るのが、誠武人の常なのです」

「まだそんな事を言っているのですか？ そんな事をして報われるのは貴方一人なのです。すでに敵は引いている今、降伏すればまだ生きる延びる望みはあります。だが、そこで貴方が抵抗すれば、生き残ったの我々の命も危ういのです」

ここに来て、魔導師は声色に感情を見せなかった。口調をこれまでと一切変えずに淡々と、理路整然と言葉を綴る。

「このままなら助かる命を、貴方の無駄なあがきで棒に振られるおつもりですか？ 残念ながら、私をはじめとする魔導師や生き残りの兵士は、そこまでお人好しではありません。生き残った兵士達も、涙を飲んで降伏を選んだそうです」

「……」

生き残りの兵士の苦渋な決断の存在を知り、オズワルドは反論する事が出来なかった。得物を持つ手に一層の力を込めると、そのまま振り返って引き下がり、洞窟の奥へと姿を消してしまった。

「お二人もお疲れの事でしょう。この奥に空いている石室がありますので、そちらでお休みになられて下さい。物資などは後ほど運びます」

魔導師はイブと夢斗にそう告げると、早々に自分の部屋へと姿を消した。

「イブ、歩ける?」

「……うん」

第七章 第八話 拘泥

魔導師に言われた通りに進んでいくと、そこには二手に分かれた通路の先に、二つの石室があった。木製の扉が設置されており、その先は独立した個室になっていた。

イブは戸口で夢斗と別れ、今は一人石室内で休んでいる。

彼女には大きな懸念があった。それはどのようにして『転生の儀』について、悪魔から人間になると言うことを魔導師に切り出すかである。

オズワルドにはまだ切り出しやすい。もとより武人で闘うことをいとわないし、何より彼はイブに対して協力する姿勢を見せてくれるだろう。それに、彼の協力無しではとても『転生の儀』など出来るはずもない。

問題は魔導師である。彼は既に腹を決めている様子で、これ以上闘って犠牲を出すことに猛反対するだろう。ましてや、その戦う目的がイブ自身の個人的なものなら。個人的な理由が人間になる、という事だという事を知れば。そして何よりの皮肉は、魔導師の力もイブの『転生の儀』をするために必要不可欠な事だった。

「どうしたら良いの……」

イブをはじめとする悪魔と、夢斗の様な人間。両者の種族の中で優劣はあるが、基本的に悪魔は人間より強いのである。悪魔の全てがイブの様に剣術に長けていたり、魔導師の様に魔力が強いとは言わないが、それでも、並の人間では到底悪魔には敵わない。更に悪魔の一部には人間を『劣った生き物』と認識して見下している節がある。仮に魔導師がその思想を主としているのであれば、協力させる事は難しい。

更に、イブは悪魔の中でも高貴な存在である。魔界の一国の姫になったと言うことは、相当上級の悪魔なのだ。そんな彼女が、人間になると言うことは、国王が亡命するなどといった事とは比べ物に

ならない一大事なのである。

多かれ少なかれ説得する必要がありそうだ。何とかして協力させなければならぬ。しかし、どうやって

悪魔と人間との関係。上流階級の悪魔が、人間に成り下がると言うこと。その事をどうして魔導師に伝え賛同させるか。数々の関門がイブの前に立ちちはだかり、彼女の頭を重くした。

イブが思案に暮れているそんな時、誰かが扉をノックする。

「イブ。入るよ」

声の主は夢斗だった。

「うん、入って」

彼女がそう言うと、扉が開き向こう側から夢斗が姿を現す。

「あの魔導師の人……。なんかもう闘わないみたいだけど、どうする？」

夢斗の言葉。それは今の今まで彼女が考えていた事だった。

「彼の力が無くては、絶対に人間にはなれないわ。『転生の儀』は次元転換以上に高度だから」

「何とかして協力させなきゃ、なんだね」

イブは無言でうなずく。確かに夢斗の言う通り、何が何でも協力させなくてはならない。

「そう言えば、あの牛の人は？」

オズワルドの事である。これまで鬼や熊、更にはイブの本当の姿を目の当たりにしている夢斗にとって、そんなに驚く程のものでも無いが、それでも彼の正体は気になるのだろう。

「彼、オズワルド・バンフはアリンクス帝国軍の最高司令官の三男で、ワタシの近衛隊の一員でもあったの。ワタシを逃がすために最後まで戦ってくれて、それからはどうなったかは解らなかつたんだけど、でも、生きてて良かった」

「だね。強いみたいだから」

恐らく、夢斗も魔導師と一緒にガ口との戦いを見ていたのだろう。

「問題は、魔導師ね」

先行きは依然として暗いままだった。

「はあ。でも、今日は本当に……」

ため息をつき、何かを言いかけたまま言葉が切れる。

「どうした？」

「何か……すごく疲れた……」

覇気を感じられない声が出た。それは無理もない。次元転換に加え、本当の姿となってガ口と死闘を演じたのである。疲れない方がおかしいだろう。

「ゆっくり休みな。イブは頑張り過ぎる」

「うん……」

イブは夢斗に頭を優しく撫でられ、遠のく意識の中で彼の声を聞いた。彼にもたれかかると、安心と疲労感に一気に全身を包み込まれる。

「お休み、イブ」

イブは夢斗にそっと床に寝かすと、部屋を後にしようとした。

そのおり、扉が何者かによって叩かれる。

「誰だ？」

「魔導師です。お食事を持って参りました」

「入って」

「失礼します」

そう聞こえると、静かに扉が開き、魔導師が室内に足を踏み入れる。

「姫様はもうお休みになられたようですね」

「え、ああ」

床に横たわるイブを見て、彼がそう言い放った。

「是非もない事ですね……」

魔導師は食事の乗った盆を床に置くと、どこからともなく毛布と枕を取り出す。毛布を彼女にそっと被せた後、頭をゆっくりと持ち上げて、その下に枕を割り込ませた。

「一つよろしいでしょうか？」

作業を終えた魔導師は、屈んだ状態からゆっくりと立ち上がりつつ言った。

「何です」

「貴男は人間のようですね。何故人間が姫様と共に魔界に？」

「それは……」

応えようとして言葉に詰まる。イブを人間にするための付き添い、などとは口が裂けても言い出せない。先程まで、イブとその事について話していた矢先なのだから尚更だ。

「悪いようにはしません。なるべく早くに人間界にお帰り下さい。

昨今のアリンズとソドルの情勢は、人間の介在する所ではありませんので」

ぴしゃりと言い切って、魔導師は部屋を後にする。

自らの心中を見透かされた様な錯覚を覚えた夢斗は、俯いたままずいぶん長い事その場で立ち尽くしていた。

第七章 第九話 男

イブは、洞窟の中を駆け巡る慌ただしさと、自身が感じた胸騒ぎで目を覚ました。

身を起こすと、固い床に直接寝ていたせいか、背中や腰にひどい違和感があった。彼女はいつの間にか被さっていた毛布をはねのけ、伸びをして違和感を取り払うと、足早に部屋を後にする。

部屋を出てすぐに、イブは異変に気付いた。

「これは！」

その異変は、隠れ家の中でも一際開けた場所にいた。洞窟の中でありながら広々としており、ドーム状に開けた空間。その空間の真ん中に、満身創痍で仰向けに横たわっている男がいたのだ。

その負傷者を見守る形でオズワルドが佇み、魔導師が治療にあたっている。

「イブ……」

うるたえていた夢斗は、イブが現れるのを待ち望んでいたかのようによく言う。彼の声はひどく慌てていて、言動に落ち着きがない。

「何があつたの？」

夢斗にそう尋ねる傍ら、眼前に横たわる男に目を落とす。

魔導師の治療によるオーラが全身を包んでいて良く見えないが、男のなりや容態がわずかにうかがい知れた。着衣はズタズタに引き裂かれていて、布きれが辛うじて引つかかっているといった状態である。また、怪我の度合いも酷いようで、全身の至る所から出血が見られる。息は今にも途切れそうな程弱々しく、生気がほとんど感じられない。

「わからない……。ただ、いきなりこの人が現れたから……」

「お静かに」

夢斗の言葉を遮る形で、魔導師がぴしゃりと言い放つ。ややあつて、治療に専念していた彼は、男の胸にあてがっていた手を離れた。

それと同時にオーラがかき消え、それに隠れて見えなかった姿が、今度はありありと眼前に現れる。

「計……画……」

男が言葉を発した。途切れ途切れの消え入りそうな掠れ声だ。

魔導師は何も言わず、静かに次の一声を待つ。

「ソ……ドル……。ガロが……。おそろし……」

男の唇がもそもそ動くたび、風の流れるようなしわがれた声がある。苦しそくに一言ずつ絞り出す様は、見た目以上に痛々しく見えた。

「落ち着いて下さい。貴男は何を見てきたのですか？」

魔導師は男の額に優しく手をあて、再びオーラを放出した。

「新たな……侵略」

まるで岩と化したと思われる程、緩慢に動く男の唇。絶え絶えの言葉を必死に綴って行った。

「ガロ達……。人間界に……。攻め込む……」

消え入りそうなかすれ声で、信じがたい事実が告げられた。

一同はその告白に驚愕し、一様に言葉を失う。

「止められるのは……。今だけ……」

激しく痙攣し、制御するにも苦になつた腕を伸ばし、必死に魔導師の顔に触れようとする。男の手はフードの中に向かって、這うような速度で進んでいく。恐ろしささえ感じるほど、ひどく緩慢な動きだった。

「解りました。貴方の命は無駄にはしません。ご苦労様でした」

魔導師は男の震える手を両手で握り、フードの中に引き込む。彼の痙攣が魔導師にも伝い、フードが小刻に揺れた。

彼が苦しさをから逃れようとしているのか、魔導師に未来を託そうとしているのかは、その場にいた者には一切わからない。痙攣の規模が大きくなり、間隔が段々と不定期になっていく。そして、一度全身が跳ね上がるほど大きく痙攣してから、謎の男は息絶えた。

「……………」

物言わなくなった男は、宙の一転を見詰めたままそれきり動こうとせず、緩慢なあの動きさえも見せなくなった。

第七章 第十話 分かりやすい結果（前書き）

少し長くなりました。しかし、全体とのバランスを考えると是非もない結果なので、どうかご了承下さい。感想などありましたらよろしく願います。

第七章 第十話 分かりやすい結果

「人間界を……、侵略する……!?!」

あまりに突然な現実を前に、夢斗は驚きを隠せず後ずさる。この中で唯一の人間である彼ならば、それは当然の反応だろう。

「やはりでしたか。是非ありません」

魔導師は、握っていた手を亡骸となった者の胸に返した。

「やはりって、どういう事なの?」

イブは魔導師を問い詰める。

魔導師は取り乱す気配も見せず、ゆっくりと立ち上がり一同を瞥見した。

「ご説明します。しかし、その前にまず……」

魔導師はそう言つて、一度奥の自室に引つ込む。しばらくして、彼は手に大きな麻の袋を持って現れた。

その後、夢斗を除く三名で亡骸の処理を終えると、魔導師と対面する形で一同が座る。全員の準備が出来たと踏むと、彼は重々しい口調で真意を語り始めた。

「彼は私がソドル内部に送り込んだスパイでした」

そう言つて、任務の果てに殉じた者を一瞥する。今は麻袋に納まつており、人型の膨らみと化して横たわっている。

「彼は私の部下で、ソドルがアリンズに侵攻する前から、特にソドルの軍事について内通させておりました」

イブをはじめ全員が、魔導師の言葉に静かに耳を傾けていた。元より耳鳴りの起こりそうなほど静かな洞窟が、一層の静寂に支配される。

「彼のお陰で、ソドルの内部情報について多くの事を知る事が出来ました。姫様を追討するために魔獣が人間界に送られた事。ソドル軍のアルバ最高司令が人間界に行き、数日後重症で神殿に運ばれた事。彼を追つて、ガ口大司祭も人間界に赴いた事など……。姫様が

人間界に行かれた後のソドルの情勢は、彼の働きで全て把握できま
した」

「それで、それと人間界が襲われるのと、何の関係があるの？」

声の主は夢斗だった。これまでの魔導師の説明と、人間界への侵
攻の関連性のはっきりと解っていないからの発言であろう。

イブも夢斗と同じ疑問を持っていた。しかし、彼は人間であるが
故に関心が強く、その分いち早く情報が欲しかったのだろう。それ
には至極納得した。

「はい。以前、人間界と魔界には大きな隔たりがありました。しか
し、最近になって魔界と人間界間での次元転換が頻繁になり、魔界
に住まう我々にとって人間界はぐっと身近な世界になったのです」
イブと夢斗には、それについて思い当たる節がいくつもあった。

二人同時に互いを見合わせ、目線で合図を送る。確かに自分が人間
界に行つてからというもの、魔界からの使者たる追討の魔獣達や、
アルバヤガロといったソドルの中枢の直々の来訪と、ひっきりなし
に人間界へ魔界からの接触があつた。

「それと何の関係が？」

再び夢斗。まくしたてるような刺々しい問い方からは、明らかな
苛立ちが見て取れる。

無理も無い事だ、と彼女は心の中で強く感じた。もし、自分が自
国に他国の軍が攻め込むという情報を知れば、すぐさま軍事を担当
する者を問い詰めていただろう。

「兼ねてより、我々魔導師達やアリンズ軍の幹部達には、『いずれ
ソドルは人間界をも侵略するのでは』との懸念がありました。しか
し、彼等の人間界侵略を待たずして、此度の侵略戦争が勃発したの
です」

「アリンズへの侵攻ですね」

と、今度はオズワルド。敬愛する父と、尊敬する兄を殺された彼
にとつてすれば、今回の侵略戦争には並々ならぬ感心があるのだろ
う。それは、家族はおろか国そのものを失ったイブにとつても同じ

だった。

「はい。彼等はこの戦争でアリンスを屈服させ、領土を更に広げました。他の小国ではソドルに敵わない事から見て、魔界はほぼソドルの手に落ちたでしょう。そんな彼等が次に何をするか。それが貴方に分かりますか？」

魔導師は声色を変えたりせず、あくまで冷静な口調を保ったまま、オズワルドに訊いた。

彼の答えを待たず、更に続ける。

「力を手にした者が何を望むか。更なる力です。おりしも、人間界の位置付けが、『容易に侵攻できる新世界』という認識に変わった、という事も重なってしまいました。これらの事から考察できる結論は――」

一同は、一見荒唐無稽にさえ聞こえる侵攻計画を、理路整然たる説明で裏付けていく魔導師の言葉に息を飲む。説得力があり筋が通っている説明には文句の付けようがなく、彼の口から語られる言葉は事実であると、その場の誰もが信じ切った。

そんな周囲の反応を知ってか知らずか、彼は更に畳み掛ける。

「ソドルの人間界侵攻計画。これは生まれるべくして生まれたのです」

抑揚のなく冷淡な言葉を前にし、全員が釘付けになる。

「生まれるべくして……。そんな……」

しばらく沈黙が流れた後、夢斗が我慢出来なくなったのかぼそぼそとしゃべり出した。ソドルの新たな侵略目的が人間界だと知り、ショックを隠せないのがよく分かる。うつ向いて小さく漏らした後、誰にも聞き取れない位小さな声で呟き続ける。

「……。ただ、ひとつ重要な事は、人間界侵略にはまだ時間がある、ということですよ」

夢斗を勇気付けるかのような魔導師の言葉。それに励まされたのか、夢斗は顔を上げその表情にわずかな活気が宿る。

「それって、どれくらい？」

イブが訊いた。この猶予次第で、転生が出来るか否かが変わってくるのだ。

突如として現れたとんでもない侵略計画に驚かされ忘れていたが、彼女の本来の目的はこれである。

しばらくおもんみる仕草を見せてから、魔導師が言った。

「これは私のおおまかな予測ですが、早くても二週間以上、長ければ三ヶ月はかかるでしょう。アリンスを攻め寄せた時の兵の疲労や損害の回復に時間が要りますし、何より人間界まで兵を飛ばせる魔導師の育成に一番時間がかかります。兵糧や物資の調達は、ソドルのような軍事大国ではそも時間もかかりませんし、もう既に完了していると見た方が妥当でしょう」

それはもつともな推察なのだろう。イブは直感でそう感じた。

次元転換を行えるほどの者は、イブやガロをはじめとする極一部の者しかいない。また、何度か次元転換を行った者でも、一人で、それも戦争をする時のようなほど大量の人員や物資を送れるようになるまでには、相当な時間がかかるのだ。次元転換についてろくに学んでいないアルバが人間界に来たのは、彼の類稀なる強力な魔力によるし、不完全な技術の為、人間界に着いてすぐの彼は本調子では無かった。

「ソドルの手がこれまで人間界に及ばなかったのは、我々アリンス帝国という驚異に晒されていたからです。我々もソドルに対し武力をいつ行使するか考えあぐねていた時期もあり、向こうもうかうかと次元転換技術の向上に至れなかったのでしょうか」

「じゃあ、ソドルがワタシ達に攻めこんだのも、最初から人間界侵略が目的だったの？」

念を押すつもりで訊いてみる。仮にそうであったとしたら、姫であった自分としてみれば、やりきれなくなるだろう。何より、その為に自国が滅んだという事に、更なる憤りを覚える事は必然だった。「その可能性は低いでしょう。第一、我々との戦争に勝たなければなりません。滅びたとはいえ、アリンスもソドルに引けをとらない

大國。わざわざリスクを冒してまで攻め込むには、いささか無謀すぎます。おそらく、全軍事の最高司令権が不自然にアルバ司令に移行した事から推察すると、あまり関連はないでしょう。それにこの計画そのものが、人間界が身近になった事が大前提だと考えられま

す」

「確かにそうね。勝てなければこうならないはずだし……」

考える仕草を見せながら、誰にも気取られぬよう心の奥で安堵する。国が彼等の野望の足がかりだった、という事だけはどうしても聞きたくなかったし、受け止めることもできないだろう。それに、奴等に散々弄ばれた拳げ句、夢斗の世界まで襲われるというのは、自分にとって究極の二重苦だ。何より、夢斗には国や家族を失う哀しみなど、感じて欲しくなかった。

「ねえ、仮にその計画を止めるとして、ワタシ達はどうすれば良いの？」

転生についても重要だったが、それよりも例の計画についての情報欲しかった。

「止める、いや止められる方法は一つだけあります。ソドル軍は神殿を中心とした統制機構で動いています。彼等は最高司令官よりも大神殿の存在そのものが重要なのです。彼等を止められる唯一の方法は、大神殿を攻落する事です」

何とも分かりやすい結果になった。イブはそう痛感して、いつしか拳を強く握りしめていた。

第八章 第一話 外の空気（前書き）

この話を持って、新しい章に進みます。では、どろどろゆっくり。

第八章 第一話 外の空気

「外の空気を吸われますか？」

話しが一区切りついた所で、魔導師が口を開く。

特に断る理由が無いので、無言で首を縦に振った。遅れて夢斗とオズワルドもそれに倣う。

「では……」

魔導師は小さく呪文を唱えた。直後、視界が光で満たされ、静寂がやってくる。次元転換が行われているのだと、今度はすぐに気付いた。

「うっ……」

分かっていたとは言え、次元転換の時の光の強さは格段に強い。たまらず、瞼を固く閉じた。

そのうち、光も静寂も消え去る。直後、洞窟の中とはまた違った空気の匂いが、彼女の鼻をくすぐった。わずかに遅れて、今度は暖かい陽光を、彼女は感じた。

イブが目を開けると、そこは夕焼け空の真下に広がる小高い丘だった。膝丈ほどの下草が風になびく。草の浅黄と夕焼けの朱色が交わる。一見、魔界に来たときと同じ場所に思えたが、遙か彼方に山脈が見え、眼下には小川と広大な平野が広がっている。

辺りを見回すと、洞窟にいた時と全く同じ配置で、夢斗やオズワルド、魔導師がいる。

「ここは洞窟の真上に当たります。どこの国領にも属さない地域です。敵からの脅威はありません。帰りたくなったらこれに触れて下さい」

魔導師は一同に向けてそう言うと、無造作に置かれた人の頭ほどの石を指差した。

洞窟内には時間を知る手だてが一切無く、かてて加えて寝てしま

ったイブにとつてすれば、今がどれくらいの時間帯なのか知れたのは願ってもない事だ。それに、冷え切った空気とは違う、適度な乾燥と草の匂いの薫る空気もまた、彼女にとって新鮮だった。

「ねえ、イブ」

丘の斜面で二人きりになった所で、夢斗が唐突に切り出す。

「何？」

「何か、良い方向に進んでいる気がするんだけど」

「そうね……」

イブもそう感じていた。これまで非協力的な態度を取っていた魔導師が、ソドルの人間界侵攻の報を受けて、わずかだがやる気になっている。ソドルを止める為の手だてを、さも兵士を鼓舞する将の様に語っていたし、何よりこれまでとは態度ががらりと変わっているようにさえ感じた。うまく説得出来れば、彼を協力させられるかも知れない。その可能性は、この時点で大いにあった。

「俺さ、イブが人間になる為にする事も、奴らが人間界を攻めるのを止めるの事も、結局やることは同じだと思っただけ……」

「そう、同じよ。でも、いずれにせよ難しいわ……。相手は、ワタシの国よりも強力な軍事国家。一筋縄ではとても敵わない」

そう言って、腰の刀に手を触れる。これまで幾度と無く世話になったこの刀に、またもう一仕事して貰わなくては成らない。その為には、自分がしっかりしなくてはいけない。そんな決意を籠めるつもりで、ぐっと柄を持つ手に力を入れる。

「夢斗……」

「ん？」

「ワタシ、今から魔導師を説得させてくるね」

そう言っただけから返事を待たずに立ち上がる。背後から、
「頑張れ」

と聞こえ、彼女はそれに右手を掲げることで応えた。

魔導師に会うために、最初に訪れた所へ向かう。その途中、

「あれ？」

イブは視界の片隅で動く、魔導師の後ろ姿を見た。

(あれ。持ってるのって……)

全身をローブで包んだ魔導師は、難儀そうに何か大きな物を担ぎ上げている。

人の大きさほどもある麻袋。それは、突如として現れた男を入れた物だった。それを裏付けるように、何となくだが人の形が伺えた。イブは魔導師の行動を不審に思いながらも、後をつける事にする。気取られぬよう姿勢を低くし、足音に細心の注意を払って前進する。幸い、絶えずそよ風が吹き草をなびかせ、それによって足音は大部分消えた。

つけることしばらく、魔導師は先程の丘とは、また違った場所に行き着く。手入れの行き届いた植え込みに囲まれ、その中にぽっかりと開けた空間になっている。その空間は芝生が植えられており、綺麗に刈り揃えられた芝生の中心に何やら無機質な物体が鎮座していた。

遠くからでも分かる、どっしりとした重量感。長い歴史を刻んできた、貫禄のあるたたずまい。長方形で重厚な存在感を放つそれは、彼女もどこかで見たことのあるような気がした。

「お墓？」

魔導師は物体 墓石の前に立つと麻袋を下ろし、口を開けて中の遺体を取り出そうとする。しかし、丈の長いローブが邪魔して、作業がどうも上手く行かない。

見るに見かねた彼女は、植え込みの影から飛び出し、魔導師に駆け寄る。

「手伝うわ」

「姫様……。ありがとうございます」

魔導師は丁寧な謝辞を述べると、イブと共に遺体の運び出しに取りかかった。

第八章 第二話 墓石の前で

魔界からの逃亡時にいくつもの死体を目の当たりにしてきた彼女でも、流石に遺体に直接接触れるといった事に多少の戸惑いを感じた。しかし、任務の果てに亡くなった男の事を思うと、弔いの気持ちの方が強くなり、自然と目頭にこみ上げる物を堰き止められなかった。「ありがとう御座いました」

全ての作業が終わった。男の遺体は今、墓石の下で永遠の眠りにについている。墓石の亡くなった男の名を刻み終えた魔導師の言葉には、まごうことなき深い感謝の意が籠められている事を、彼女は肌で感じ取る。

「いえ。彼の最期を看取れて良かった。彼は、本当に最後まで国の為に尽くしてくれていたのだから……。もう滅んだ国の為に……。」言葉に詰まる。戦争に敗れ抗う意味の無い中で、必死に国を思って死んでいった男。面識など有るわけが無かったが、一国の姫として、そして何より、国を愛する者同士として心の底から感謝したい。「ありがとう……」

墓石に刻まれた男の名前に手を触れ、涙混じりにそう捧げた。

「姫様……。姫様に最後を看取られて、彼もさぞ幸せだったでしょう……。さ、皆が待っています。行きましょう」

うつむき丸くなった背中に、魔導師の手が触れる。冷静な印象を持つ声色とは裏腹に、とても温かく優しい感触がした。

「ええ……」

イブが踵を返す。その際、頬を伝っていた涙が、風に持っていかれて宙を舞う。夕日に照らされ煌めく涙は、墓石にあたって消えた。彼女はこれ以上泣くのを止め、顔を上げた。と、その時、沈みかけた気分の二人の間をすり抜ける様に、強い風が吹き抜ける。大分長いこと吹き抜ける強風は、何かを吹き払ってどこかへ消えた。

しばらく経ち、風が治まる。

「！ アナタは！？」

いきなりの強風に顔を覆っていたイブは、目の前の事実には驚愕する。

目の前にこれまで立っていた魔導師のフードが、先程の風で外れていたのだ。ローブと一つなぎのフードは今、魔導師の背中にあつた。

これまで隠されていた魔導師の顔。細長くはつきりとした輪郭とそれによく似合った長く白い髪。少し垂れた感じの灰色の目は、これまでの印象とは違う優しさを醸していた。幼さやあどけなさなど感じなさせい、妙齡の雰囲気漂わせている。年齢はイブより上であることはまず間違いなさそうだ。そんな思いの外柔らかな顔つきの彼女が、イブの目にありありと映っていたのである。

「女性……、だったの」

「はい。隠すつもりはありませんでしたが……」

これまで聞いた魔導師の声では無かった。顔と調和の取れた、落ち着いた女性の声。

厳格で無愛想という魔導師へのイメージが定着していたイブにとつてすれば、これは寝耳に水の事実である。そう考えると、背中に触れた手の優しさにも納得がいった。それこそ、子どもが居てもおかしく無さそうな彼女。見れば見るほど従前の印象はうち砕かれ、代わりに意外すぎるほどの真実に目を疑うばかりだった。

第八章 第三話 シア（前書き）

いやー、もう、ホント……。最新話を更新するにあたってなんと
言っているんだと……。こんだけの文章をUPするのにどれだけ時間かか
っているんだと……。もうため息しかできません。

第八章 第三話 シア

一流の魔導師を志すシアは、毎日の様に修行に励んでいた。

その日の修行は実戦を想定した魔術による戦闘訓練だった。日々
の鍛錬の積み重ねと、それらをどれだけ柔軟に使いこなせるかが問
われる総合的なものだった。

彼女には自信があった。

「はあ……、はあ……、はあ……」

神殿内には、己の自身をうち砕かれた彼女の片息が木霊する。シ
アは想像を絶する苛酷さと、難易度の高さに屈していたのだ。今日
まで必死になって体得してきた技術を十分に発揮する事が出来ず、
自身の力の無さが痛みとなって彼女を襲う。

「もう終わりか？ 腰抜けめ」

直々に稽古を付けていた父親がそう吐き捨てる。彼女は否定する
事ができず、己の無力さを噛みしめながら、その言葉を甘んじて受
ける事しか出来なかった。高僧は踵を返し、そのまま神殿の奥へと
引込む。

父の力は圧倒的だった。幾重にも張り巡らされた罫、抜け穴の一
切無い攻撃の流れ。彼女はそれに翻弄されるばかりで、何もできな
いまま力尽きてしまったのだった。

身体が重い。めまいがする。息はとうに上がってしまい、視界が
どんどんぼやけていく。既に立つ気力も体力もない。床にうつぶせ
になって、意識を保つのがやっとだった。

気を失いそうなシア。そんな彼女に近付く、一つの影があった。

「大丈夫ですか？」

(！)

後ろから声を掛けられはっとする。しかし、身体は徹底的に打ち
のめされてしまい、首を回して声の主の顔を確認する事すらできな
い。意識もとうに薄れており、声色から声の主が男だという事以外

何もわからない。

そうするうちに、彼女は意識を完全に失ってしまった。

シアが目を醒ますと、そこは神殿の裏手に流れる小川のほとりだった。彼女は涼しげな木陰に寝かされており、修行で受けた傷には丁寧に包帯が巻かれている。身を起こして辺りを見回すと、彼女の隣で熱心に薬草を煎じ詰めている男がいた。

「あなたは誰？」

「……」

声をかけてみたが、よほど熱心に煎じているのか作業をやめようとしなない。ふつつつと煮立つ鍋を丁寧にかけ回している熱心な横顔に、彼女の声は届いていないようだった。

「あの」

「はいっ！ ああ、気がついたみたいですね」

シアは再び呼びかけると同時に、彼の肩を軽く叩く。すると、男は彼女が眼をさましたことをここにきて初めて気づいたようだ。相当気を入れて薬を煎じていたせいか、いきなり肩を叩かれたことに驚いたようだ。

男は神殿に勤める見習いの僧侶だった。色白で髪は短く、くわえて男性にしては華奢なか体つきが印象的な男である。シアは彼のことを、神殿内で何度か見たことがあった。

「あなたが、私を介抱してくれたの？」

「ええ、かなり苦しそうにしてらしたので。お気分いかがですか？」
そう言われて、自身の体の様子をうかがう。かなり丁寧な処置がなされたようで、痛みのはほとんどは引いていた。

「あなたのお名前は？」

シアはかねてからの質問をする。何度か見たことのある相手だけに、以前から名前を知りたかったのだ。

「はい。ソラ・スイシードです」

微笑みながらそう答える。

彼の屈託のない笑みに、シアは一瞬どきつとする。彼女が想像していたよりも自然で真つ直ぐな心のこもった笑い顔。とても素敵な微笑みを持つソラに、彼女は心奪われるより他なかった。

「どうかしましたか？」

シアが黙り込んでしまったのを気遣ってか、今度はソラが彼女に声をかける。

「いえ、別に……。あの、本当にありがとうございます……」

「お役に立てたようで光栄です。私も介抱した甲斐がありました。

そういえば、貴女は司祭のご令嬢でしたよね。確か、シアさん？」

「はい、その通りです。よく知ってますね」

「司祭がよく貴女のことを名前で呼ばれているのを聞いていましたので」

「そうなの」

同じ神殿に通っており歳も近いせいかうち解けるのに時間はかからず、二人は大分長いことせせらぎを聞きながら話し込んだ。そのまま隔意なく親しみを深めていくのだった。

第八章 第四話 敬意を捨てる代償

「この腰抜けめ」

その日も神殿内に父の怒声が木霊する。叱責の矢面にたたされていたのは、ほかの誰でもないシアだった。

痛む体を引きずって神殿の外へ。ほどなくしてあのせせらぎのほとりにたどり着く。

「シアさん」

せせらぎで待っていたソラが彼女に駆け寄って肩を貸す。

「はは、今日もだいぶ派手にやられちゃった……」

「大丈夫ですか？ はやく横になってください。しかし、実の娘をここまで傷つけるなんて」

そう言いながら、彼女の傷を手当てする。彼の手からオーラが放出され、シアの患部を包み込む。

この程度ならばソラの手を借りずとも、自分で十分に癒すことができた。意識を失っていないければ、自己治療は可能なのだ。だが、シアはこうして、せせらぎの音を聞きながらソラに傷を癒されることに、他の何にも換え難い安心感ややすらぎを覚えていた。

「気にしないで。お父さんはわたしや国のためを思っただけであえて厳しくしているの。それに、この道を選んだのはわたし自身よ。はじめから、こうなることへの覚悟はできていた……」

「シアさん……」

「ソラ……」

何度かここで逢瀬を重ね、夢を語り合ううちに、二人の間柄は特別なものとなっていた。

見つめ合う二人。鼻息がかかりそうなほど顔が近い。ほんのりとしたまどろみの中へ、二人で一緒に身を委ねていくときの快感は、余人の知るところではなかった。

そんなときだった。

「シア！」

「！」

せせらぎを掻き消すようにして、シアの父の怒鳴り声が木霊した。その怒声によって二人はまどろみから引き戻され、二人きりの時間を邪魔された気恥ずかしさから、互いに目を見開いて慌てふためく。

「お父さん」

「お前の魔術がいつまでたっても未熟なままだと思えば、このような軟弱な若造と馴れ合っていたのが原因だったようだ。来い！ そんな軟弱者はお前にとって無価値だ！」

シアを強引にソラから引き離そうとする傍ら、ひどい言葉でソラを罵る。

「待って。彼はわたしの治療をしていたの」

ソラの存在の否定が彼女に憤りを生んだ。ただ、相手が尊敬する父親であることと、ソラの目の前であることが、彼女の声色の高潮にまつたをかける。

「治療？ ほう、こんな未熟者にそんな大層なことが出来るのか。」

「フン！」

「うわあっ！」

シアの父はソラをたしなめるように一瞥すると、とまどうことなく攻撃する。どこからともなく電光が走り、ソラの体に殺到する。

彼はなす術なく電光に弄ばれ、全身を痙攣させて地面に突っ伏した。

「ソラっ！」

「シアさん……」

地面に倒れ伏し、すぐるようにシアを見上げる。直後、糸の切れた操り人形のように、力無く昏倒して動かなくなった。たった一撃であっても、彼の体の損害は予想以上に多大であった。

「ひどいわ！ なんで彼を……」

「他者を癒すというのなら、まず己を癒せて当然だ。それに、この程度の攻撃さえも防げぬ者に、人の娘に手を出す資格などない。いいか、これ以上この能無しと関わり合うことは金輪際禁じる。良い

な」

シアの腕を掴んで、ぴしゃりと言いつつ。そのまま踵を返すと、彼女の腕を掴んだまま足早に立ち去ろうと歩を進めた。

しかし、シアはその足取りに従う気にはなれなかった。ソラが未熟なのは確かだが、あの言葉は悪辣すぎる。ソラへの暴力も許せない。暴力の正当化も単なる屁理屈だ。これまで尊敬していたが、自分の交際にまで口出しして欲しくない。もっとも、あんな酷いことをソラに対して行った父親に、もう敬意を払う必要などないが。

ソラへの想いの強さと突発的な感情が、彼女の尊敬心を憤りに変えていた。

「離して。あんなひどいことをする人だったなんて思わなかった」
いたく冷静な口調で言いつつ。とげとげしい言葉の裏には、父を見放した彼女の決意があった。

「フン。あの男に骨抜きにされたのか。お前は見込みある娘だと思っていたのだがな。どうやらあやつと同じ、どうしようもない生来の腰抜けだったようだな」

シアの父はびたりと足を止め、背を向けたまま言った。言い終わるとすぐに彼女の腕を掴むことを止め、乱暴に振り払った。

シアは自由になると無言で反転する。ソラの治療をしなければならぬ。

「あの男のところに行くのか。私は認めんぞ。どうしてもというなら、お前との関係も今日限りだ」

今日限り。その言葉に少々の躊躇いを感じはしたが、それも悪くはないだろう。いずれ父親のもとを離れ、魔導師として自立するつもりだった。後味の悪い独り立ちではあるが、いつまでもあの人でなしに頼りすぎることには意義を見いだせない。

「そうね。これで終わりね。だから何？ それで引き留めているつもり？」

振り向こうともせず、互いに背中を向け合ったまま言い合う。

「……。誰のお陰でここまで成長出来たと思う。それに、私の紹介

無しで神殿の高僧になれるとも思っているのか。今のお前は私の下で技術を積み。色恋沙汰は断じて許さぬ」

「一人娘がいなくなつて寂しいのね。あなたみたいな人がいるような所なんかで、働きたくないわ」

そうこうしているうちに、シアはソラのもとに辿り着いた。彼の側までくるとすぐさま治療を始める。想像以上にその傷は深く、全身に無数の傷跡があった。ソラの傷を見て、ますます決別の意思が硬くなる。

「馬鹿者が。そんなに私が気に食わないのなら、お前の望むとおりにしてやる……」

「そう。それは願ってもないことね。感謝するわ」

シアは治療を止め、ゆっくりと立ち上がつて父と対峙した。彼の眼には、寂しさをごまかしたような怒りがこもっているように見えた。

「メスムカバ」

青白い電光が彼の背後から躍り出るやいなや、シアに向かって一直線に殺到する。その一筋一筋が明確な殺意を内包していることを、彼女は肌で感じ取っていた。

「ヤズラカワ」

すかさず自身とソラをかばうようにして防護壁を展開する。しかし、彼女の作り出した防壁では、父の電光を防ぐには不十分だった。「あっ！」

防壁はいともたやすく破られたが、彼女がそれを知ったのは自身の体を激痛が駆け抜けたあとだった。

「シアさん！」

ソラはシアの治療で意識を取り戻していた。彼女が膝をつくの同時に声を荒げる。

無茶をした。彼女は後悔していた。まだ修練での傷が癒えきつておらず、ましてソラの治療をしたあとで強引に力をひねり出して展開したような防壁では、父の攻撃を防ぎ切ることなど至極困難だった。

た。

その場に力なく膝をつく、すぐさまソラに助け起こされる。しかし意識がはつきりせず、視界がゆがむ。彼の声も宙でむなくこだましているようで、何を言っているのかわからない。体の末端の感覚がないのに、心臓がやたらと強く、内側から叩きつけるかのよう鼓動している。

「フン。所詮はその程度。己がどれほど卑小な存在かわかったか」
彼女の聴覚がかるうじて父の言葉を拾う。

「このような娘など、いてもいなくても同じ……」
父はその懐から数枚の呪符を取り出すと、それを扇状に持っておもむろに宙に放つ。

「やめろ！」

ソラが吼えた。直後に彼からの助けはなくなる。シアのことを守ろうとして飛び出したことは明白だった。

「小癩な」

直後、どこからともなく別の呪符が躍り出て、ソラに殺到する。

ソラはその存在に気づく間もなく、強烈な閃光を再び浴びて動かなくなった。

(ソラ……)

視線の低くなった視界の中で、ソラが倒れる。助けようとして起き上がるうとするが、全身に蓄積したダメージは想像以上の怪力をもって彼女を地面にねじふせていた。

いつのまにか、すっかり呪符に包囲されてしまっていた。

「ナルクテツエカトドニ！」

網膜の焼けそうな光の向こう側で聞いた父の言葉は、彼女との決別と同時にソラとの別れを意味していたが、そのときの彼女は今の自分がどうなっているのかさえわからなかった。

第八章 第五話 不安

どれだけ時間が経ったかわからない。ただ、まぶたをじりじりと焦がす光が、彼女を覚醒へと促した。目を開けると板張りの天井が見え、鼻の中は木の匂いで満ちていた。簡素なベッドに寝かされているようで、周囲には同じようなベッドとその上で横たわる負傷者が並んでいた。シーツの絹ずれに混じって、小さなうめき声が聞こえる。

(ここは……)

病院と答えを出す瞬間、部屋のドアが開く。

「あら。目が覚めたのね」

扉の向こう側から現れたのは、艶やかな黒髪をした妙齢の女魔導師だった。格式高い厚手のローブを身にまとい、首からはその国の紋章と思しきペンダントを下げている。

「ここはどこ？」

「ターファー山脈第四魔導師訓練区域の中の脱落者収容所よ」

「ターファー山脈……」

聞いたことがない。そもそも、ソドルに『ターファー山脈』なる山脈は存在しない。それに、ソドルでは『魔導師』とはいわずに『僧侶』かあるいは『神官』という。国外の地域に飛ばされたということは明白になった。

「あなた。ここの訓練生じゃないわね」

「!?! どうして」

いきなり核心をつかれ、一瞬背筋が跳ね上がる。

「ローブが違うわ。それに、あなたが発見されるすぐ前に、この近辺に強い魔力による不可解な干渉があったの」

「……」

「ただ、あなたはそのお陰で今も生きていられるのかしらね。干渉があったからこそ、警戒中の教官がすぐに駆けつけることができた。

収容されたのは四日前だけど、その時のあなたは全身傷だらけで虫の息だったのよ。干渉した魔力の強さからみて、かなり無茶なことされたみたいね。どこから来たの？」

「それは……」

答えようとして口籠もる。次元転換による他国領内への移動は、それが他者からの強制的なものであったとしても、国防上の観点から厳禁とされていた。これを無視して他国の領内に侵入し発見されようものなら、厳しい拷問を受けることは免れない。その拷問の最中に命を落とす者もいるが、多くの場合、自動的に死刑となるのが常であった。

「言えないのね。それも当然、あなたはソドルから来たから」

(どうしてそんなことまで!?)

再び背筋が跳ね上がる。しかし、今度は言葉が出ない。驚きよりも、自身のことを正確に言い当てる彼女を疑問に思い、それと同時に恐怖さえ感じていた。

「近辺の国の中でもね、ソドルの者だけなの。アリンスの魔導師の作る結界に干渉できる能力があるのは」

「じゃあ、わたしは殺されるのですか」

おずおずと顔を上げ、女魔導師の顔を覗き込む。彼女はたしなめるような目つきでシアを見ていた。彼女の視線が、全身を舐めるように這いずっているのがわかる。

「いいえ、そんなことはしないわ……」

彼女はゆっくりとシアににじり寄る。吐息が耳にかかるほど近づいたところで、背中を華奢な指が這う。だが、全身の痛みと過度の緊張下にいたシアに、この生暖かい感触は不愉快によく似ていた。

「あなたを殺すなんて、もったいないわ……」

「じゃ、じゃあ、どうす……」

耳を舐められる。濡れた生暖かい舌先が、そつと耳たぶをなぞる。

「あなたには、これからアリンスの魔導師として働いてもらわなくちゃ……」

背筋がぞくぞくする。それが耳を這い回る舌先によるものなのか、それとも自身を待ち受ける見通しのきかない未来にたいするものなのか。今の彼女にはそれを判断する余裕など、あるはずもなかった。

第八章 第六話 嵐の前の静けさ

実父からの勘当から三年の月日が流れていた。シアはソドルと対立関係にあるアリンズ領内にいた。

「こんなにゆつくりできるのは、何ヶ月ぶりかしら」
潮風に髪をなびかせながらつぶやく。

シアがアリンズの魔導師として正式に働くようになったのは、アリンズ領のターファア山脈で発見されてから半年経ってからだ。その時期から、ソドルとアリンズは魔界を二分する強国同士であり、競い合うようにして国力の増強に躍起になっており、互いに相手国の軍事や内政状況の情報はのどから手が出るほど欲しいものであった。

そんな中、アリンズにソドルの神殿事情や内部情報に明るい者が現れたことは、願ってもない僥倖であった。加えて、彼女は貴重な情報だけでなく、彼女自身が魔導師としての能力に長けていたことは、勿怪の幸いであったに違いない。

シアは自身の実力と才能もさることながら、そのような事情もあいまって、アリンズの魔導師として高位に就いていたのである。

「いい風ね。久々のバカンスは気持ちがいいわ」

シアの後ろには、彼女の才能を見込んだ色癖の魔導師 シェリ
ーがたたずんでいた。

二人は多忙を極める魔導師業の合間を縫って、アリンズと隣国との国境に程近い海岸で何ヶ月かぶりの休暇を過ごしていた。

白亜の砂浜と、水平線まで青一色の海。そして、雲を浮かべて広がる澄み切った青空が、二人の心を洗っていく。ソドルからの斥候がうつろいいたり、国境付近の神殿に多くの総著や兵が集められたりと、こここのところ両国間でも軍事的緊張は絶えなかった。そんな中、ふたりがこうしてくつろげるのは、嵐の前の静けさでもいうのであろう。視界のはるかかなたにある入道雲の真下では、海水と大気

が時化となつて吹き荒れている

「あら、誰かしら」

瞳の中を青一色に染め灌漑にふけるシア。そのすぐそばでシェリーがつぶやくと、彼女も現実引き戻される。

先ほどまでシアとシェリーしかいなかった砂浜に人影が見える。

快晴の砂浜に似合わぬ、剣と兜で武装した三人組。国境近くであるから、隣国の警備兵だろう。彼らはこちらの存在を最初から認めていたのか、まっすぐに彼女たちへ近づいてくる。

「ここで何をしている」

警備兵の中でも一階級上と思しき男が訊いた。両脇に従えている他二名より一回り年上に見える。両脇の二名は顔にまだあどけなさが残る青年兵で、大方、徴兵から開けて間もない新米兵と、予備役かあるいは昇進を逃した中年軍人であろう。皮肉にも、辺境警備にはもってこいの人材だ。

「休暇を楽しんでいるの。見てわからない？」

警備兵を一瞥し、長椅子に腰かけたたまシェリーが答えた。態度がどこか高飛車なのは、元来の彼女の性格もさることながら、ここが誰のテリトリーでもないからだ。アリンスの領地でも隣国の領地でもないからこそ、日々多国間との対立に奔走される彼女たちが骨休めの場所を選んだのである。

「貴様らはこの国の者だ」

警備隊長はシェリーの態度が癪に障ったのか、さらに居丈高な態度で訊き返す。しかしシェリーは悪びれるそぶりもおびえた様子も見せず、

「せっかくの休みなの、邪魔なさらなくてくださるかしら？ あなたたちみたいな首から下しか使われないようなのがいるから、わたしたちの仕事がなくならないのよ」

安息を乱されたことへの報復だろうか、シェリーはまったく言葉を選ばず、刺々しい口調でまくしたてる。魔導師は戦闘で傷ついた兵士や、軍隊の作戦行動を魔術の力によって補助するのが大きな役

割だ。高位のものは魔術で直接戦闘をする者もいるが、それはごく少数である。魔術による戦闘訓練を受けることがあっても、それはあくまで自己防衛のためであることが多い。

「貴様！ こっちに来い！」

警備隊長は激昂し、連行せんとシエリーの腕をつかみ椅子から強引に引き起こす。

ただ、この場所はどちらの国にも属していない。警備隊側の命令にシエリーが従う義務はない。

「離しなさい。非武装の、しかも女相手に力づくで。大の男が三人もそろっていないながら、なんて下賤な行いかしら。どうせ占領地でも好き勝手やっているんでしょう？ それとも、こんな辺境の警備隊じゃ占領地の楽しみにさえ交じれないから、こうやって憂さを晴らそうって魂胆かしら？ いずれにせよ惨めものね、田舎軍人なんて」

シエリーが警備隊長の腕を払いのけると、向こうはとうとう怒髪天に達した。腰の軍刀を抜き、切っ先をシエリーに向ける。

「貴様。軍人を罵るか！？ その罪、貴様の首をもって償え！」

たけり狂った切っ先を目の当たりにして、シアはその場に凍りつき、新米の二名はどう対処してよいかわからず互いの顔を見合っただたふたする。警備隊長の鼻息だけが、騰がり馬のそれのように、あたりの空気を震わせていた。

「あら、武器を取るのね。非武装相手になんて暴挙かしら。ここまですでしてしまえば、あなたがどうなるうと文句はないはずよ」

「何だと!？」

シエリーは怒りで微細に震える切っ先を前に、どこまでも冷静に相手を罵った。警備隊長の返答とほぼ同時か直前に、静かに呪文を唱え始める。

「クニンクソミウノ」

シエリーが呪文を唱えると、警備隊長の身体が宙に浮いた。彼は苦悶の表情を浮かべ、必死に首周りをかきむしる。

「せ、先生。いくらなんでもそれは……」

「安心しなさい。首から下を、一生使えなくしてあげるだけ」

シェリーの口調はどこか楽しげだ。警備兵たちを浜に認めるときから、こうすることを望んでいたような。そして、自身の思惑通りに相手が逆上し、つかの間の休息を乱されたことへの報復の口実を得て、さぞ満足げな様子だ。

突然のことに、新米兵たちはどうすることもできず、虚空でもかく上官を呆然と見守っている。

「あ……、ぐ……」

声というより、狭い空間から無理やり押し出した空気の流れでしかなかった。ぎりぎりと締まってゆく首を必死につかみ、命乞いをするような眼でシェリーに視線を送る。

「苦しい？ 『なんでもしますから助けてください』って顔ね。でも、もう許してなんかあげないわ。ベッドの上で死ぬまで後悔しなさい」

嬌声。高笑いとともに警備隊長の首が徐々にあらぬ方向へと捻じ曲げられていく。ついに骨ごとへし折られようかとしたその時だった。

「その人を離しなさい！」

若い男の声がした。

第八章 第七話 好色の切り札

「？」

その場の誰よりも早く、シアが声の方を向いた。

「誰？」

シエリーの顔から愉悦の笑みが消え、代わりにいぶかしむ気色があらわれる。楽しみに水を差されたためか、声色がとげとげしい。新手がまたもや軍人ならば、かまわず締め上げるだろう。彼女の不気味に釣りあがった眼光は、殺意さえにおわす鋭さだった。

（え？）

声の主は、警備兵たちが来たのとは別の方向にいた。海と反対側に広がる低木林のすぐそば。林と砂浜のちょうど境目のあたりに、凜とたたずんでこちらを見据えている。武器らしきものは持っていない。軍人然としたいかめしい雰囲気はなかった。

（なんで？）

男はこちらを見たまま近づいてきた。華奢な体つきだが歩き方はしっかりしている。彼女たちのすぐそばまで来ると、再び口を開く。「その人を、離しなさい」

殺意さえにおわすシエリーに対して、臆することなく言い放つ。

（ソラ）

突然の別れからどれだけの月日が流れただろうか。再開もまた突然で、驚きと同時に疑問が浮かんでくる。しかし、緊迫した状況下で歓喜の声を出すこともできず、ただ黙って彼の横顔を眺めていた。シエリーは男を上から下まで見通すと、

「あなたは誰？」

いやに平淡な口調で聞いた。

「彼らの同盟国の僧侶です。彼らの狼藉はわたしから謝罪します。どうかお許しを」

そういって、ソラは深々と頭を下げた。

「なぜ、あなたが謝るの？」

「いまここでことを荒立てては、近いうちに事態はもつと深刻なものになります。それこそ、一人二人の命では取り返しのつかない事態に発展しかねません。何がきっかけになるかわからない昨今です。今はなにとぞお引取りをお願いします」

ソラは再び頭を下げ、シエリーをなだめた。

快晴の砂浜が重い空気に包まれる。聞こえるものといえば、寄せでは返す波音と、シエリーによって吊るしあげられた兵士の苦しみもがくうめき声だけだ。

しばらくして、首を垂れるソラを睥睨していたシエリーは、その場の沈黙に耐えきれなくなったのか、首を横にやれやれと振って、重々しく口を開いた。

「わかったわ。ここはあなたに免じて許してあげる……」

口調に苦々しさが見え隠れするのは、ソラの誠意に折れざるを得なかったからだろう。悔しさの一切をなすりつけるような鋭い目で兵士を見上げ、小さく舌打ちしてから彼を解放した。

「あなたたち」

砂浜の上に片膝をつく兵士と、彼に駆け寄って介抱する青年兵二人。シエリーが彼らに声をかけると、彼らはおびえ切った眼差しで彼女を見上げた。

「消えて」

彼女がそう言うと、兵士たちは一目散に逃げ出した。軍人としての権威も勇ましさもまったく見られない、どこまでも無様な後姿であった。

「ソラ！」

その場の緊張が解けたのを皮切りに、シアの感情も溢れだす。何年間も封印してきたか、あるいは忘れかけていた感情だった。たまらずソラの元へと駆け寄ると、彼の肩へと腕を回しその胸に顔をうつめる。

「シアさん……」

「合いたかった……。ずっと……」

「二人とも」

背後から刺すような声。師匠からの聞きなれたものと理解するまでは一瞬だったが、夢うつつな気分はそれをどこまでも受け入れようとはしなかった。

「邪魔されたくない気持ちもわかるけど、事情を説明してもらおうかしら？」

自分の楽しみは奪われたためか、明らかに苛立っている。爆発寸前にも聞こえる彼女の声色に、ソラもシアも従わざるを得なかった。

(ソラ……)

「大丈夫です。また後で……」

シアの小さなつぶやきを拾って、ソラが答える。

「わかるでしょう？ 馬鹿は嫌い。続きは後でいくらでもさせてあげるから、今は私の言うことだけ聞きなさい」

「はい……」

「あなたは誰？」

「ソラ・スイシーダ。ソドルの僧侶です」

「そんなあなたが、こんなところへ何の用？」

「ここへは、同盟軍の視察に来ました」

「ここはアリンズとソドル、二つの超大国に挟まれた田舎みたいな国よ。そんな国の軍隊なんてたかが知れているわ。もっと重要な任務できたんでしょ？ 違う？」

「つ……。それ以上は言えません」

ソラは固く口をつむぐ。

そんな二人のやり取りを、シアは黙って見守ることしかできなかった。

「そうね。これから先のことを喋ってしまったえば、あなたの行動は反逆罪になってしまうわ。軍の重要機密ですものね」

「……」

シェリーのかまかけに対し、ソラは無言を貫いた。

「でも、これならどうかしら？」

シエリーは不気味に微笑んで唇を舐めると、左手をシアへと向けた。

「え？」

「！」

「ウドデレコ」

直後、シアの身体が宙に浮く。

「シアさんっ！」

「あははっ。さあ、言いなさい」

全身を大蛇が締めつけるかのような感覚が、一気にシアの自由を奪う。手足を動かすことはできず、体中の骨がきしきしと泣いている。息苦しく、辛うじて苦悶の声を出すことはできたが、呪文で対抗できるほど、シエリーの力はやわではない。実力からして、おそらくそれはソラにもいえるだろう。

「せん……せ……」

「シアさんをつ……」

「『離せ』って言いたいんでしょう？ だめ。あなたの本当の任務を言ってくれるまで、絶対に離しはしないわ」

「くっ……」

「言わないの？ 早く喋らないと、せつかく何年かぶりに再会した恋人が死んでしまうわよ？ あなたにできる？ ソドルの人間として任務をとるか、一人の男として恋人をとるか？」

嬌声をあげるシエリーとどうするべきか戸惑うソラを、シアは交互に見下ろす格好だ。

シエリーは明らかに楽しんでた。しかし、シアの苦悶する様ではない。敵対する国の人間が任務と私情とのジレンマに陥り、どちらを優先するべきか迷う様を見てだ。

徐々に視界が暗く狭くなっていく。見えない縄で雁字搦めにされていくような感覚に、いよいよ耐えられなくなってきた。ひどく限られた視界のすみに、身構えるもなす術のないソラが見える。

(最後に……、見れてよかった……)

ソラはとても真面目で誠実な性格だ。私情にかられ、自身の任務を、敵対国の上級魔導師に洩らすなどということはしないはずだ。シアが何のためらいもなく自分を占め上げたことにはいささか驚いたが、彼女が極度のサディストであることと、国防を担う重要な立場にいることを思えば無理もない。シェリーの目の前に敵対国の斥候が現れ、そのすぐそばに従順な弟子でもあり斥候の恋人が居合わせた。シアはその恋人というカードを切っただけのこと。

あまりに短い一生に少々の未練はあるが、それでも自分はまだ幸運なほうである。アリンスの山中で発見されシアに身元が割れた時点で、ほとんど運命は決まっていたのだから。魔法の腕を見込まれ、弟子として可愛がられたのは僥倖以外のなにものでもない。

「私の任務は……」

消えかけた意識の最果てで、苦渋に満ちたソラの声を聞いた。

「アリンスとの中立同盟の破棄と、ソドルとの一大侵攻作戦発動の打診です……」

ソラは苦虫を噛み潰すような顔をしていた。

それを認めた直後、拘束から解放される。地面に降りるや否や膝をつき、気絶しそうなのを必死になってこらえる。

「その話、もつとよく聞かせてくれるかしら？」

顔を上げて二人の方を見ると、シェリーはソラに歩み寄り、彼の顎を指先でなぞっていた。

「先生。ソラは……、その人に乱暴だけはしないでください」

「場合によっては、そうしなきゃかまね。でも安心なさい。あなたと同じように、たっぷり可愛がってあげるわ……」

シェリーは不気味に微笑むと、ソラの首すじにそつと舌を這わせていた。

「綺麗な肌ね。女の子だったらもつとよかったのに……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2460a/>

前夜 ~イブ~

2011年6月27日07時25分発行